
コードギアス 反逆の狂奏愛歌

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コードギアス 反逆の狂奏愛歌

【Nコード】

N7540N

【作者名】

ゆーたん

【あらすじ】

アニメ第1期を元にしたIF小説です。
ルルーシュを想うミレイとナナリーは、C・Cという謎の女性と出会い、
人の想いを願いを具現化する力を手にする。

ナナリーは兄のルルーシュを守るため
ミレイは恋人のルルーシュを守るため

そして大切な人を失ったシャーリーは……

コードギアス 反逆の狂奏愛歌

お楽しみください。

お気に入りに登録頂いた方、いつもありがとうございます♪

反逆の前奏曲（前書き）

IFが苦手な人にはダメかもしれません。
ルルミレな感じにしようと思っています。

反逆の前奏曲

焼け爛れた元野原だったはずの場所には命を失った人間の器が無残にも積み上げられている。所々から煙が立ち上りなんとも言えぬ匂いを発生させていた。

皇暦2010年8月10日……神聖ブリタニア帝国が日本に宣戦布告した日。

中立を謳う極東の島国と超大国ブリタニアの間には、日本の地下資源をめぐる根深い外交上の対立があった……

結果、敗北した日本は帝国の属領となり自由と権利と名前を奪われた……

A R E A 1 1

それが敗戦国日本の名前新たな名前となった。

黒髪に紫電の瞳を宿す少年は、足と目の不自由な少女を抱き締めながら、癖のあるブラウン系頭髪の同じ年くらいの少年に感情と決意を吐き出していた頃、今では落ちぶれてしまった元名家の令嬢……美しくきらめく金色のウェーブの掛かった髪を揺らしながら自分祖父であるうその人物の目を、鋭く輝く蒼眸瞳にその人物を映し出す。

「どうしても……引けぬのか？」

「はい……お爺様」

「そう……か、行くか？」

「はい……殿下の所へ……」

自分の孫娘の強い瞳に「ふふ」と嬉しそうな笑みを浮かべ、彼は皺のある大きな掌で彼女の頭を優しく撫でた。その優しい感触に少女は目を瞑り口元には笑みを浮かべる。

「なら、お前と殿下の為の庭を…城をプレゼントしよう。殿下を任せたぞ…ミレイ」

元は超大国ブリタニア皇族第11皇子・第17皇位継承者であった少年は、戦前に妹と共に外交手段と言う名の人質として日本へと送られていた。その時唯一少年と少女が心を許した少年枢木スザク…、戦後はその彼の本家へと移り住み数ヶ月が経っていた。分家でも本家でもブリタニア人の少年と少女の扱いには差はなかった。

いつもの様に居心地も生きた心地もしない家を飛び出した少年は、足の不自由な妹を背負いながら舗装などされていない荒れた道をひたすら歩く。少しでもあの家にいる時間を失くしたい、そんな気持ちからいつも二人で時には唯一の友人とした少年と三人で日が暮れるまで家には帰らない…、それが日常になっていた。

ぼろぼろになった靴が土を踏み締める音を鳴らしながら、一歩一歩とゆっくりと歩みを進める。元々体力的に優れてるとは言えない少年は、成長する妹の重みを実感すると共に自身の体力のなさを痛感する。

「お、おにいさま」

背中から聞こえる妹の声…、だがいつもと違ったのはその声に怯

えや恐怖といった感情の色がこもっていた。その妹の様子に少し驚いた少年は自分の正面へと視線を移した。この辺りでは見慣れない白い色をした外国製の車。運転席から降りてきた男はサングラスに黒いスーツ、いかにもな装いの大人の男。その男をキッと睨みつけつつ様子を伺っていると、その男は助手席側の後部座席の方へと回り、ガチャッと丁寧にゆっくりとドアを開け頭を下げる。

ふわりと車から地面に降りたその人物は、今まで少年が踏み締めていた音と同じ音を鳴らしながらゆっくりと二人の方へと近づいてくる。つばの広い白いハットをかぶり、そこから伸びる輝くほどまぶしい金色の髪、スカイブルーのワンピースを着た少女の姿がそこにあった。

「ミ……レイ？」

小さく呟いた少年は、疑問と驚きの表情を浮かべつつ脳内の自身の記憶を漁った。まだ二桁にも満たない人生の読み漁りは意外と早く、その中で目の前の少女と重なる少女の名前……それをとっさに呟いた。

その呟きが聞こえたのか、それとも別の何かなのかわからないが少女は令嬢らしくふわりと微笑む。帽子をとり自分の服や体が汚れるのもためらわず、少年と少女の前で肩膝をつく。

「ミレイ……なのか？」

「はい……、お迎えにあがりました殿下。あなたをお守りするために……」

少女の蒼眸がまっすぐに少年を瞳に映す。少年も同じように少女を瞳に映しこむ。無意識の内に少女へと差し出した片手に気づいた少女は、優しくゆっくりと両手でその手を包みこむ。

「お待たせして申し訳有りませんでした。ルルーシュで・・・ルルーシュ様、ナナリー様」

その蒼い瞳から落ちた雫が、ほほに一筋の後を残す。

そして来たる皇暦2017年…セカイは激動の渦にノマレテイク…

…

反逆の前奏曲（後書き）

ミレイと会う時期を大幅に前倒しにしてみました。

ルルカレもいいんだけど、ルルミレって少ないからルルミレっばい
感じな展開を妄想してます（笑）

魔女と再会の日（前書き）

アニメ第1話を元にしたIF小説です。

魔女と再会の日

颯爽と風を切りバイクを運転する青髪の悪友、リヴァル・カルデモンドを横目で流しつつ黒髪の少年はサイドカーに乗り手帳を確認する。悪友リヴァルが持つてくる賭けチエスの依頼や、自身が所属する学校…アッシュフォード学園生徒会の予定などが簡単に記載されている。とても綺麗で繊細な字の為、万人がみても見やすくなっているがこの手帳を見るのは彼以外存在しない。

「なあルルーシュ」

運転しているリヴァルがサイドカーに乗る黒髪の少年に声をかける。手帳を捉えていた紫電の瞳をリヴァルのほうへと少し向けた。

ルルーシュ・ランペルージ

元ブリタニア皇族第11皇子・第17皇位継承者であった少年の今の名前である。

そんな二人がバイクで移動していると同時間……

「ミレイさん」

背後から呼ばれた金髪を煌めかせる少女は振り返る。

クリーム色で統一された上着は金色のラインがあしらわれていて、腰元にはベルトがウエストを引き締める。黒のミニスカートが特徴

で首元は胸元までの短いネクタイがこの学校の女子生徒の制服である。あまりにミニスカートの為男子の人気もさることながら、女子の人気も高い。もちろん、このデザインは学園長の孫娘で現生徒会会長を務める、ミレイ・アッシュフォードが採用を決定した。

「あら、ナナリー。どうしたの？」

振り返ったミレイの視線の先には、車椅子に乗った栗色のウェーブが掛かった長い髪の少女。その少女の双眸に輝く青い瞳にミレイを映す。元ブリタニア皇位継承第87位の少女は、戦前に外交手段という名目の人質として日本に送られた。さらに日本に送られる直前には自身の母親の死を目の当たりにし、目と足が不自由になっていた。しかし……

「今日…声が聞こえました」

につこりと微笑んだ少女は車椅子から飛ぶように降りると、自身の両足で地面を踏みしめた。

「あら？ナナリーも聞いたんだあ。ならそろそろ行こっか」

「はい、久しぶりですから楽しみです」

ナナリーは笑いながら、先ほどまで自分が乗っていた車椅子を押して歩き出した。それと同時にミレイもナナリーと並ぶように歩き出す。二人の笑みの裏で、ふつつつと燃え上がる何かを共有しどちらからともなく手を重ねた。

「あれを使いますか？」

ナナリーは首を少しだけ傾けてミレイを伺う。ミレイはいつもの

調子で楽しそうに首を振った。

「あれはまだ時期じゃない……っていうかラクシャータのお姉さんからまだ許可出てないから」

「まあ、怒らせたら大変ですね…うふふふ」

「ふふふ、そうなのよ。さっすがナナリーわかってくれるって思ってたわ」

優しくそつとナナリーの頭を撫でると、ナナリーは感触を楽しむように目を瞑った。

「今日は彼女をお迎えに行くだけだから……、着替えは車に積んであるから移動中に着替えましょ」

「はい♪……ただ…、お兄様に会わなければ良いのですが」

「だーいじょぶだいじょぶ♪」

少しだけ不安の色を浮かべる表情のナナリーの背中をそつと撫でたミレイ、それに安心するようにナナリーの顔からその色は薄れていく。学園の裏口に止められた車に乗り込んだ二人は、そこに用意されていた服装へといそいそと着替え始めた。

二人はいつかの約束を守るため、そしてお互いの決意を貫くため動き出す。

あの日……

「ほんとに後悔しないか？私は…」

「もう決めた。彼を守るためには力が必要…だから」

「私もミレイさんと同じです。いつまでも守られてばかりは嫌です。せつかくあなたのおかげで、偽りの記憶もそして不自由な体も解放

されたんですから」

「……そうか。ならもう止めはしない……いいか？二人とも」

「ええ」

「はい」

あの日から少しだけ変わった日々。ナナリーは兄ルルーシュの愛情を一身に受けながら、こっそりとミレイの元でリハビリを続ける。少しずつ筋力を取り戻しつつあったナナリーの足に気づいたルルーシュだったが、今の所何か質問をしてくる事はなかった。

その頃トウキョウ租界では、少しずつ運命の歯車を回す波が立ち始めていた。

「こちらα3。対象はデルタ20よりデルタ40へ入った。時速80kmで逃走中」

機体底面には超大国ブリタニアの国旗がデザインされており、水平垂直へ滑らかな移動を可能にした空中戦航空機が、目下の道路を走るトレーラーを追いかける。

世界の3分の1を占める超大国ブリタニアに占領され、その支配の象徴であり中枢の総督府が置かれているトウキョウ租界。占領された日本人がイレブンと呼ばれ住んでいる場所は、ゲットーと呼ばれる。おり租界と比べ明らかに生活水準や復旧状態に差が生じていた。

ブリタニアの航空機に追われるトレーラーの前部座席には、清掃員のような白い服に白いキャップをかぶっている一組の男女が乗っていた。運転席には長髪の男、助手席には赤い髪の女が運転席に取り付けたモニターを見つめている。車の振動で両脇に一束ずつ降ろ

している赤い髪が揺れ、少女の頬をさらさらと撫でる。

モニタに映っているのは現在エリア11を治めている総督、第3皇子クロヴィス・ラ・ブリタニアの姿である。

「親愛なる帝国臣民のみなさん、そしてご協力いただいている大多数のイレブンのみなさん……」

「イレブンじゃない！…日本人だ！！」

クロヴィスの言葉をかき消すように、少女はモニターに向かって吐き捨てる。戦後から言われ続けているイレブンと言う言葉。反吐が出るほどの怒りが心を支配し、モニター越しのクロヴィスを睨み付けた。

運転席の男も同じ気持ちだったのか、モニターに集中していたため他線からの合流ポイントから出てきたサイドカー付きのバイクに反応が遅れ、気づいたら目の前のすれすれの位置にまで近づいていた。バイクの方も法定速度を越えてはいるが、80km前後で走っているこのトレーラーからしたらノ口く感じる。

「ノンキに走りやがってっ！！」

男は慌ててハンドルを切り分岐を左に曲がる。

「バカ！そっちは」

女が慌てて男に叫ぶもすでに遅く、進入禁止のカラーコーンを吹き飛ばし黄色と黒の縞模様のバーを突き破る。建設途中なのか舗装もされていない砂地のせいでブレーキをかけるも、タイヤが砂にと

られてそのまま建物の支柱へと車体をぶつけてやっとその動きを止めた。

『本庁へ。ターゲットは開発途中で放棄されたバイオビルの……』

ハイウェイを走る車の中で、二人の少女は耳につけたイヤホンから情報を取得する。先ほどまで学校指定の制服を着ていた二人だが、今は黒い軍の制服を着用している。胸部をも覆う胴体のアーマーのおかげで、胸の膨らみも隠せているため、体だけ見たら性別は判別できなくなっている。

「ミレイさん、バイオビルと言うと……」

「そうねえ、たぶんあそこの近くで考えると……、麻布ルートを使うかもしれないわね」

「そうですね。咲世子さん」

ミレイの言葉を受け、ナナリーは運転席にいる女性へ声をかける。メイド服を着たふわりとしたショートヘアの女性は、ルームミラーでナナリーの方へ視線を移す。

「麻布ルート方面へ移動をお願いします」

「かしこまりました」

再び視線を前方へ向け、車のギアをさらに1段階上げ車は加速を始めた。

「シンジクゲッターの日本人の皆さんは…、大丈夫でしょうか？」

ナナリーが心配そうな表情でミレイを伺う。今はそれを考えても

仕方が無いと言うように、静かに首を横に振った。肩を落としたナナリーを見て、ミレイはナナリーの手に自分の手をそつと重ねた。

「ナナリー、今はルルーシュと彼女を守る事を考えましょ」

「……はい」

それから20分ほど車を走らせた所で、大きく黒い煙が立ちのぼらせているトレーラーの場所に到着した。

「ナナリー、咲世子さん。この付近をまず搜索しましょう。恐らく軍の無線の状況からすると、軍につかまっていらないと思うわ」

「わかりました」

「ミレイ様、軍人もしくはテロリストの日本人に見つかった場合はいかがいたしますか？」

「そうですね…それは各自の判断でことごとく」

そして三人は別々の方向へ走り出した。トレーラーの爆発時の衝撃の影響で崩れた通路や、詮索している軍人と思われる足音にも細心の注意を払い目的のモノを搜索する。

一部の軍人にしか伝えられていない情報、トレーラーが積んでいるのはとある研究所にあった毒ガス…しかし実態はガスではなく一人の女性。過去数百年前から姿を変えず今もなお生き続ける不老の魔女。

軍上層部の本当の目的、そしてミレイ達の目的でもあった。

ピピとミレイの耳に付けた無線機が通信の合図を受信する。

「ナナリーです。発見しました。場所は…」

ナナリーの連絡を受けたミレイと咲世子が駆けつけたときには、目的の人物がナナリーの横に立っていた。腰まで届く長い緑色の髪に金色の瞳。透き通るような白い肌は、白い拘束服で今は隠れている。

「すまないな。迎えに来てもらって」

表情を変えず淡々とその女性、いや少女ともとれる容姿で言葉は発する。

「いいのよ。それにしても相変わらず元気そうね」

「それはお互い様だな」

「うふふ。でもお元気そうでよかった。またお会いできて嬉しいですC・C・（シーツ）さん」

「ああ、私もだナナリー」

そう言ったシーツは少しだけ微笑みを浮かべた。

「1つ、謝らなければならない……。実は…契約を交わしてしまっ
た」

「交わしたって…ルルーシュと？」

声には出さずシーツはただ頷く。一瞬苦笑いを浮かべるも「ま、いつか」と言っただけいつもの様にミレイは笑顔を浮かべた。

「とりあえず積もる話は後。みんなあたしに掴まって」

ミレイの言葉に全員がミレイの体に触れる。

「いくわよお」

ミレイの左目に赤い鳥のような模様が浮かび上がる。ミレイと触れている三人の体から赤い粒子が噴出し、はじけると同時に四人の姿がこの場所から消えていた。赤い粒子の余韻を少しだけ残して…

魔女と再会の日（後書き）

影からルルーシュを、ナナリーとミレイで支えていく感じですね
笑）

もちろんミレイもナナリーも……

覚醒の白い咎人（前書き）

アニメ第2話を元にしたIF小説です。

覚醒の白い咎人

神聖ブリタニア帝国が日本進行の際、本土着上陸作戦行動において実践初投入をされた全高約6メートル程の人型自在戦闘装甲騎：ナイトメアフレーム通称「Knightmare Frame」（略称：KMF）により、日本の陸上戦力はほぼ無力に等しくKMFの性能を威力を見せ付けられることとなった。

KMFを動かすエンジン：ユグドラシルドライブで生み出された電気エネルギーを無駄なく機体の各部所へ伝達させるために必要な鉱石、それがサクラダイトと呼ばれる超伝導レアメタルでありブリタニアが日本に宣戦布告した理由でもあった。市場供給量の70%がエリア11から算出されているとあれば、どの国も目をつけるものである。

ユグドラシルドライブの中は特殊な液体と、中心部にサクラダイトで作られたキューブ状の物体：超伝導電磁石が核となっていて、エナジーファイラーと呼ばれるエネルギーパック：ようはユグドラシルドライブをまわすための電池によってユグドラシルドライブは回転し発生した電気を、機体に使われたサクラダイトを利用して超伝導させ動かしている。

しかしそれはあくまで現在主力とされているKMFの話である。今エリア11にはそれを凌駕する程のKMFがトレーラーに積み重ねて運ばれていた事など誰も知る由もなかった。ブリタニア帝国第2皇子シュナイゼル・エル・ブリタニアの肝いりの直轄研究機関「特別派遣嚮導技術部」、通称特派がここに来ている事など軍ですらし前に知らされたばかりであった。

特派のトレーラーの付近には治療用のトレーラーが数台配備され

ている。その中の一台のベツトの上に上半身に包帯を巻かれた一人の少年が横になっていた。その少年の様子を伺うように白衣に似た服を着てメガネを掛けた薄い紫色の髪 of 男性と、キャメルカラーを基調とした特派の制服を着た紺色の髪 of 女性がベツトの脇に立っていた。

無事に目的の人物、シートと再会を果たしたミレイとナナリーは来るまでハイウェイを移動していた。運転席に座っているメイドの篠崎咲世子は、ただ黙々と車を走らせる。後ろから聞こえる会話には無反応、まさに理想的な仕える側の人間となりきっていた。

「これからどうするんだ？」

一切の表情を変えずただ淡々と話すシートは、ミレイへ返答を伺う。そのシートとは対照的ににやりとともとれる笑みを浮かべたまま右手の人差し指を下唇へあてる。

「んゝそうねえ」

何を企んでいるのか、それともただ純粹に楽しんでいるのか声を弾ませる。それでも目の奥に強さを秘めており、シートは昔と変わっていない少女に少しだけ…口の端を上げた。

「ミレイさん、やはりクロヴィスお兄様が仰っていた『シンジユクゲッターを壊滅せよ』との命令が、気になります」

ナナリーは少しだけ表情を落とし車内の窓からゲッター方面を伺

う。所々から煙があがり、次々に新しい爆発や煙が立ち昇る。ナナリーはどんな状況に置かれても、他者を思いやる強さがあると感じたミレイはそつと頭を自分の胸に抱き寄せた。

「咲世子さん、Uターンお願いできる？」

「かしこまりました」

いささかミレイの急な頼みではあるが、咲世子はただ一言答える
とブレーキ、クラッチ、ハンドル、ギア、アクセルと流れるような
動作で車体を反転させると、先ほど来た道を走り始める。

「相変わらず強引ねえ」シートも一緒にやる？」

「いや遠慮しておく」

「ならミレイさんと二人で行くので、シートさんと咲世子さんはお留守番ですね」

「ああ、いい子で待っててやるから、早く終わらせて来い」

「ええ、わかったわ。帰ったらピザでも食べましょう」

「お、ミレイ。お前の事愛しているぞ」

「はいはい、まあ都合のいい事を言うんだから」

しばらく来た道に戻っていると、ブリタニア軍のKMFの姿がチラチラ見え始める。その後数体確認した所でミレイは咲世子に合図をだして、車を停止させた。先ほどと同じようにブリタニア軍のアイマーに着替え、目元まで隠れるヘルメットと目元から下を全て覆うマスクを装着した。ここまで装備すると、すでにミレイやナナリーの面影はなく完全にブリタニア軍人に成り済ましていた。

「ではナナリー、いざ突撃」

「はい」

車を降りた二人は、目視できる中で一番近いKMFへと走り出した。ハイウェイの上から瓦礫となった廃墟ビルを経由して降りていく。肉体的にきつい部分では小型のクライミングツールを取り出し、自動巻き取り付きフックガンを使ってほぼ無駄の無い動きで目標へと接近する。

ある程度接近をした所で、物影から姿を見せてKMFへ近づく。存在に気づいたKMFは向きを変えてKMF用のアサルトライフルの銃口を物影から現れた影に向けた。

「貴様：そこで何をしている？」

外部スピーカーから聞こえる男性の声。威嚇の意味もこめて声色が強い。

「本体から極秘命令です。通信傍受を防ぐため、口頭伝達せよとのご命令です」

「そうか」

プシューという音と共にコックピットが後ろへスライドし、コックピット背部のドアが開かれた。すぐ様ヘルメット内左目に赤い不死鳥のマークが浮かび上がる。赤い粒子を放出しはじけると同時に瞬間にコックピット外上部へその姿を現す。搭乗者がその姿に気づき、顔を上に向けたと同時に彼の者の意識は永久に寸断された。

コックピットに座り稼働状況を確認する。モニターとセンサー共に良好状態で、各部位の反応も良好を確認すると、IFF（Identification Friend or Foe）から発せられる暗号化された識別信号を頼りに周囲の状況を確認する。1グループ3体のKMFで隊をなし、今回の作戦指揮を取っているクロヴィスの命令やその配下のバトラー将軍が指示を行っている。その

指示に従い、各隊は移動を行うもことごとく反応がLOSTしていく。異常な程作戦指揮が裏目裏目となっていた。

状況を確認していると1体のKMFが近づいてきた。先ほど奪取したこの紫色を基調とし各部所に黒色パーツも使われている。

「ミレイさん、もうそろそろで私達だけになりそうですね」

「みたいねえ……じゃ、IFFカットして接近してみよう」

コックピット内のスイッチを操作し、識別信号の発信を中断する。隣にいるナナリーの機体のマークが消えた事をモニタ上で確認する。

「ナナリー、あたしのも消えた？」

「はい、ちゃんと消えています」

「よし、では移動開始」

ミレイとナナリーは同時にフットペダルをベタ踏みする。ユグドラシルドライブはそれに反応するように、高速で回転を始める。生み出されたエネルギーが各部を通して脚部へ伝達される。基本足側面についているランドスピナーと呼ばれる、地上高速移動用ホイールは既に展開されホイールは地面に接地していた。サクラダイトを各部に使用することで電気抵抗による影響を受けず、無駄なく脚部のホイールへと送り込まれる。ホイールが急速回転始めると同時にミレイとナナリーの乗っているKMFは急加速しながら地面を駆け出した。

ランドスピナーの回転速度は速く壁走りや、建物の間もよじ登ることが可能なほど万能に優れている。

「やっぱり、グラスゴーよりサザーランドは反応がいいわね」

ブリタニア帝国が作り出したKMFは、すでに何世代も作られて

おり日本占領時に始めて実戦投入されたのは、第4世代のKMFのグラスゴーである。ほぼ基本構造はこの時には完成されていたが、武装に関してはそこまで優れているわけではなかった。しかしこの時にはすでに汎用性も高く、移動・牽引、攻撃等多用途で使えるワイヤー式アンカー「スラッシュハーケン」はすでに実装・実用化されていた。

基本色は茶色で、暴徒鎮圧用の警察仕様としてナイトポリスと呼ばれるパトカー色のカスタム機も存在している。

そしてこのグラスゴーを元に改良を加えられ生み出されたのが、第5世代KMFサザードとなる。近接戦闘用のランスやその他内臓武装に加え、補助武器等が装備されより実戦向きになっている。もちろん機体性能は、グラスゴーと比べたら格段に性能がアップしている。またサザードがグラスゴーより優れている点として、その場で機体の向きを変えることのできる超信地旋回が可能ということが一番大きい。これにより周囲状況に敏感に反応できるようになったことが大きい利点である。

今ミレイとナナリーが乗っているのがこのサザードであり、現ブリタニア軍の主力KMFである。

「そうですね。でも私はアッシュフォード家とラクシャータさんが極秘に開発した機体に、早く乗りたいです」

「うふふ。白百合と黒百合ねえ……。基本の開発構造が違うから、お披露目時期いつにするか難しいのよねえ」

二人が移動しながら呑気な会話を楽しんでいると、爆音と同時に砂煙が上がった。

「ミレイ様」

無線に介入するナナリー以外の声。それはアッシュフォード家メイドの咲世子の声であった。

「どうしたの？」

「はい。傍受した無線の情報です。先ほどの爆音で出撃したKMFがほぼ壊滅しました」

「あらあ、ずいぶん派手にやられちゃったのね」

「もう1つ得た情報によりますと、特別派遣嚮導技術部のランスロットというKMFが出撃したようです」

「ふうん？」

ミレイのその声を聞いたナナリーと咲世子は、次にミレイが話す言葉をなんとなく理解した。

「ナナリー、行つて見ましょ」

予想が当たった二人であったが、出かかった言葉を無理やり喉の奥へと押し込みナナリーは返事を、咲世子はあえて何も返答をしなかった。

「はい、というかあそこにいるのがそうではないでしょうか？」

コックピットのモニタに映し出されたのは、後ろ向きに走りながらアサルトライフルを乱射するサザーランドと、それを追いかけるように乱射を避けながら距離を詰める白い機体。サザーランドのそれと違い、圧倒的な機動力は目に見えておりあつという間にサザーランドの猛攻を掻い潜る。

「あの白いのがランスロット？なのでしょうか」

「わからないけど、楽しめそうじゃない」

二人は2機が通り過ぎた道を追いかける為に後を追った。少し走ると白い機体が立ち止まっていた。機体の近くには機体から逃げるように走る女性の姿が見えた。

「ナアナリー」

ミレイが妙に艶^{いろ}っぽくそして甘えた声を発する時は、決まって楽しいモノや事を見つけたときや思いついたときで、今回は前者の見つけた時とナナリーは感じた。だがそんなナナリーもミレイに影響されたのか、顔には出さないが内心ではミレイと同じような高揚感が胸に押し寄せているのを感じていた。

「いきますよ」ミレイお姉様

二人のサザーランドのアサルトライフルが火を吹く。白いKMFランスロットはその攻撃を予想していたかのように両腕から発せられた緑色の何かを動部から頭部に掛けて重なるように展開する。

白いKMFは従来のKMFより、ユグドラシルドライブの核コアアルミナスや、機体各所に使われているサクラダイトの比率が高くそれによって高出力のエネルギーが生み出され、それを利用しエネルギーを場に固定することで、物理的名攻撃を防ぐシールド（ブレイズルミナス）が展開される。展開されると同時に緑色を帯びるようになる。

「うわ！効いてないの!？」

アサルトライフルから射出された弾を、ブレイズルミナスがはじき周囲に反射するためランスロットを砂煙が覆う。砂煙から飛び出

してきたランスロットを見て、ミレイは無意識に口走っていた。急いでランドスピナーを後回転させ機体を後走させる。腕に付けられたすら強化されたスラッシュハーケンを、拳1つ分伸ばされたランスロットの腕が横切った。まるでナイフの様な使い方をしているが、あのまま動かなければ確実に切り刻まれただろうと、ミレイとナナリーは感じていた。

「ナナリー」

その呼びかけと同時に、ナナリーがランスロットの死角へと動きアサルトライフルの銃口を向けた。一瞬の注意がナナリーへ向いた瞬間…

「あつまーい」

両手を交差させたままミレイのサザーランドがランスロットへ突っ込んだ。が、少しよろけはしたもののすぐに立て直すと逆にミレイのサザーランドをはじき返した。それと入れ違うように、腕に装着されている武装のスタントンファを展開したナナリーが乗るサザーランドは、ランスロットへ振り下ろすも先ほどと同じように伸ばされ刃とかしたスラッシュハーケンのアンカー部分で、見事に両断される。

ミレイとナナリーの攻撃はすべてはじかれてしまい致命的なダメージを与えられない。またランスロットの方も明らかなスペック差があるサザーランド、2体以上先ほど相手にした時はほぼ瞬殺と言っている程の早さで倒したが、今回の2体は攻撃は当たるものの全て防がれており2体が互いをかばう様にすかさず攻撃を行うため、確実な損害を与えられずにいた。

お互いが似たような状況の中、ついにランスロットの攻撃がミレイのサザールランドの左足を砕いた。それは一瞬の事、KMFが脅威のパワーウェイトレシオの為まるで人間のように身軽な動きと、腕に付いたスラッシュハーケンの射出力を利用し空中へ飛び上がり、空中で体を回転させた勢いを利用しかかとを落とす。ミレイは回避行動を行うも、ふいに発生した脚部の動作停止により左足を砕かれていた。すぐ様脱出レバーを起動しコックピットが機体から射出される。

「ミレイさん!!」

ナナリーの不安視する声にミレイは「大丈夫」と答え、その声を聞いたナナリーは安堵の色を浮かべた。

「サザールランドが操作反応速度についてこれなくなったみたい。ナナリー恐らく脚部への負荷がでかいから、そろそろ…」

「わかりました」

と、言うと同時に今まで動いていたランドスピナーが強制的に停止してしまった。モニターには赤く故障の文字が表示されていた。ミレイの言葉通りになった状況に、ナナリーもコックピットの脱出レバーを作動させサザールランド本体よりコックピットごと射出した。少しだけその場に留まっていたランスロットは、すぐ様旋回し走り去って行った。

「おいナナリー、大丈夫？」

射出されたナナリーのコックピットの所へやってきたミレイは、ゆっくりとコックピットのドアを開け中の様子を伺う。「はい」と

声が聞こえ、それを発した人物がゆつくりと姿を現した。ミレイは手を差し出し、ナナリーはその手に自分の手をのせてコックピットから地面に降り立った。

覚醒の白い咎人（後書き）

いかがでしたか？

お気軽に感想でも頂けると嬉しいです♪

追われる混血少女（前書き）

一応1期を元にしたIFです。

なんかどんどんオリジナルになっていくと思われれます。

追われる混血少女

「ぐえ……」

相手の頭部に鈍い音を響かせ今日何人目かの意識を絶った金髪の少女ミレイは、同じように流れるような動作でブリタニア軍の歩兵用ボディースーツを纏った人間を地面にめりこませた少女の方へ視線を動かす。ミレイ自身も少女も、たったいま叩き伏せたブリタニア軍人と同じ装いでシンジユクゲッターと呼ばれる敗戦国日本人……今はイレヴン達が住む廃墟の街を、調査がてら動いていた。

先ほどの戦闘で敵から奪ったKMFのサザランドは、脅威の運動性能を誇る白いKMFによって行動不能とされていた。実際にはランスロットという名前なのだが、今の彼女等には知る由もない。行動不能と言っても技能で負けた訳ではなく、ただたんに彼女らの操縦に機体がついてこれなくなったというのが、正しい理由である。

「ナナリー」

「はい？」

「見つかるのは日本人ばかり……、もしかしたらルルはもう帰ったかも」

「んーそうですね。お兄様の事ですから大丈夫だとは思いますがど

……」

「いざとなったらあれがあるでしょ、ギ・ア・ス」

「そう……ですね」

少し不安は残るもののルル・シュの妹であるナナリーはミレイの言葉に納得し、建物の影へと移動する。人の気配やKMF等の音などに気を付けつつ、慌てずに素早く影へ影へと移動する。もう少しで所で自分たちと同じ建物の間の道を反対側から走ってくる人影が現れた。相手は相当焦っているのか、呼吸が激しく乱れている。そ

れと同時に地面を駆けるランドスピナーが地面を転がる音が響く。

「追われてるのね…戻るわよ」

自分の後ろを走るナナリーに声をかけ、急いで二人は今入ってきた道を逆戻りする。勢い良く飛び出した二人は、慌てていたのか建物の影から姿を現してしまった。右方向からは1機のKMFがミレイ達の方へ向かってきていた。

「あちゃー、やっちゃったわねえ」

「どうしよう?」

「後ろから来てる人もいるし」

ミレイが横目で先ほど反対側から走ってきた人影へ視線を映す。その直後、建物の向こう側に人影を追ってきたであろうKMFのアサルトライフルが火を噴いた。

「嘘!?!」

「私が!?!」

直撃はしないものの人影のすぐ後ろに着弾した衝撃で、人影は吹き飛ばされ路地裏から飛び出させられた。「ぐっ」という呻きをもらし、地面へと突っ伏したその人物は赤い髪はまだ若い少女。

「ミレイさん」

「わかってる」

その赤髪の少女を抱き上げたミレイは、KMFの死角となるように建物の影へ再び入った。破片が刺さったのか肩口から出血していた。その少女をとりあえず被害がないように建物の影に隠し、壁に

寄りかからせた。

「ナナリー」

「大丈夫です」

KMFのアサルトライフルから射出される銃弾は、見えない壁にでも当たっているかのように、ナナリーの少し前方ですべて弾かれていた。

「もう一方はあたしが！」

ヘルメット内で左目を赤く輝かせたミレイは、同時に体から赤い粒子を撒き散らし瞬間的にナナリーが対応していないKMFのコックピットの上に移動した。即座にコックピット上部についているキユーポラと呼ばれる顔を出せる口を開け、中にいるパイロットへ向けて携帯していた銃を発射した。

パイロットの意識が途絶えたサザーランドはコントロールを失い。そのままあらぬ方向へと移動し、建物へぶつかりその動きを止めた。銃撃を防いでいたナナリーは、銃弾を放つサザーランドのコックピット上部にミレイの姿を確認すると、建物の影へと身を潜めた。視認はしていないが銃撃音が途絶えた事と、サザーランドの駆ける音が遠ざかるのを確認し一息ついた。ザリザリと荒れた元道路だった道を踏む音を耳で感じ、念のため警戒するがそこに現れたヘルメットをはずしていつもの様に笑顔を浮かべたミレイに、ナナリーも同じようにヘルメットをはずして微笑んだ。

「それより、早く彼女…病院へ連れて行きましょ」

「そうですね。でも彼女、日本人じゃない…ブリタニア人？」

「今は何人でもいいわ。死なれたら後味悪いわ」

そう言ってポケットから携帯を取り出したミレイは、咲世子へと電話を掛けた。そのまま慣れたように病院へ電話を掛ける。

「…ええ、ありがとうございます」

そう言って電話を切ったミレイは、にやりと笑みを浮かべて壁に寄りかかっている少女を眺めた。

（ふふ…、カレン・シュタットフェルトさん、なーに面白い事してるのかしらあ）

「はっ」

目を開けてまず目に入ったのは、身知らぬ天井とまぶしいほど晴れ渡った青空が広がる大きな窓。薬品の匂いが漂うこの場所は瞬間的に病院だと認識させる。一人しかいないこの部屋は、どこかのホテルのスイートルーム並の広さに一瞬驚くと同時に嫌悪が心を支配した。自分が憎み最も嫌う国ブリタニア、そしてそこに住まう日本人を見下すブリタニア人。彼らの病院だと思うだけで表情が険しくなった。

しかしすぐ様この状況に陥った事を思案する。記憶にしているのはシンジクゲッターの闘いで、赤く塗装したKMFのグラスゴーに乗り謎の声に従いながら、ブリタニア軍を圧倒していた。

「あの声……何者？それに…」

ブリタニア軍を逆に追い詰めていたが、突如としてそれが逆転した。味方の情報とそして実際に目視した状況から、たった1機の白いKMFによって。旧型のグラスゴーとはいえフルスロットルの加速からの右アームの突きを防ぎ、さらに至近距離からのワイヤー式アンカーのスラッシュハーケンを受け止められた。完全なパワーに押し負け緊急脱出させられた。

白いKMFからは旨く逃げられたが、着地した場所が悪くすぐにブリタニア軍のKMFに見つかってしまった。KMFについている情報収集用のファクトスファイアは、熱源感知ができるもので一度見つかってしまったら、人間対KMFではKMFの入り込めない路地や、地下へ逃げない限り逃げるのは難しい。路地や建物の影を使い逃げてはいたが何度目かに入った路地裏で背後に銃撃音を耳にして、気がついたらこの部屋にいた。気を失う直前に誰かいたような気がしたが、ごっそりそこだけ記憶がぼやけてしまっている。

コンコンコン

この部屋のドアへのノック音に、今までの思考を一時停止させて穏やかな状態へと自らの心と表情を戻す。返事をする前にシューッとドアがスライドする音と共に、室内に入ってくる足音が一人。入り口から寝ている患者の姿を見せないようにするための仕切りのため、今ベットに寝ている彼女から。そして今入ってきた人物からもお互いの姿は見えない。ベットのすぐ右に水差しとコップの置かれた台が備えられており、その上には彼女愛用の携帯用ピンクのポーチが置かれており、それを素早く手に取りベットの中に忍ばせた。なぜそのポーチが台の上に置かれていたのか、彼女は考える事をせず今入ってきた人物へ警戒を強めた。

「はぁーい」

死角から出てきたのは、ふわりとウェーブのかかった金髪の女性。来ているのはベットで寝ている彼女が良く知る制服、アッシュフォード学園の…。

「はじめまして、カレン・シュタットフェルトさん。私はアッシュフォード学園生徒会会長の、ミレイ・アッシュフォードよ。よろしくね。」

ミレイは彼女の名前を告げた時に、一瞬だけ表情を硬直させた事に気づいたが自分は笑顔を変えない。視界の端で備え付けの台の上から、彼女の愛用のポーチがなくなっている事を確認しつつ、窓際に置かれている簡易のパイプ椅子へと腰をおろした。

「あ、あの…」

アッシュフォード学園と口にした瞬間、カレンは学校では病弱という設定にしているため大人し目の表情と声色で、少し驚いた感じを表すように口を開いた。

「ふふ、どうしてここにいるか気になる？」

含みを持たせた笑みにカレンは、心にいらつきを覚えるもなんとか自分を落ち着かせようと右手に持つポーチを握る力を強めた。

「えっと…どうして私は…」

「どうしてって…、それは自分が一番わかってるでしょ？それにピンの愛用のポーチって、そんな風に扱うのね」

その言葉をミレイが発したのと同時に、カレンは素早く布団は剥

ぎ状態を起こし右手のポーチから伸びた刃をミレイに突き出す。

「!?!」

「ざーんねん」

喉元へ脅しのつもりで突き出した刃は、喉へ届く前にミレイの右手人差し指と中指の間で挟み止められた。カレンが押しても引いても少ししか動かないミレイの手とポーチに、あきらめたのかカレンは手を離し無抵抗という事をアピールするようにベットへ横になった。

「それで?あたしをどうしようっていうの?」

先ほどまでの弱弱しい口調から一変し、敵意むき出しの口調と視線にミレイは少しだけ口の端をあげて刃をしまったポーチを、カレンの胸の辺りに投げ返した。悔しさなのか一瞬だけ舌打ちしつつもポーチには手を伸ばしはしなかった。

「どうもこうもしないわよ。ただ、あの時あなたを助けたって事でなんとなく察して欲しいだけ」

「あの時…って」

「そうよ。だからあなたの敵じゃないって認めてもらえない?」

「ふ、ふん。どうだか…そう言っただけで仲間の場所を調べようとしたってあたしは」

「あゝはいはい。とりあえずあなたの家には、あたしの家に泊まってるって言っておいたから」

「え?」

「とりあえずこの制服に着替えて、学校に行きましょう」

「え?ええ!」

どこから持ってきたのか、はたまた出したのかカレンの上にはアッシュフォード学園の制服が投げられた。少し悩んだがカレンはその制服を着ることにした。驚くことに自分の持っている物と同じでぴったりであった。

「この制服…」

「ああ、それはあたしの目算で手配したの」

「な…」

「その患者衣に着替えさせたのあたしだから」

顔を赤くさせ口をパクパクさせたカレンの手を握り、そのまま病室の入り口へとひっぱっていく。病室の外には中年のメガネを掛けた男性がミレイに頭を下げてたっていた。

「いつも無茶言つてごめんなさい」

ミレイは申し分けなさそうに頭を下げた。それに慌てた男性は頭を上げるようミレイに言った。

「ミレイ様、ルーベン様を始めアッシュフォード様にはいつもお世話になっております。私の今があるのはアッシュフォード様のおかげでございます。ですから少しばかり恩を返せるのであれば、このくらいお安い御用です」

「

「ありがとう。おじいちゃんにも言っておくわ。それと入院費として少し多めにあなたに振り込んで置いたから、そちらから入院費を差っぴいてちょうだい」

「かしこまりました。重ね重ねありがとうございます」

「それじゃ」

そのやりとりに少し唾然としてしまったが、金にモノを言わせたやり方に嫌悪を抱いたカレンだが、助けられた手前乱雑にする事もできずただミレイの後についていく。

病院の1階の入り口には、待つてましたと言わんばかりの高級車と後部座席のドアの前にメイド服を着た女性が立っていた。

「おまたせ〜」

ミレイが軽く手を上げると、女性は頭をさげ後部座席のドアを開けた。最初にミレイ、その後続くようにカレンが乗った。まもなく女性が後部座席のドアをしめ運転席へと乗り込むと、すぐ様車を発進させた。

車にのつて10分。たいした事ない時間だが車内は未だ沈黙のままであった。病室での事があるためカレンはうかつに口を割らない。ミレイの様子を伺うカレンだが、ミレイは相変わらず窓の外を眺めたりたまに視線を絡めると笑みを返してくる、まさに行動が読めない女。

「あの」

それに耐えられなくなったカレンが、先に口を開いた。

「あなたの目的はなに？」

病室と同じように鋭い視線で、隣に座るミレイを見た。運転席の方からチリチリと視線を感じるも、そのままミレイを見続けた。

「知りたいの？」

先ほどまでと同じ軽く含みを持たせた口調。だがカレンを見る表情はにやりとした表情と言うより、映画の悪役が浮かべるような身震いするような表情。その表情に一瞬カレンは吞まれた。だがそれも一瞬で今は先ほどの病室と同じ表情を浮かべたミレイの顔がそこにあった。

「あなた達のようにブリタニアに、憎しみがあるとかじゃない。ただ…大切な人と一緒にいたいだけ…。ただそれだけの事。だけど大切な人を奪うのならば、その前に私が奪いに来るやつらを消すだけ」

そういったミレイの視線は、車の外へと向けられた。カレンは気づかない…ミレイの視線の先にはエリア11の政庁があるという事を…。

「と、いうわけであなただけから生徒会メンバーです♪」

「は？」

「おじいちゃんからも頼まれてるしね。」

「ええええええええ」

後部座席のやり取りを聞き、運転席にいる咲世子は「ふふ」と笑みを浮かべアツシユフォード学園へと車を急がせた。

追われる混血少女（後書き）

アニメの2話と3話の間みたいな部分です。

二人の想いの先に（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

STAGE 03「偽りのクラスメイト」と同時期ですが、若干ずらしたりします。

二人の想いの先に

彼はきつと何も言わない。

すべてを内に秘めて、外には眩しいほどの笑顔という仮面を被る。

本当は守るべき立場の私を…、あなたはいつも守ってくれる。

それはとても居心地が良くて幸せで。

あなたは素直に守らせてくれないでしょう

だから勝手に私はあなたを守る…、もう決めたわ

その事を知ったらあなたはなんて言うかしら？

あきれるかしら？

それとも怒る？かもしれないわね 優しいあなたなら

自分が傷つくことも厭わず、立ち上がり守ろうとする優しいあなた…だから

だから……誰にも渡さない

「はい到着」

アッシュフォード学園の裏にある駐車場に停車し、後部座席に乗っていたミレイは車を降りるとまずは大きく伸びをした。高級車とはいえやはり座り続けるのはいささか苦痛を感じる。動くのが好きなミレイと同じように、肉体派？のカレンは同じように伸びをした。

「咲世子さん、ありがとう」

手を振って咲世子に別れを告げ、ミレイとカレンは学校の表へと歩き出した。「ふう」と気持ちよさそうに伸びをするカレンを見てミレイは笑みを浮かべた。それに気づいたカレンはバツが悪そうに顔をそらし口を尖らせた。

「な、なにか？」

「病弱な設定より、活発なカレンさんの方がらしいなって思ってたね」

からかうようなそれでいて、本心は一切漏らさないその笑みはカレンは苦手だった。自分の心は筒抜けで相手の掌の上で転がされている気がして……。

「あ、そうだ」

急に振り向かれたミレイはカレンが反応するより早く、ミレイは自分の人差し指の腹をカレンの唇へ添える。

「あたしがゲッターに居た事と、病院の事は二人だけの秘密にしておいてねっ」

カレンは自分から言うタイミングを計っていた内容が、ミレイの口から先に出たことで顔には出さないが内心安堵していた。もちろん

んこちらもばらされたらまずい内容のため、二つ返事でミレイに同意した。よくよく思い返してみると、ミレイはカレンがいいにくそうな事を自ら口に出してくれる。車内での会話も病院でのやり取りも。ブリタニア人は嫌いだがこのミレイに対してはそれ以外の感情が生まれたのを感じた。興味、ミレイという人物に対して純粋な興味がカレンの心に沸き始めていた。

「おはようございます、会長」

「ふふ、おはよう」

このアッシュフォード学園において、理事長の孫娘や生徒会長という肩書きだけではなく、美貌とそのおおらかな性格もあり学園内の人気は高く、副会長ルルーシュ・ランペルージと人気を二分している。ミレイは美貌と性格から男女共に人気が高く、ルルーシュは女子からの人気が異常に高い。ルルーシュの場合は声をかけられず遠くから眺めて悦に浸る女子も多いが、ミレイの場合は男女問わず気軽に声をかけられる。

声をかけた一人一人に笑顔を向ける返事をするミレイは、校舎の玄関まで来ると「それじゃ放課後ね」と意味深な言葉を残してミレイはさつさと階段を昇っていった。意味深な言葉に思考をめぐらすカレンだったが、思い当たる言葉がなくうーむと難しい顔をしていると、後ろから声をかけられた友人に心臓が止まるくらいに驚いたが、すぐさま病弱設定仕様カレンになり、弱弱い笑顔と声色で挨拶をした。

その後部活の予算申請の事を忘れていたミレイは、慌てて生徒会メンバーを招集しなんとか予算申請を終わらせた。その際の生徒会メンバーは妙にぐったりと背後に黒い影を背負っていたという。

放課後……

「ふんふつふつぶーん」

ほぼ生徒会専用のクラブハウスのキッチンで、ぐつぐつ煮込まれている鍋の中身をお玉で丁寧にかき混ぜる。色とりどりの野菜にお肉、そして食欲そそる香りを漂わせるデミグラス色のスープ。適度に鍋のそこを焦がさないようにしつつ、お肉や野菜にクラッカーをお皿へそれぞれ盛り合わせる。まるでどこかのレストランに來たかのような見栄えに、鮮やかな緑のソースがお皿の上を舞い踊る。

おたまで掬ったスープを味見用の小皿へ注ぎ、それをゆっくりと口の中へと進入させる。

「うん」でーきたつと」

味に満足したミレイはブラウスにミニスカートという姿にエプロンを纏い、普段とは違う魅力を醸し出す。厚手のタオルで鍋の取っ手を持ち三段式のワゴンの上段へ乗せる。それをゆっくりと押しながらクラブハウス内の大きな一室…、立食やダンスパーティが開けるくらいのルームの扉を開けた。

「おまたせえ」

ワゴンに乗せられた料理をみて、2階で明るい栗色の長い髪を揺らしながら下を覗き込んだ生徒会メンバー兼水泳部のシャーリー・フェネットは「さすがミレイさん」といいながら、1階のミレイのところまで駆け下りる。後を続くようにルルーシュの悪友リヴァルに、濃緑色の髪を双方で三つ編みにしたニーナ・アインシュタインもミレイの所へと降りていった。

「もつと褒めるがよい」

ミレイは楽しそうに手際よくテーブルへ料理を綺麗に並べて行く。

「会長、一体？」

ミレイと他のメンバーの会話についていけないルルーシュとカレンの二人。ルルーシュがミレイへと疑問を投げかけた。

「あれ？知っててつれてきてくれたんじゃないの？」

ミレイは少し困ったような表情でルルーシュとカレンを見た。そんなミレイを見て、カレンは今朝言われた言葉がこの事だったとやっと気づいたように、誰にも聞こえないように「あ」とだけもらした。

「カレンさん生徒会に入れるから、おじいちゃんに頼まれてね」

「理事長が？」

「ええ。カレンさん、はじめまして。生徒会長のミレイよ、よろしくね」

とんとんと自己紹介が進んでいると、この部屋のドアが開きピザの箱を膝においたまま車椅子に乗った少女が入ってきたのをカレンは確認した。

「彼女、ルルーシュの妹なの」

「……妹……」

「カレンさん、ナナリーです。よろしくお願いします」

目も見えない足の不自由な少女、それでも優しく心を暖められるその笑顔につられ、カレンも穏やかな笑顔で少女へ挨拶をした。

その後リヴアルがシャンパンを取り出し、なんやかんやでカレンがシャンパンを頭から被りシャワーを浴びたりなど話題に事欠かないカレンの生徒会歓迎パーティーはあつという間に時間が経ち、ミレイが食器をキッチンで洗っていた。

シューっというスライド音と共にキッチンのドアが開いた音を聞いたミレイは、振り返らずとも誰が入ってきたのかだいたい察しが付いていた。

「ミレイさん、何かお手伝いしましょうか」

ずっと変わらず優しい心を持つ愛しい人の妹、それは自分にとっても大切な存在で共犯者で。

「ありがとうナナリー。でももう終わるから……ルルーシュは？」

「今みなさんを門までお見送りに」

「そう……」

水道の蛇口を閉めて流れ出ていた水を止めて、手近においておいたタオルでそのぬれた手を拭いた。

「あの子……病弱設定のわりにシャーリーより引き締まった体」

「カレンさん……ですか？」

「そうよ、ブリタニア支配に抵抗するテロ。いやレジスタンスの紅月カレンさん……ふふ」

「ミレイさん」

ナナリーの言葉にミレイは振り返り、ナナリーの視線と絡め合わ

せる。飲み込まれそうな兄よりも薄い青に近い紫の瞳。今は誰もが盲目と信じて疑わない彼女の目は、今は完全に見開かれている。

お兄様は何も言わない。

いつだって笑ってすべての闇を飲み込み、私に光を与えてくれる。

このまま光も体の自由もなければ、お兄様を独り占めできるのね

だけど守られるお姫様のままなんてイヤ

だから私は立ち上がる。

自分の足で…自分の意思で…

お兄様、お兄様以外でも私の笑顔を守ろうとしてくれる人がたくさん居ます。

でも一番はやはりお兄様じゃなきゃだめで

だけど傷ついて弱って…だけど人にはそんな部分を微塵も見せない

光を失って見えるモノが見えるようになると、こんなにもお兄様の心は素直に伝えてくれる

自分ではなく私の幸せを願ってくれるお兄様…だから

だから……お兄様を誰にも渡しません

ミレイが迎えにきて数年。今まで自分や日本人唯一の親友以外トゲトゲしく無関心だった兄が、周りに対して少しずつ柔らかくなってきた。事を感じていた。少なくともこの生徒会のメンバーに対しては、優しさが零れている。いつだって自分に対して与えてくれる愛情が最大で、誰よりも一番に思われているのは常に感じている。それでも兄が唯一自分と同じくらいに愛情を注ぐ相手、それが目の前のミレイ・アッシュフォードであり、ルルーシュの婚約者。

幼き日の約束とはいえ皇族ではなくなったルルーシュ、落ちぶれた名家のアッシュフォード。一度は破棄しようとしていた約束を、ルルーシュはミレイと共に歩むことを決めた。ミレイの明るさと優しさに惹かれ、またミレイもルルーシュ個人に一目ぼれしており、不器用な内面もすべてを受け入れている。

「ミレイ……やはり」

「ルルーシュ！！あたしはあんたがいいの！！あんたじゃなきゃだめなの」

「ミレイ……」

「皇族とか家柄とかどうだっていいの。あたしは」
「ありがとう、ミレイ」

そういつて口付けを交わす二人を見てしまった事を思い出す。嫉妬はなく、自分も姉としてミレイを慕っているから、ルルーシュが幸福に満たされる姿を感じれたことは凄くよかったと思っっている。それでも誰にも一番を譲る気はない。

「お兄様には私がいれば大丈夫です」

瞳に強い光を宿しミレイに微笑む。兄としてのルルーシュにはナナリーが。

「あゝ抜け駆け禁止！！ルルーシュにはあたしもついてるんだから」

その瞳をまっすぐに捉え、ミレイはナナリーに微笑む。一人の男としてのルルーシュにはミレイが。

「そろそろラクシャータの姉さんからも連絡くるだろうし、ナナリーの足の事…ルルーシュにはまだ言わなくていいの？」

「そうですね、そろそろ驚かせてもいいかもしれませんね」

そこでナナリーは少しだけ意地悪く微笑む。

「でも、もう少しだけ……独り占めしたいのかも」

「ふふふ、そうはさせないわ……覚悟してね」

「まあ怖い」

そういつてナナリーはキッチンを背にドアを開けた。ナナリーを追うように、キッチンに掛けていた腰をあげた。

エリア１総督のクロヴィスが殺害されたと報道されたのは、その翌日の事であった……。

二人の想いの先に（後書き）

捏造もいい所ですね（笑）

でもミレイとナナリーはちょっと黒い方がいいのです♪

そんなわけで、次回もお楽しみに♪

容疑者の名は（前書き）

アニメを元にしたＩＦ話です。

ＳＴＡＧＥ３と４の間くらいの話です。

本当は４話の部分まで入る長さなのですが、
実家帰省するため、短いですが投稿します。

容疑者の名は

「お兄様！！」

この世で愛すべきたった一人の肉親で最愛の妹、ナナリーの悲痛の聲がクラブハウスの生徒会室へ入ってきたルルーシュの耳に届く。先ほどまで、クラブハウスの生徒会室への廊下を同じクラスのカレン・シュタットフェルトと、他愛のない今まで生徒会会長のミレイが考えたイベントの話をしてながら、カレンは疑問と表情に表しルルーシュは呆れも含めた乾いた笑いを浮かべていた。

そんな呑気な雰囲気から一変し、生徒会室の空気は重かった。それにナナリーの声にルルーシュは反応する。

「なんだい？」

そのルルーシュの問いに答えたのは、ナナリーではなくミレイ。

「クロヴィス殿下が無くなったのよ……」

「殺されたんだってさ」

続けてリヴァルがルルーシュとカレンの方へ視線を移し答えた。

「「え？」」

ルルーシュとカレンは同時に声を上げた。視線を設置されているテレビに向けると、グレーの軍服を着た軍人が整列し報道関係のカメラのフラッシュで間髪入れずに画面が白く光る。青緑色の髪をした男性の軍人は、整列している軍人よりも身分が上である事を意味する外装を纏い、紺色の制服に白の手袋を着用している。

「クロヴィス殿下は、イレヴンとの戦いの中で…平和と正義の為に…、殉死されたのだ」

カメラに向かいそして報道陣へ向かい熱く声を上げる。

エリア１１でのクロヴィスの死。それはエリア１１のみならず、ブリタニア国内や他国でも衝撃と波紋をよんだ。皇族の死。それは占領地としてエリアと呼ばれるナンバー地域の反ブリタニア勢力の中で、このイレブンと呼ばれる地域に対する注目度が急激に上昇していた。

「たった今新しい情報が入りました」

アナウンサーの声と共に、会見の中継から映像が切り替えられる。双方を軍人に挟まれ白い拘束服を着させられた男、まだ若く見え少年といえる童顔な男。茶髪で髪が癖づいている。

「実行犯と思われる男が拘束されました」

そのアナウンサーの言葉に、生徒会室全員が息を飲んだ。

「発表によりますと、逮捕されたのは名誉ブリタニア人です」

「まさか？」

ルルーシュはその少年の姿を見て、小さく声を漏らした。「まさか」ともらしたが見間違っはずは無かった。なぜなら彼は唯一の…。

「くろのぎ枢木スザク一等兵。容疑者は元イレブン…名誉ブリタニア人の、

枢木スザクです」

しばらく言葉を発せずただ呆然とテレビを見ているメンバーだったが、誰からともなく徐々にその部屋を出ていった。最後まで残っていたのは、ミレイとナナリーの二人。ルルーシュはミレイにナナリーの事を頼み、みんなと一緒にクラブハウスの外へと出て行った。二人きりになった生徒会室。ミレイはナナリーの様子を横目で確認すると、表には出さないように抑えて入るが微妙に体が震えている。みんながいる時は閉じていた双眸を、今は完全に開いてテレビの映像をしっかりと焼き付けていた。

ミレイがそつとナナリーの肩に触れると、ナナリーは一瞬ビクつと体を反応させた後、ゆっくりとミレイの方へ顔を向けた。その表情はミレイが見る限り、少し青ざめていつもと違い弱弱しく怯えたような表情に見えた。

「ナナリー…、知ってる人なのね？」

少し目を細めてナナリーに微笑む。ナナリーは、ミレイのこの微笑を知っていた。全てを見透して、それでもすべて受け止めてくれるその表情を。ナナリーはただ頷いた。そしてゆっくりと口を開き言葉を紡いだ。

「そつかあ、彼の…枢木スザクの家に、ナナリーとルルーシュは送られたのね」

外交と言う名の人質として、日本へ送り込まれた二人。その送り込まれた家が日本国首相であった枢木ゲンプの子、枢木スザクの居

る枢木の分家だった。そこで紆余曲折を経て、ルルーシュは当時唯一の友人として三人でいろいろ過ごしたと、ナナリーは少し当時を思い出し笑みを浮かべてすべてを話した。まだ盲目で足が不自由だった当時の事を……。

「友達…彼がルルーシュの認めた友達だったのね。だからあんなに動揺してたんだ」

恋人として傍に居て、いろんなルルーシュを見て触れて交わって…そんなミレイだからこそ気づけた彼の動揺。恐らくナナリーは、自分が動揺していたためルルーシュの動揺にまで気が回らなかった。だからこそミレイは、ナナリーを後ろからそっと抱きしめる。一瞬驚いたナナリーも、ミレイへ身を委ねた。

「大丈夫。ルルーシュが本当にブリタニアを倒す…、っていうのならきっと彼を助けると思うわ。ルルーシュは友達を大切にしている人。ナナリーが愛する素敵なお兄さんで、私の愛しい人」

少しだけ抱きしめる力を強めたミレイは、そっとナナリーの耳に囁く。ミレイの囁きと吐息に、少しだけ顔を赤らめ体を震わせるナナリー。

「きっと彼が無事に助かったとしたら……、その助けた人がルルーシュよ。王の力を使ってね…」

そこまで言ってミレイはナナリーから離れると扉の方を向く。

「でしょ？ シーツー」

ミレイに呼ばれると同時にドアを開き、緑色の髪をたなびかせ室

内へと入ってくる少女に見える女性。

「さあな？私にはわからん」

「またまたあ」

無表情なシーツに対して、ミレイは含みを持たせた笑顔を返す。
シーツはナナリーの所まで来ると、その手をそつと握り、「大丈夫だ」とだけ告げた。ナナリーはそのシーツの言葉に「はい」と答え、優しい微笑を返した。

容疑者の名は(後書き)

完全に捏造ですね。

まあIFだから許してくださいね♪

ほんとに今回は短いや。

少女の決意（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

STAGE 04と同じ時間軸で、ミレイやナナリー達の話です。

少女の決意

ゆづれいロボット――

EUや中華連邦の各所で空を高速で飛行している姿や、空中で静止している姿が目撃され徐々にネットやゴシップ紙などで取り上げられている。ネット上では実際に見たと言う者や、あくまでも合成と言う者……完全に意見が真っ二つに分かれている。

高速で縦横無尽に飛行し、いつの間にか赤い光を残して姿を消す。消えるときにはいつも赤く光……、それが目撃した人の共通のものであった。

各国の航空偵察機を出動させているが、目撃地に到着するまでには完全に姿を消していた。レーダーには熱源の反応もあり、軍内部でもやはり意見が分かれていた。

そんなゆづれいロボットの記事が書かれた週刊誌を読みながら、ミレイは自室の椅子に腰を掛けて携帯の向こう側の相手へ向けて笑い声を送る。電話の向こうの相手も、その話を笑いながら聞いている。

「ゆづれいロボットなんて……、ボキャブラリー少ないわね」

数種類ある週刊誌も似たり寄ったりな単語や内容に、すっかり飽きてしまったミレイは週刊誌を閉じてテーブルの上に積み重ねられている雑誌の上にその雑誌を置いた。

「あんとナナリーの反応が良すぎるからさあ、こっちも耐えられ

るように強化しているんだけどねえ」

「ごめんなさいね。でもラクシャータさんならいつも何とかしてくれるから、こつちも本気で応えなくちゃって思ってたね」

「アツシュフォード家には世話になってるし、あんたのわがままに付き合おうとは思ってたけど……、まさかここまでのいい素質とは思ってなかったよ。あんた達のデータは、こつちでは貴重だし」

「あら、喜んでもらえてよかった。まあ、早くゆうれいじゃなくて、本当の名前披露したいわあ」

その後、電話の向こうのラクシャータという人物と30分以上綿密な打ち合わせをして電話を切った。ミレイは少しだけぼーっと窓から外眺め、「よし」と自らに言い聞かせ立ち上がった。雑誌をゴミ箱へと放り込み、本棚から分厚いバインダーを1つ取り出す。『新造KMF 第13世代ガニメデ』とバインダーの表に書かれてあり、中のページにゆつくり目を通す。ラクシャータの開発グループより送られたこの資料は、現在のKMFには採用されなかった、ガニメデと呼ばれるアシュフォード財団主導で開発が行われたKMFを極秘に試作と改良を行っていた。アツシュフォード家とラクシャータのグループのみしか知られて居ない、新構想のKMFである。ラクシャータのグループが製作に関わった純日本製KMFにも、ガニメデの構造や特性が受け継がれていた。ミレイとナナリー専用に使われてきたこのKMFのノウハウを生かし、かねてからのラクシャータの理論を組み合わせてできたのが、烈火の如き赤いKMFである。

その夕刻、夜の境界線が夕方の終わりを告げかけた頃、樫木スザクの軍事法廷への移送が行われた。政庁から伸びる大通りの沿道に大勢のブリタニア人が壁のように並んでいる。テレビでは移送のニュースが流されており、どのチャンネルもこの沿道の映像が映されている。

ルルーシュとナナリーが住むクラブハウス、大きい液晶テレビが置かれているパーティールームにはナナリーとミレイ、そしてシートが椅子に座ってその映像を見ている。咲世子がお茶の入ったポットとティーカップを載せたワゴンを押しながら、三人の近くへ寄っていく。

「ミレイ様」

「ありがとうございます」

咲世子の差し出したティーカップを受け取り、ミレイは一口入れる。同じようにナナリーとシートにも渡し、4人でその映像に注目していた。

心配でそわそわしているナナリー以外の三人は、この場にルルーシュがいない時点でこれから起こる事をなんとなく予想できていた。ミレイがシートへ視線を向けるとそれに気づいたシートは、少しだけ口の端を上げる。それでシートが何が言いたいのか理解したミレイは、同じように「ふふ」と笑みを浮かべる。その姿を見た咲世子は、心の中でこの二人は似たもの同士なのかという思いを馳せていた。

しばらくすると映像にスザクを移送する車と、それを囲むサザーランド4機が映る。沿道のブリタニア人からスザクへ向けて罵声が飛び交う。すざくは護送車の荷台の上に乗せられ、軍人が左右に立ち銃口をスザクへ向けている。

この先頭を走るサザーランドに乗っているのは、クロヴィス殺害の容疑者を特定した功績から代理執政官となっている、ジェレミア辺境伯がコックピットから体を晒している。他のサザーランドも同じようにパイロットが外へ出ている。KMF事態は決められたコースを走るオートランモードにしているため、手放しても問題なく動かすことができ、停止と発進は手元で簡単に操作できる。

テレビからは、アナウンサーがいろいろとブリタニア人の怒りをあらわす様に、言葉を並べていく。

「スザクさん……」

ナナリーが映像に映るスザクを見て、小さく声を漏らす。胸の前で手をぎゅっと握り締めて…。

ふいに先頭にいるジェレミアが手を上げ、後方へ顔を向けた。直後に全KMFと車がその場に停止した。驚くアナウンサーに沿道のブリタニア人にナナリー。テレビのカメラがスザクとは反対方向に向きを変えると、そこにはクロヴィスの遺体を運んだ御料車と同じ外見の車が1台、スザクの方へとゆっくりと向かってきている。アナウンサーもその外見に驚きの声を漏らしながら、さすがプロと言わんばかりに言葉を溢れさせていく。ある程度までスザク的車まで近づき停止させた。

「出て来い！！殿下の御料車を汚す不届き者が！！」

ジェレミアが声を荒げて叫ぶ。それを聞き車の上部のブリタニアの国旗が燃え上がり、中から仮面をつけた人が現れた。チューリツプのような形をした仮面に黒に金色のラインが入ったマント。首元には白のスカーフに黒く丸いアクセサリが付けられ居る。紺色のジヤケットにパンツスタイルのその人物は、世界に向けて言葉を発する。

「私は……ゼロ」

「ミレイさん」

視線はテレビに向けたまま、少しだけ叫ぶようにナナリーはミレイを呼んだ。

「ね？言っただでしょ」

ミレイはゾクゾクと体を震わせ恍惚の表情を浮かべる。口からは熱のこもった息を吐き、テレビに映るゼロを見つめる。

「もういいだろゼロ。君のショータイムはおしまいだ」

1発手にした銃を空に向けて放つと、KMFを航空輸送するための輸送機からKMFがゼロの車を囲むように降下し、着地したKMFは銃口をゼロへ向けた。

ゼロは上に手を伸ばしパチンと指を鳴らすと、車の後部の外見が壊れ何かの入れ物が露わになった。

それを見て顔を強張らせたのは2名。ジェレミアと移送車の後ろを走るKMFに乗る褐色に銀髪の女性、ヴィレッタ・ヌウの2名。明らかに動揺を見せるジェレミアは、唐突に手にしている銃をゼロへ向けた。

「撃ってみるか？わかるはずだお前なら……」

少し考えたジェレミアは銃口を降ろし、ゼロの要求を確認する。

「わかった…要求は？」

「交換だ。こいつと枢木スザクを」

「笑止！！この男はクロヴィス殿下を殺めた大逆の徒。引き渡せるわけがない」

「違うな…間違っているぞジェレミア……。犯人はそいつじゃあない」

その発言と同時に金髪の男がテレビカメラを担ぎ、ジェレミアとゼロの会話の音を拾おうと飛び出す。

「クロヴィスを殺したのは……」

金髪の男がカメラをゼロに向けズームし、それに気づいているゼロもそのカメラの方へ顔を向ける。

「この私だ！！」

予想だになかったこの言葉に、テレビも現場も慌てふためく。理解が難しくジェレミア達の言葉と矛盾も生まれている。その後もゼロがジェレミアに向けいくつもの言葉を向ける。まさかの真犯人の登場の事に動揺を隠せないジェレミアは、徐に銃口をゼロへ向けた。

「こやつは狂っている…、殿下の御料車を偽装し愚弄した罪……贖うがいい」

「いいのか？公表するぞ、オレンジを……」

「な、なにを言っている？」

ゼロは足元を2回踵でコツコツと鳴らすと、車がゆっくりと前進する。

「私が死んだら、公表されるようになっている。そうされたくなければ…」

「何の事だ？何を言っている」

戸惑うジェレミアをよそに、ゼロの乗る車はどんどんスザクの所へと近づく。

「私達を全力で見逃せ！！そっちの男もだ」

ほんの一瞬の間…。

「ふん、わかった。その男を全力でくれてやれ」

ジェレミアのその言葉に回りの兵達もブリタニア人も、そしてアナウンサーすらも驚きの声を上げる。すぐさま沿道からは疑問の声があがるも、ジェレミアは意見を一向に曲げない。そしてゼロを見逃すため部下の行動を妨害し、さらには銃口を向けた。

これが後にジェレミアを苦しめる事になる裏切りのオレンジ事件である。

「よかった」

スザクが救出された事で安堵の表情を浮かべたナナリーは、ミレイ達の方へ振り向いた。

「ね？だから大丈夫って言ったでしょ？」

「はい」

ナナリーは笑みを浮かべて頷いた。

「でも、彼…ブリタニア軍人なのよねえ」

「ナナリーはどうなんだ？もしあいつの…、ルルーシュの敵になったとしたら」

「え…」

シーツの言葉を受けて、ナナリーはまたその表情に影を落とす。このタイミングではなくてもとミレイと咲世子は思ったが、シーツがこのタイミングと思ったのには理由があるのだろーと思ひ、二人はそのままナナリーの返事を待った。しばらく俯き黙っていたナナリーだったが、顔を上げ瞳に強い意思を込めシーツを見つめた。

「もし、スザクさんがお兄様の敵となるなら……、私は…スザクさんを……討ちます」

「……できるのか？おまえに」

表情を変えないシーツの問いに、ナナリーはゆっくり頷く。

「お兄様と共に生きることが、私の望みですから」

その返答に満足したシーツは、にやりと笑みを浮かべティーカープに口を付けた。

少女の決意（後書き）

ゆうれいロボットのくだりは、好きなSFロボットアニメをパロつてます。

そもそも黒百合と白百合も、それに出てくる期待のオマーージュといつかそのまんまというか（笑）

あえてそれをガニメデにしてみました（笑）

感想とかご意見とかおまちします♪

恋敵 で 好敵手（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

STAGE05では、ミレイもナナリーもほとんど出てこなかった
ので、

完全に捏造しちゃってます（笑）

恋敵で好敵手

ゼロが華々しく？デビューを飾ったその日、世界はゼロという者の存在を認識する。それはギアスにも似た強烈なまでのセンセーションだった。ニュースはクロヴィス殿下を殺したとされていた枢木スザクの無罪の可能性と、クロヴィス殿下殺害の真犯人のゼロの話題で持ちきりだった。様々な憶測が飛び交う中、ナナリーはシートと一緒にクラブハウスのリビングルームで一緒に折り紙を持っていた。

その日、ルルーシュはシートとの再会を果たす。シートにとっては予定通りの、ルルーシュにとっては予想外の再会。事情を知っているナナリーは、心の中でくすくすと笑いをこぼしていた。

クロヴィス殺害という事実に対し、自ら名乗りを上げたゼロ。エリア１に住む者にとっては、皇族殺害という大逆を犯したテロリストという認識だった。結局はまだ認めることも拒むことも無く、ただ当たり障り無く傍観する。それが属領にすむ敗戦国の人々の生きるための手段。

まだ誰も知る事はない。ゼロがブリタニアを、世界を震撼させることなど今はまだ誰も思いもしなかった。

エリア１から遠く離れた砂漠地帯。美しい紫の胸元まで有る長さの髪を、右側にまとめて肩から胸の辺りへ降ろしている。敵国が恐れるブリタニアの魔女と名高い女、自身の髪と同じ紫のルージユ

で唇を染め、紅紫の皇族の服を身に纏う。首元から腰元へ金色の模様が豊満な胸を強調し、引き締まったウエストが彼女のスタイルのよさを際立たせている。クロヴィスと同様に首には白いスカーフ、手には白い手袋、足元は白いブーツを着用し皇族を象徴する白い羽の様なマントを掛けている。

高い指揮能力にKMFの操作技術を併せ持ち、自ら専用のKMFグロースターで戦場を駆け抜ける。近接用武器の大型のランスを持ち、敵対するものをすべて貫き蹴散らすその姿に敵味方から尊敬と畏怖の念を持たれるほどの実力と美貌を兼ね備えていた。

また一つ…今日も彼女に心を折られた国が一つ。紅く燃え上がる炎の中で、KMFの右手に持つランスの柄底を地面に突き立てコーネリア専用グロースターがたたずみ、今は無き弟へ祈りを捧げた。ゼロへの復讐心と共に……。

「ナナリー、お茶にしましょう」

肌からあふれ出す汗をタオルで拭い、咲世子がお茶を入れたティーカップをテーブルへ並べて行く。咲世子は相変わらずメイド服を着ているが、一緒にいるミレイとナナリーはいつもと違いハーフスパッツに、上はTシャツとラフな格好をしている。

「はい」

そういつてナナリーはテーブル方へとやってくる。そして一度ティーカップに口をつけると、隣に居るミレイを上から下まで舐めるように見つめる。男女共に人気があり周りがうらやむほどの美貌、

破壊力抜群の大きな胸、引き締まったウエストにヒップ。今日はぴっちりとしたスパッツをはいていて、しかも汗を吸っているため余計ぴっちりとしパンティラインがくつきりと浮かび上がる。

これが兄の恋人で自分のライバルと思うと、泣きたくなくなってくる心をぐつとこらえる。ライバルだとしても兄妹の命の恩人であり、さらにナナリーは自分の姉のように慕っている。兄の傍に居てもいい女性として認めている数少ない女性の一人。

たくさん汗を掻いたミレイは、咲世子にお茶のおかわりをお願いしお茶で満たされたティーカップを、「ありがとう」と言って受け取る。

隣でおいしそうにお茶を飲むナナリーを微笑みながらも、上から下まで舐めるように見つめる。

アッシュフォード学園高等部の生徒会準メンバーとして高等部の生徒に知られており、さらにルルーシュの妹ということもあってか認知度は高い。盲目で足が不自由ということも有り、いじめにもあっていたこともあるのだが仲良しの友達のおかげで今は無くなったと聞いている。

盲目で足が不自由というのは既に過去の事。今ではリハビリのおかげで人並以上に動けるようになった。そんな彼女は、澄んだ瞳に優しい心を持ったかわいらしい少女。バランスよく鍛えられてスレンダーなボディラインがとても健康的だ。一緒にお風呂に入る時に確認しているが、以前より少し胸が大きくなっている。まさに萌えの権化とミレイは思っている。

守ってあげたいオーラ全開の彼女は、自分の恋人——ルルーシュの妹。だけどライバルと思っている。自分の兄に対して兄妹や家族以上の感情を抱いているのは知っているし、面と向かって宣言されたこともある。今まで兄にしか拠り所がなかった事を考えれば、しかたがないのかと感じてはいる。ライバルだけれども自分にとって

は、実の妹のように思っており可愛がっている。ルルーシュの傍に居てもいいと認めている数少ない女性の一人。

そんな二人だが、結局はルルーシュを守りたいという気持ちは一緒であり、その気持ちを理解している咲世子は二人を見て微笑ましく思う。本当の姉妹のように仲がよく、ライバルとして認め合っている。だから二人が咲世子の弟子入りを志願した時は驚きはしたが、二つ返事で二人の指導をする事にした。

アッシュフォード学園の校舎から少し離れた場所に、特設のトレーニングルームを地下に建設をした。ナナリーのリハビリの為、そしていつか来る立ち上がるときの為にラクシャータ協力の下作成したKMFのシミュレータ装置等が設置されている。他にも各種トレーニング機材は、ミレイとナナリーと咲世子用ですべて3つずつ設置するようミレイが手配していた。そのトレーニング施設でいつもの様に軽く機材で汗を流し、咲世子指導の下体術や銃器の取り扱いなどの訓練を行っており、今では咲世子くらいの強さの相手でなければ負けないほどに二人は成長していた。

シーツからギアスを与えられた日から、ただ一人ルルーシュを守るためにだけ。

ヴヴヴ、とミレイの携帯がテーブルの上で振動を始める。それに気づいた咲世子は、先ほどからナナリーと組み手を始めているミレイの所へと携帯をもって近づいた。二人とも本気ではないのか、笑みを浮かべたまま攻防を交互に繰り返している。咲世子は携帯を上投げると、二人の攻防の間に入り流れるような手さばきで二人の攻撃を受け流し。ナナリーの拳とミレイの手刀をそれぞれの両手

を掴み動きを止める。掴んだミレイの手を動かし掌を上に向けさせると、先ほど咲世子が投げた携帯が落ち掌の上で受けとった。

「あ……」

「ミレイ様、お電話です」

「ありがとうございます……はい、ミレイです」

咲世子はミレイの手首から手を離すと、ミレイは二人から離れ先ほどのテーブルの所まで移動した。

「ナナリー様、お相手は私が」

「お手柔らかに、咲世子さん」

ミレイの変わりになった咲世子相手に、微笑を浮かべたまま攻撃を繰り返す。

そんな二人から離れたミレイは、電話の向こう側の声に耳を傾ける。

「あら、ラクシャータさん。どうかしたの？」

「ちよつとさあ、試作部品のテストしたいから協力して欲しいのよ」
「相変わらず突然ねえ」

電話の向こうのラクシャータの言葉に、軽く苦笑いをしながら答える。それでも試作部品のテストということは、ミレイとナナリー用のKMF完成の為に必須であるし、何より実戦というのは魅力的である。

「いいわよ」

「さっすが、あんたはそう言ってくれと思ってたよ」

「それでいつ来られるの？」

「それが……」

ピッと通話終了のボタンを押して、携帯をテーブルの上に置いた。ラクシャータが現在所属するのはインドの研究機関。アッシュフォードが医療関係に力を注いでいた頃の縁で、インドのKMF等の兵器研究機関の所属していたラクシャータに会い、ミレイはラクシャータにKMF製造の依頼をしていた。最初は難色を示していたラクシャータだったが試しにやらせたシミュレータの数値が高く、技術発展に繋がると感じたラクシャータは協力を受け入れた。

あの日から3年……。やっと最終段階へ入れそうだというラクシャータの言葉に、ミレイの心は高鳴った。それが表情に出ていたのか、ナナリーから「良い事ありましたか？」と聞かれたのでミレイは先ほどまでの会話をナナリーに伝えると、やはりミレイと同じように胸の高鳴りが表情へと表れていた。

「ミレイ様、ナナリー様」

咲世子に呼ばれた二人が振り向くと、咲世子は手にした携帯を操作し画面を二人が見えるように向きを変える。

「エリア11の次の総督に、コーネリア・リ・ブリタニアが着任するのが濃厚のようです」

「コーネリア姉様が……」

「ブリタニアの魔女……」

ナナリーとミレイはお互いを見やり、口の端を上げてにやりと笑う。

「相手にとって不足はないわねえ」

「ミレイさん…、どうしましょう。私…私…、胸がドキドキします」

「それはね…高鳴ってるって言っのよ」

「高鳴る……」

ナナリーは胸の辺りで手をギュッと握る。それにミレイが手を重ね、最後に咲世子が手を重ねた。

恋敵 で 好敵手（後書き）

さて問題です。

ナナリーとミレイが、共にルルーシュの傍に居てもいいと思う数少ない女性は、今の段階であと何人いるでしょうか？

なんちゃって♪

STAGE06を書くのは難しいですが、抜かすこともできない回なのでなんとかせねば。

唐突な転入生（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

今回はSTAGE06を元にしたはずなのですが、あんまり動きがないので、手抜きしちゃいました。

唐突な転入生

「おじいちゃん…これって」

「ああ…すまん。皇族からの頼みでは、無下には…な」

「……そうよねえ。ま、しかたない…か」

朝早くに、自分の祖父でありアッシュフォード学園理事長のルーベンから書類を数枚手渡された。受け取った書類の1枚には転入届けと書かれており、そこにはエリア11では有名な少年の顔写真と履歴が書かれていた。

「くるるき 枢木…スザク」

「ああ…クロヴィス殿下殺害容疑の掛けられていた少年だ。さすがにゼロの登場もあり、証拠不十分で釈放になったようだ」

「ふうん…」

幼さの強い少年の顔写真をみながら、様々な思考を巡らせたが実際の実物を見たくなったという本心を抑えられず、祖父には「了解」と告げて祖父の部屋を後にした。

枢木スザク……、ルルーシュとナナリーが日本に送られたときに住まわされた枢木の分家の少年。そしてルルーシュが唯一の友人と認めて慕っていた少年に、ミレイは軽い嫉妬を覚えた。ミレイと共にアッシュフォードに住み始めてから、しばらくの頃は枢木スザク事を非常に気にしていた。

今でこそ恋人で、ルルーシュはミレイを信頼しているししっかりと愛を与えてくれる。ナナリーが言うには、他人を少し信じるように、思いやるようになったのは自分のおかげと言っていた。恋人になったのは2年前。それまではいつも傍に居たけれど、お互いともどかしい状態のままだった。ミレイが中等部から高等部へあがる時に、ルルーシュからミレイへ告白をした。その告白も彼らしい不器用さと純粹さ、そしてナナリーに向けるような独占欲を露わにしていた。

その時期はルルーシュへの恋心で悩み傷つき苦しかったミレイは、大粒の涙を流しながら笑顔でルルーシュに抱きついた。顔を赤くし照れを隠すように視線をはずすルルーシュの頬を掴み、長い口づけをした。それがミレイの返事でも有り、いつもは口が達者な自分もルルーシュの前だと不器用になるハズカシさを上塗りする意味もこめて。

だからお互い隠し事をしていても、二人の間を壊すものではないし離れる事はないと思っている。しかし、ここで過去からの来訪者と来れば、ミレイの心境は穏やかではない。きっとルルーシュが揺れてしまうのではないか…、そんな不安がミレイの脳裏をよぎる。

「ダメダメ…弱気になっちゃ」

顔を左右に振り、胸の辺りで手をぎゅっと握り締める。二度三度と呼吸をして気持ちを落ち着かせる。ゆっくり息を吐き、いつもの様に冷静を取り戻す。すっと自身を凜とさせて、令嬢のそれを醸し出し綺麗な歩行で歩き出す。

（まあ、いいわ。もし…邪魔になるようなら、私が消してあげる…
うふふ）

いつもの様に笑みを浮かべたまま、自室へと戻った。

「な……」

「そういう事だから」

「そういう……いや、わかったよミレイ。教えてくれてありがとう……
それじゃあ学校で」

「うん……」

ピッとボタンを押し、通話を終えた携帯を鞆のポケットへとしま
う。ミレイは学校までの道を歩きながら、枢木スザクが転入して来
る事を話した。時間にしてほんの1分未満。数回言葉を発したルル
ーシユの声には、やっぱり揺らめきを感じたが、最後に述べたお礼
は感謝なのか強がりなのか今のミレイは知る事はできない。

「やあねえ……いつものように、前向きにいかなくっちゃ」

自分に言い聞かせるようにして、大きく体を伸ばした。

その日に転入した枢木スザクは、先日のニュースの影響でクラス
で浮いた存在となっていた。心ない生徒からのいじめを受けながら
も、スザクは泣き言をもらす事無く学校へと通っていた。いつの時
代も人種間差別はあるもので、手続きをして名誉ブリタニア人とな
ったとしても元はイレブンとして、敗戦国の人間はいつだってぞん
ざいな扱いを受ける。

枢木スザクがアツシュフォード学園へ転入して数日後の放課後――

ルルーシュの悪友で青髪の少年が運転するバイクのサイドカーから飛び降りたミレイは、時計塔の周りに集まる人だかりの中へと入っていく。

「追い詰めたんだって？」

ミレイが見上げた先には、時計塔の屋根につけられた窓から外に出て、屋根をよじ登る枢木スザクの姿だった。

この日の夕方、クラブハウスへ来ていたミレイとリヴァルとニーナは、入り口まで来ていたナナリーからルルーシュの様子がおかしいと言う話を聞いた。

「なんだか、猫に大事な物を取られたみたいで」「大事な物？」

ナナリーの言葉にミレイは疑問を投げる。

「よくわからないんですけど……、でもとっても大事な物に違いないんです。だって……あんなお兄様の素っ頓狂な声……、初めて聞きましたもの」

「なんだろう？ルルーシュの大事なものって……」

リヴァルは、今までルルーシュの傍に居たがそんな物がある素振りすら感じては居ない。

「ラブレター？」とニーナ。「恥ずかしい写真」とミレイ。「ポ

エム手帳！」とリヴァル。そのリヴァルの発言にやりとしたミレイは、ナナリーに「ルルーシュより先に取り返してみせるから…絶対！！」と、親指を上立ててあくどい笑みを浮かべた。

その後ミレイによりほぼ全クラブ中の生徒と、学校に残っていた生徒による一大猫捕獲作戦が展開された。そして現在時計塔の所に生徒が集まっていた。

「追い詰めたんだって？」

ミレイが見上げた先には、時計塔の屋根につけられた窓から外に出て、屋根をよじ登る枢木スザクの姿だった。それに遅れて屋根にでたルルーシュだったが、体制を崩しずると屋根を滑り落ちていく。時計塔の下の生徒からは悲鳴があがる。

「ルルーシュ」

とつさに叫んだスザクは、自らも同じように屋根を滑りながら自分たちが出てきた窓の淵を右手で掴み、体を安定させる。そして伸ばした左手でルルーシュの右腕を掴み、胸元まで宙にぶら下がっていたルルーシュの体を屋根の上に引き上げた。そのタイミングで時計塔の鐘がガラランガラんと鳴り響いた。

「へえ…」

ミレイの漏らした声に、今は目を閉じているナナリーが問いかける。

「ルルーシュのピンチを、転校生が救ったのよ」

（ルルーシュが、あんな自然な笑顔を向けるなんて……）

隣に立つミレイから、一瞬冷たく鋭い殺気を感じたナナリーは理由をなんとなく察し微笑を崩しはしなかった。

その後ルルーシュの頼みでスザクの生徒会入りが決まり、ルルーシュを助けた事でスザクに対して少しだけみんなが持つ印象が変わっていった。もちろん、生徒会メンバーになるという事はそれだけ周りに影響力があり、ミレイとルルーシュの発言力の強さを示している。

エリア１１に来たばかりの時にイレヴンに襲われたトラウマから、異常なまでにイレヴンに恐怖を抱くニーナも、生徒会で一緒に活動して行く内にスザクにだけは、その恐怖が緩和していく事になる。

その日の夕刻、一機の移送航空機が政庁の屋上へ降り立った。整列した軍人とその間にはブリタニアの魔女と名高いコーネリアの姿と、それに対するように立つピンクの長い髪が印象的な少女が立っていた。

彼女はユーフェミア・リ・ブリタニア。コーネリアが溺愛する妹であり、今度のエリア１１総督となったコーネリアと一緒に、副総督として着任する事になっていた。先にエリア１１に来ていたユーフェミアが、砂漠地帯での戦闘を終えてその地をまとめる国をエリア１８と定めたコーネリアを出迎えに来ていた。

ユーフェミアの「お姉様」という言葉に対し、政庁に居る間は総督と副総督という立場上、姉妹だからこそけじめが必要と心得を説

き、ここでは総督と呼ぶようけじめをつけさせる。

「で、そちの話だが？」

ユーフェミアと同じように出迎えに来ていた管理職の男は、コーネリアに発言を許可され口を開く。

「はっ。政庁にて皇女殿下歓迎の準備が…」

そこまで発言した男へ、コーネリアは手にした銃口をその男へ向けた。

「抜けている…呆けている…墮落している」

表情に怒りを憎しみを露わにし、その男を睨み付ける。

「ゼロはどうした！？帝国臣民の敵を捕まえろ…ゼロを！！」

その瞳にはゆらりと激しい怒りの炎を灯していた。

唐突な転入生（後書き）

アニメではSTAGE05でコーネリアは来てるので、
ちよっと時間軸ずれちゃってますね。

次はSTAGE07を元にします。

個人的に心理描写苦手だから戦闘書きたい（笑）

紅い髪 の 記憶（前書き）

アニメを元にしたＩＦ話です。

ですが、今回は完全オリジナル？捏造？って感じですよ（笑）

それではどうぞー♪

紅い髪 の 記憶

「う……う……」

何度目かの銃撃音と衝撃に巻き込まれ、ぼろぼろになり満身創痍の体を引きずりながら今まで自分が操縦していたKMFのcockピットから顔を外に出す。建物の中なのか地下なのだろう、隙間から零れる外の光でほんのり明るい。ずきずきと悲鳴をあげる全身を何とか引きずりだすも、痛みで立ち上がることもすらできず、崩れた壁の粉が積もる床にそのまま横たわった。グループのメンバーを表す額につけた紅いバンドは、本来の色の上に自身の鮮血にさらに色濃く紅に染まっている。

旧式のKMFのグラスゴーに乗り、日本を制圧しエリア11と定めたブリタニアへのテロ行為の最中、ブリタニア軍の最新主力KMFのサザーランドの追撃と発生する衝撃により、地盤の脆くなっていた建物の中へと逃げ込んだ際に床の崩落と建物の崩れが重なり、KMFごと埋もれてしまった。

「……ぐっ」

自身の流す血と同じ紅い髪を持つ青年は、荒く呼吸を乱しながら今出てきたKMFのほうへ視線を向けた。はつきりとは見えないがcockピットのモニタの傍に張られた四角い紙を見ながら、力なく笑顔を浮かべた。今の位置からでは本来見えるはず無いそこに映される愛しい人の姿が、はつきりと脳裏に浮かぶ。

ブリタニアが日本へ宣戦布告する10年前の2000年3月29

日。

母親は一人の少女を産んだ。自分の妹となるその少女を。母はお世辞にも要領も器量も悪いが、人当たりがよく職場でも割と人気があった。まだ物心付く前に父親が無くなり、女で一つで仕事と育児をこなしていた。小学校低学年の時には、その母を少しでも楽をさせようと家事や洗濯等を手伝うようになった。友達と遊ぶ時間を削って手伝うことを、母は快く思っていなかったようで隔日で手伝うように決められてしまった。変な所が頑固で困ったものだった。でもそのおかげで友達とも今までのように遊べるようになり、おつき 扇 かなめ 要 という親友もできた。

8歳の時母親が妹となる少女を産んだ。父親の事はなんとなくわかっていたが、子供からしたら背の高い外国人という事しかわからなかった。実際に父親という者を物心付く前に失っていたため、なんとなく父親という存在はこのような感じなのかと、子供ながらに感じるようになった。

そしていつの頃からか、母が夜な夜なこっそり泣く様になり、その外国人も家に来なくなった。理由はわからない、子供心には何もわかりはしなかったが母のなく姿は見るに耐えなかった。耐えられない気持ちを紛らわすために、自分も母親も妹を大切に守っていた。

いつの頃からだろう…、妹は自分の髪がなぜ紅いのかと気にするようになった。妹も自分と同じように物心付いた時には父親が居なかった。だから父親について説明しても納得はしてない様子で、一時期は非常にナイーブだった。理由は学校でのいじめの対象にされていたのだ。それでも負けん気の強い妹は、屈する事無く毎日学校に通っては、帰宅後に自分に泣きつくということが続いていた。

いつもは帰宅すれば泣きついてきた妹だったが、ある日バイトが無い日に扇と自宅へ帰ってきた時に、妹は嬉しそうに母に頭を撫で

られていた。理由はテストで100点を取ったからだ。朝も夜も働く母を助けるためにバイトを始めたかもあり、母の夜に働く回数が少しだけ減っていた。そのため、最近は夕食を三人で食べる事も多くなり、妹は母にべったりしていた。

そんな妹を微笑ましく思いつつ、扇を連れて自室へと向かった。

「なあ扇」

「なんだ？」

「俺…髪を染めようと思う」

「な…本気か？妹の為ってのはわかるけど…、いくらなんでも」

「いいや、もう決めたんだ」

次の日髪を真っ赤に染めて登校し、もちろん教員に大目玉を食らったのは言うまでもない。しかし家庭の事情や彼の学校での素行や成績を考慮すると、無下にできないほど成績優秀であり有名大学進学となれば校名もあがるとの理由により、特別に紅い髪でも許された。その時の妹には、なぜ紅く染めたのかはわかりはしないだろうが、ただお揃いといって喜ぶ妹の顔を見られただけでも、非常に満足だった。兄が紅いという事で、学校でのいじめもなくなりいつもの様に楽しく学校に通う妹の姿を、取り戻すことができ内心ほっとしていた。

こんなありきたりの生活に幸せが、続いて行くと思っていた2010年8月10日……神聖ブリタニア帝国が日本に宣戦布告をした。敗戦国となりイレブンとなった日本は、ブリタニアに搾取されるも無残な様になった。生活はより一層貧しくなったが、それでも家族三人でなんとか暮らす事ができ家族がいればそれだけでも幸せを感じられるようになった。

だが、ゲットーと呼ばれる敗戦国の人間が住む地は、地獄に近くブリタニアの圧政もひどいものだった。虐げられるのはいつも弱者……だからこそ立ち上がることにした。そう……レジスタンスとして。どんな汚い事でもやり、ブリタニアに少しでも復讐することがいつのまにか生きがいとなった。母親と妹が平和に暮らせる日本を取り戻すために……。そして、母を……妹を捨て去ったブリタニア人の男への、復讐の意味も込めて……。

だがそんな生活を送っていたある日、。突然のブリタニア人の来訪、高級車から降りてきた屈強な男のは、ある御方の命を受けて妹を引き取りに来た事。そして数日後に改めて引き取りに来るとだけ言い残し、彼らは去っていった。

屈辱……必要なものは何も無い……、その言葉に怒りを覚えたが母親の口にした言葉でその怒りもすうっと引いてしまった。辛くさびしい気持ちを押し殺す姿をみて、何かを悟り決意したその目は今の自分では想像出来ないほどの絶望を感じているのだろう、そう思い二人から目を逸らした。

「お前はブリタニア人になれるんだよ。そうなれば、もう殴られる事もない。電話だって旅行だって……、自由にできるんだよ」

母親の顔は穏やかな笑顔で、それを聞く妹は悲痛に泣き叫び母親にしがみ付いている。妹が母親の体に顔を押し付けている好きに、母親の目からはゆっくりと妹と同じ雫をこぼす。ただ静かにそつと……。

数日後引き取られた妹は、最後まで泣いていた。乗せられた車の後部座席から二人をずっと見つめながら。車が見えなくなつた後の母親はその場に崩れ去り、視界のぼやける状態で母親を必死に家の中へと連れて行ったのを覚えている。

今は会うことも無い妹の幸せを祈りつつ、母親や日本人が安心して暮らせるようにするため、ずっとレジスタンスとしてテロ活動を行っていた。なんとか手に入れたKMFの操縦を覚え、もともと冴えていた頭脳を活用し戦術を立て、小規模ながら紅月グループの名前が少しずつ日本のレジスタンス達に知られ始めるようになった。あくまでも重要なのは情報で、それを元に数パターンの状況と対策を練りあげる。お調子者の玉城やガツチリとした体格で眼鏡をかけた南、セミロングの紺色の髪をした井上など沢山の気のいい仲間が集まってきていた。

レジスタンスとして活動し、ブリタニア人の住む租界でいつもの様に食料や部品を調達していた。調達といっても手段は様々で漁る、裏ルートで買う、盗むと様々な方法で必要なものを集めていた。所定どりのルートと計算で、盗みを成功させて急いで路地を駆け抜ける。ここを越えればゲッターという道に差し掛かったときに、ちょうど視覚から出てきた何かにぶつかり地面に尻餅を、相手は「キヤッ」という女性らしい声をあげてドサッという音が聞こえた。

「す、すいませ…」

ぶつかってきた相手をみて、一瞬で固まってしまった。ブリタニアの紋章が入った制服を着ているが、紅い癖のある髪に青い瞳。それが昔見た面影とぴったりと重なる。

「いたたた…ちょっとどこ…、お…にいちや…ん？」

「いたぞお！！捕まえろおお」

硬直していた二人だったが、その声を聞き急いで駆け出した。無意識に妹もその後を追いかけた。

2年ぶりに再会した妹は、今までの事を泣きながら話し嗚咽を漏らす。最初は何度も抜け出しては見つかり、何度もしつけされた事。妹の引き取られた先であり、妹の実際の父親のシュタットフェルト家の一員として礼儀作法を叩き込まれたこと。学校の事。

今まで溜まりに溜まっていた事が次から次へと溢れるように、言葉がつむがれ続けた。

その後自分の意見を強引に叩き伏せて、妹と一緒にレジスタンスとして活動することになった。妹は成績優秀で運動神経もいい事から、KMFの操縦はグループ内でも一番と言えるほどになった。嬉しい反面、危険なことはさせたくないという兄心もあり、妹にはどうしても厳しく言うてしまう。そんな時にいつも仲裁に入るのは扇の役目であった。

「うっ…夢？」

昔の事を見ていたのか閉じていた目を開けると、先ほどと同じ崩れた建物の瓦礫に地下と思われるこの空間が、眼球から情報として脳へと送られる。この光景に意識が途端に現実に引き戻された。流していたのか目から零れた雫が、顔の下の床に小さな染みを作っていた。

ジャリ、という砂を踏みしめる音が聞こえ虚ろになりながら、顔をその音の方へ向けた。見えるのは足元だけ。ダークブラウンの口

ーファアーに白いソックスが見える。少し顔の角度を上に向ければ、膝上にまで伸びていたニーソックスにピンク色のスカートが見えた。

（が…くせい？）

その人物が視界に入るように、徐々に近づいてくる。金色の美しい髪を揺らしながら、その青い瞳と美貌でその少女に視線は釘付けになった。

「あなた名前は？」

名前を聞かれたが、相手の来ている制服からこの少女がブリタニア人だと気づき開きかけた口を静かに噤んだ。その行動の何が面白かったのか不明だが、その少女は口の端を上げてにやりと笑った。

「あなた、相当頭が切れる様ね。この前の作戦もほぼ目標達成、今回ののは想定外の地盤沈下がなければブリタニア軍のサザーランドを、この建物の下敷きできたのにね…うふふ…合格」

少女は楽しそうに目を細めて微笑んだ。

「なん…だ？」

「あなた、ブリタニアが憎い？」

「うう…」

体の痛みからついに脳がそれに耐えることに根を上げ始める。その痛みに耐えながら脳が魅せるまやかしの妹が、微笑をこちらに向けてくる。それと一緒に無意識に送り込まれる少女の言葉が、いつの間にかそれが子守唄のように心地が良く感じてくる。

「……か……」

自身の最愛の妹の名前を呼ぶ事なく、意識が闇へと落ちて言った。
それを見ながら人差し指を当てた唇の端をあげて、にやりと笑う。

「うふふ、一緒に……来てもらっわ」

うふふふ……うふふ……ふふ……

紅い髪 の 記憶（後書き）

ああ、ちょっとヤンデレちっくなんでしょうか？
ちよっとキチガイな感じになっちゃう（笑）

アニメにはない場面です。

つまりこの作品に置いて、外伝な位置づけになる感じですが、
まとめちゃいました（笑）
捏造ごめんなちゃい。

桃と藍のナイトメア（前書き）

アニメを元にしたIF話です。
今回もオリジナルな感じですよ。

時間軸的にはSTAGE 07と同じです。

桃と藍のナイトメア

「へえ…これが試作機？」

日本海近郊の海中、太陽の光すら届かず艦本来の色が認識できないほどに深い海底、非許可ながら潜水潜伏中の艦に、ミレイとナナリーは極秘に訪れていた。この艦の格納庫に2機ほど人型自在戦闘装甲騎が設置されていた。ピンクとインディゴのそれぞれ2機を見上げていると、二人は後ろから呼ばれたため振り向く。

「はあゝい。おまたせえ」

褐色の肌、額には国の女性の特徴でもある雫の模様、クリーム色の長い髪を揺らしキセルを吹かしながら二人に手をひらひらと振っていた。ミレイとナナリーは初めて会ったときは、お国柄女性は肌の露出をあまりしないと聞いていたのだが、このラクシャータは例外なのか初めて会ったときから、白衣に胸元辺りのボタンだけ止めた色付きのブラウスに、ローライズパンツといったかなり露出度の高い服装だった。もちろん胸元辺りでしか止めてないブラウスのボタンの辺りからは、ブラジャーが完全に顔を覗かせていた。ミレイとナナリーは最初こそ女性であっても戸惑ったが、今ではすっかり慣れたものだった。

「ラクシャータさん、お久しぶりです」

「ナナリーもあんたもさあ、元気そうでよかったよ」

「うふふ、ラクシャータさんは相変わらずね」

そんな他愛ない話をしながらも、ラクシャータの後に付いてきた

同じく褐色の肌をした男性研究員から、それなりの厚みのある書類の束を二人は手渡されていた。その表紙には『第13世代ガニメデ型KMF試作機』と書かれていた。ミレイとナナリーは表紙をめくるとそこにはびっしりと操作や説明が記載されていた。

「ラクシャータさん、これ全部みなきやだめなのお？」

うんざり、といった表情でミレイはラクシャータへ愚痴をこぼす。先日にも生徒会の書類処理でこの束の2倍以上の量の書類を見てきたため、軽く書類に対し嫌悪感が起きている。一服吸いキセルから話した口から白い煙を吐き出したラクシャータは、そんなミレイを見ながら口の端を上げてにやりと笑う。ナナリーはそれをみて、ミレイのあの笑い方の元はラクシャータのそれだと、なんとなく思いくすりと笑みをこぼした。

「重要などころだけで大丈夫よ。他の部分は以前説明したのとはほぼ変わらないから」

そう言っテラクシャータは、ミレイとナナリーの持つ束から必要な部分だけをこっそり抜き出した。

「新しく追加したのはここだけだから、そんなに難しくはないはずよおん」

先ほどの束の3分の1ほどに減った書類を見て、心底ミレイは安堵し「ふう」と息を吐いた。

ナナリーとルルーシュの母親である、マリアンヌ・ヴィ・ブリタ

ニアがテストパイロットを務め、ミレイの祖父ルーベンが党首を務めるアッシュフォード財団主導で開発が行われてきた機体ガニメデ。首がなくコックピットがむき出しになっているが、実戦配備されても問題ないほどの整ったデザインをしていた。目的は機動力を兼ね備えた兵器としての戦術的価値を保持した運用を開発目標とされていた。また当時は医療関係にも力を注いでいたアッシュフォードは、いずれこのガニメデを医療や介護、事故現場などでも使えるような汎用性を持たせることも視野に入れていた。

しかし開発が順調に行われていた矢先にマリアンヌの急死。これによりKMF開発におけるアッシュフォード財団の発言力は低下し、この研究開発の一線からのリタイアという事態を招く事になった。これを機にマリアンヌの後ろ盾を失い、急激に力を失ったアッシュフォード財団は医療関係からも撤退を余儀なくされ、現在の位置にまで落ちぶれる事となった。

このときのアッシュフォード財団が後援していた医療開発に、ラクシャータ・チャウラーが関わっていたことが縁で、再びアッシュフォードとラクシャータはつながりを持つ事になった。

この時に開発されていたガニメデの研究資料を元に、現在のKMFの構造を分析応用させガニメデベースのKMFとして、ラクシャータの研究チームで独自に開発を行っていた。現在主流となっているサザーランドと旧式のグラスゴーと違い、ガニメデをベースにしているため、機体はサザーランドより丸みを帯びたフォルムになっている。KMF特有な高速移動用のランドスピナーは、展開する前はふくらはぎの部分に収容されており現在のものよりランドスピナー分の横の長さが短くなっている。単にラクシャータがむき出しはかつこ悪いという理由から、このような形に変更されていた。

頭部はグラスゴーやサザーランドのように、無骨なロボット顔ではなくランスロットのような西洋兜のような顔になっている。頭部左耳の辺りから上に伸びたアンテナと左右の肩口から下に伸びたアンテナが、KMFのファクトスフィアと同じ機能を有し、音波や熱源により目標までの距離と数等の情報を収集する。

腕や足の動きをスムーズ且つ最大限に動かすために、胸部と肩と手首から肘までの前腕部、そして膝から下の部分には、色つきの強化パーツが装着されており、耐久力を強化している。手首から手の甲にかけてはナックルガードが備わっており、これを拳前面に展開する事で武器として使用する事ができ、KMFによる打撃の威力を比較的に向上た。

またコックピットには従来の仕様とは異なり、頭部とコックピットブロックが上に飛び出す仕様になり、飛び出した後はコックピットの操作によりある程度自由に落下位置まで移動することが可能となった。

「ただ、まだ武器の製造が間に合わなくてねえ……、適当に回収して整備し直した従来のアサルトライフルになっちゃうけど」

ラクシャータは二人が持つてる書類の最後の方のページをめくる。ミレイの方には射撃系の武器が、ナナリーの法には近接系の武器がそれぞれ載っていた。

「この子達の最終完成系、白百合と黒百合までには間に合わせるからさあ」

そう言いながら持っていたKMFのキーを白衣のポケットから取り出し、それぞれをミレイとナナリーに手渡した。

（うつふゝキョウトのじいちゃん達からの依頼の子より、この子達の方が先になっちゃたわねえ）

ピンクとインディゴの2機を見上げたラクシャータの目には、最終系の姿がはつきりと浮かび上がっていた。

（さて次は、あの紅い子を急いで仕上げないとね）

ピリリと格納庫に響く携帯の着信音、見上げていた視線を音の方へ向けるとミレイが携帯を耳へ当てていた。

「もしもし？ミレイだけど」

「ほう、海底の中でも通じるものだな」

電話に出たミレイは、相変わらず皮肉じみているが素直に驚いている電話口のシーツに苦笑いを浮かべる。現在潜水艦から会場へ向けて電波を受信できるようにアンテナを伸ばしてもらっていた。そのためこの海底の艦の中でもミレイの携帯は電波を受信できている。

「そう言う風をお願いしたからね。それよりどうしたの？」

「ああ、ルルーシュの事なんだが……」

「ええ……、そういう事ね。ちょっと聞いて見るけど」

そう言って携帯電話を少し離し、ミレイはラクシャータの方へ向いた。

「早速だけど、このナイトメアすぐ出せる？」

「あら？もうだすの？」

「今、コーネリアの部隊が…ね」

「ブリタニアの魔女がねえ…」

少しでも思案していたラクシャータは、機動テストも兼ねたデータ収集ができるという事も有り「いいよ」と、了解の返事を出した。

「じゃー早速このパイロットスーツに着替えて」

「はい」

差し出されたそれをナナリーは受け取り、続けて受け取ったミレイはラクシャータの指示で、格納庫から一旦艦内の通路へと向かいシャワー室を目指した。

「さあ、相手はブリタニアの魔女だよ。急いで初期起動行っよう」

ラクシャータはそれぞれのKMFの操作パネルを操作しながら、他のメンバーや整備士達に向けて声を上げた。

桃と藍のナイトメア（後書き）

基本二次創作の原作沿い萎えな私ですが、ギアスだけは終わりが好きではないので、原作しつつIFしつつ、私が考えるラストまで突っ走りたいと思います。

本当はSTAGE7の終わりまでで1つになる予定だったのですが、区切っちゃいました。長すぎるのも私的にきつかったので（笑）

更新が少し早すぎる気はしますが、思いついたら溜めずに書いてしまおうと思います。

ガニメデを元にして作ったKMFは、気づく人は気づくと思います
が、アレのまんまですよ（笑）

それでは、またみてギアス（笑）

試作のKMF（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

STAGE 07の辺りです。

コーネリアとの頭脳戦後の部分になります。

試作のKMF

「んしょっと」

夜の静寂の中、不意に目が覚めたミレイはいまだ少しだけ行為の余韻を残し、熱と香りを残したベットから起き上がり、手近にあったブラウスを羽織る。右手で左に羽織ったブラウスの端を掴み、体のなまめかしい部分をすべてブラウスで隠す。

「んふふ」

立ち上がったミレイは後ろを振り向くと、規則正しい寝息を吐きながら自分の体を味わい尽くしていた愛しい男性ひとの、整った綺麗な寝顔を見て笑みをこぼす。ベットの中での行為を思い返し少しだけ頬が熱くなる。それでも彼から目を離せないのは、彼がこの世のどんなものよりも美しさと気品を兼ね備えている唯一無二の存在と思っているからだ。しばらく眺めたミレイは、熱く籠った息を吐きベツトから立ち上がった。

ゆつくりと部屋を舐めるように視線を流す。ふと入り口の方へ視線を向けると、顔は見えないがそこには人の姿が見える…否、見えるというより感じているという方が正しい。殺気も殺意も感じずにただそこに立つ人…自分がよく知る少女の姿をしたそれは、表情をはつきり見せる事無くただただミレイの方へ体を向けていた。

「ふう」

その少女の姿のそれをみて、少しだけざわついた自分の心を落ち着かせようとゆつくりと目を閉じ一息つく。ざわついた心のそのの落ち着きを取り戻し、閉じたときと同じようにゆつくりと目を開ける。先ほどまでそこに感じていた少女の姿のその存在はなく、あ

るのは窓から差し込むほのかな夜明かりが照らす白い部屋のドア。

「ふふ……、手ごわいライバルだなあ」

ミレイの見た少女の姿をしたそれは、時々ミレイの前に現れては何をするわけでもなくただ視界に映る。その正体についてはミレイはわかっていた。

それは、自身の中に潜む少女に対するドス黒い嫉妬の一部。ただ彼に愛されていても、それ以上に欲してしまう欲望の塊に不安の集合体。こんな時は少しだけ嫌悪に陥り、いつも優しい彼の妹の事を思い浮かべる。まっすぐな兄思いで優しい心と、固い決意を秘める少女。自分の不安と嫉妬の矛先である同時に必要とし守るべき存在。でもきつと原因は少女ではない事もわかっていた。彼女の中でたゆたう嫉妬の渦の中心にあるのは、……それは枢木スザクの……存在。

少年への冷やかな思いと同時に、愛すべき少女に謝罪をしたミレイは再び愛する彼……ルルーシュの眠るベットの中へと潜り込んだ。すぐ近くで彼の鼓動を感じるため、少し身を縮こまらせて彼の胸元に顔をおしつけた。

「おやすみ……ミレイ」

起きていたのかミレイの頭の上で聞こえたその声に、ぴくつと体を震わせて顔を声の方に向ける。うつすらと開かれた隙間から覗く紫電の瞳が、ミレイを双眸で捉えていた。少しだけ首を伸ばし目を瞑る。シーツのすれる音と、彼の体が少しだけ動き暖かくやわらかい感触が彼女の唇と重なり、二人だけの熱い営みが夜の静寂に熱を帯びさせていく。

「……さん、…イさん起きてください。ミレイさん」
「ん？」

ゆさゆさと揺れる体の振動と、自分の名前を呼ばれる声に気がついたミレイはゆっくり目を開くと、そこには少しだけ焦ったようなナナリーの顔が目に入った。

「あれ？あたし寝ちゃった？」

「はい、それはとても気持ちよさそうに」

『夢か』と理解したミレイが大きく伸びをすると、先ほどの焦った表情から一変し安心したようにナナリーは微笑んだ。ただKMFを移送するため、丁寧に積み込まれたこのコンテナの中にはナナリーとミレイの他にピンクとインディゴのKMFだけが乗っている。ハイウェイを走っているのか、タイヤから伝わる振動音が常に一定のため揺れも規則正しい。

「先ほど運転席から連絡があつて、そろそろ目的地付近に付くそうです」

「もうサイタマゲッター付近？」

潜水艦にいるときのシーツからの電話と、テレビでサイタマゲッターに潜伏しているテロリストに対して、包囲作戦を展開中とニュースで報道されている状況から、ルルーシュが向かったとされるサイタマゲッターを目指していた。最悪の事態を想定し、ルルーシュの置いて行つたゼロの装備一式を持ったシーツも現地へ向かっていた。

ピーガガ……

「はぁーい、もうすぐ着くんでしょ？」

数時間前まで一緒にいた女性、ラクシャータの声がコンテナ内に響く。

「はい、もうすぐサイタマゲッター付近に」

コンテナ内に設置されたスピーカーが鮮明にラクシャータの声を響かせ、高感度マイクがラクシャータに二人の声をほぼノーノイズで送られる。

「あんた達二人の腕は信じてるけど、初陣なんだから傷つけずに帰ってきてよお」

「あら、ラクシャータさんは私とミレイさんを信じてくださらないのです？」

「信じてるけどさあ、その子たちを産んだ母親心ってやつよ」

「相変わらず無茶言うのねえ、でもそういう所好きですよ」

「それじゃあ、またあとで」

通信を終えた二人は、どちらからともなく寄り添い抱き締める。

「少しだけ……緊張します」

ミレイの後ろに回した手の力が少し強くなる。それを感じたミレイは、ゆっくりとナナリーの背中を上下にさすった。少しそれを繰り返すと、ナナリーの手の力が少しずつ弱くなりどちらからともなく体を離れた。

「行きましたようミレイさん」

「うん、行こうナナリー」

ナナリーは強化パーツ部分がインディゴカラーのKMFに、ミレイはピンクからーのKMFへと乗り込み、コックピットのモニターの右下にある差し込み口へキーを差し込む。モニターにID入力画面が表示され、そこへラクシャータから教えられたIDを打ち込むと、KMFはそのIDを認証し初期起動を開始した。

サイタマゲッターの戦闘は、呆気ないほどあっさりと終了した。

コーネリアという名前の影響もあり、サイタマゲッターに潜伏していたテロリストは、はじめから心を折られていたかのように脆い物だった。指揮官の出す指令に従い、初めの内は成功していた作戦も最終的にコーネリアの知力に劣り、その指揮官の指示も聞かずに独断でバラバラなテロリスト達はあっという間に殲滅させられた。

作戦終了後、指揮用陸戦艇のG-1ベース前に整列させられたKMF部隊は、G-1ベース内にいるコーネリアの指示によりコックピットから素顔を晒すよう指示が下った。整列されたKMFからパイロット隊が順番に素顔を晒していく。

「貴公の番だ」

コーネリアの騎士であり、長髪をオールバックにし後ろで一つに束ねているギルバート・G・P・ギルフォードは、なかなかコックピットから出てこない1機のKMFへ向かって鋭く威圧するように言葉を放つ。それでも出てこないコックピット内の少年の葛藤をあ

ざ笑つかのように、冷たく催促を告げる。コックピットの少年は静かに「わかりました」と答えた。

「ゼロだ！！ゼロを発見」

第三者のパイロットが叫び、それぞれが驚きと動じにそちらへ視線を向けた。骨組だけにぼろぼろなビルの上で、吹く風にマントをたなびかせながら堂々とその姿をコーネリアに、そしてその少年の前に現した。下からブリタニア軍人がライフルを手に射撃を開始する。それとタイミングを合わせるように、体を後ろへと倒しビルから飛び降りた。

「畏の可能性は？」

ゼロの映像を見ていたコーネリアは、冷静にいくつかの可能性の内1つを口にする。コーネリア率いる軍の將軍であり、割と短い髪を後ろに流し顔には右眉毛上から左頬の辺りまで斜めに傷跡がついている彼の名は、アンドレアス・ダルトン。数多の戦闘を経験している彼はコーネリアの問いに対し一言で肯定を示した。

「ミレイ、ナナリー…頼んだぞ」

「まっかせてえ」

「シーツーさん、どうかご無事で」

シーツーからの通信が切れたと同時に、ピンク色のKMFが勢いよく建物の隙間と隙間を縫うように移動を開始する。コーネリアやその親衛隊の乗るKMFはG-1ベース前に構えているが、他の兵隊は消えたゼロを探すように3機1小隊で搜索活動を行っている。瓦礫の積まれた山の壁に身を潜め、アンテナが感知した1小隊が接

近するのを待つ。最後の3機目が通り過ぎると動じに飛び出したミレイは、照準を足元へ合わせトリガーのボタンを押す。それに反応するように、KMFがアサルトライフルのトリガーを引く。銃声と共に飛び出した銃弾が数発命中しランドスピナーを破壊すると、サザランドは急激に失速する。

「なんだ？……なんだあのナイ」

KMFのパイロットが気づいたときにはすでに遅く、ミレイのKMFのナックルガードが展開された拳を、サザランドの顔面に叩きこみファクトスフィアを潰した。モニタの不能にランドスピナーの不能になったサザランドのパイロットは、脱出レバーを引きコックピットを射出させた。

「な、識別不明のKMFが!!」

1つの小隊から、G-1ベースへと連絡が入るも途中で悲鳴と共に通信が途絶えた。

「やはり畏だったようだな」

「そのようですね。搜索を中止し部隊をG-1ベース前に集合させますか？」

「ふうむ」

ミレイと同じようにナナリーの乗った、インディゴカラーのKMFも同じように1小隊ずつ撃破していく。ミレイのKMFより近接能力に秀でているため、アサルトライフルで威嚇しつつも正確な動きで間合いを詰める。右手にはナイフのような短剣を逆手に持っているが、これはラクシャータ考案の試作近接武器であり刃がチェーンスーの様に高速回転して切り裂く回転刃短刀であり、これに触れ

たKMFの部位をあつという間に切断する。

「ギルフォード」

2箇所が発生しているKMF部隊の消滅に、腰を上げたコーネリアはギルフォードを呼んだ。

「なんでしょうか姫様」

「片方の正体不明機へ向かってくれるか？ギルフォードよ」

「承知いたしました」

「もう片方はいかが致しましょう」

「残りの全小隊を向けよ」

「はっ」

2つ目の小隊を倒し終えた所で、新たに近づく正体をリーダーに捉える。やがてモニタに映るそのKMFは今までのサザーランドのそれとは違い、赤紫系のまさに騎士と言わんばかりの外見のKMFは背中に巨大なマントを羽織っていた。

「ミレイさん、こちらに親衛隊と思われる小隊が来ました」

「親衛隊？つてことはブリタニアの最新式のKMF……、たしかグロースター」

「あれがグロースターなのですね……」

赤紫の機体に、西洋の兜部分にファクトスフィアが備え付けられている。左右の腕の付け根の部分にはスラッシュハーケンが装備されていた。現在ブリタニア軍主力のサザーランドの発展型であり、近接戦闘用に格闘性能が向上している。手武装のランスは金色で、柄と刃の結合部分には外周に4枚のブレードがついており、サザーランドの装備のランスとは形状デザインが違っており、外周のブレ

ードによって刺突の威力も向上していた。

「さて、我が騎士ギルフォード相手にどこまでできるかな？ゼロの仲間か……それとも……」

戦士としての血を滾らせながら、コーネリアは静かに勝ち誇った笑みを浮かべていた。

試作のKMF（後書き）

ギルフォードとダールトンで、今考えるとなかなか素敵な忠義男です
ね（笑）

次回ギルフォードVSナナリーな感じです。

本当はこの回で全部書こうと思いましたが、
やっぱり必殺区切りってことで、区切っちゃいました。

次回もお楽しみに♪

またみてギアス（笑）

ギルフォードの誤算(前書き)

アニメを元にしたIF話です。
前回の続きからです。

時系列的にはSTAGE07です。

ギルフォードの誤算

三機が織り成す息のあったコンビネーションに、インディゴカラーのKMFは防戦一方となっていた。左手に持っていたアサルトライフルは既に弾切れとなり、すでに放り投げていた。現在の武装としては右手に逆手で持つ刃の部分がチェーンソーのように高速回転する迴転刃の短刀と、左手のナックルガードを拳の前に展開した打撃のみ。相対する三機の持つ大型ランスに加え、コックピットの有る部分の前面胸部の下に設置されている内蔵式対人機銃等と比べると、いささか貧弱さを感じずにはいられない。

「イレヴンにしては中々やるな」

「左様ですな」

指揮用陸戦艇G-1ベースの一番上に存在し、作戦室に該当するコンダクトフロア内のモニタを見ながらコーネリアは漏らした。ダイルトンやその他の階級が上の軍人が取り囲む、周辺MAPとKMFをマークと線で表示しているブリーフィングテーブルと、コーネリア正面の壁に取り付けられた大型モニタには同様の情報が連動して表示されていた。青いマークが味方であり赤いマークは敵を示す。ギルバートを向かわせたほうの敵のKMFは、三機からの攻撃を受けつつもいまだに生存しており、残りの正体を向かわせたほうのKMFは器用にゲッターを移動しながら挟撃の回避と撃破を繰り返していた。

「ミレ…イさん」

何度目かのフェイントを繰り返し、アサルトライフルの銃弾を打ち込んだミレイは、コックピット内のスピーカーから聞こえてきた

ナナリーの声に反応する。

「そっちは大丈夫？」

「はい…ですが、親衛隊三機は少々厳しいです」

少しだけ弱音を吐いたナナリーに対し、相当負担が掛かっていると判断したミレイは自身のギアスを展開させる。左目に赤く輝かせ自身の体から赤い粒子を漂わせる。

「ナナリー、周囲の映像を転送してくれる？」

「はい」

すぐに送られてきた映像を元に、実際の現地のそれを正しくイメージする。ミレイから漂う赤い粒子はやがてミレイの乗るKMFからも漂い始める。

「すぐそっちに行くから……跳躍」

「消え…た？」

「リーダーから消失…ということだ」

G-1ベースのコンダクトフロア内は、ざわついていた。赤い正体不明の敵KMFが突然リーダー上からロストしたのを、追いかけていた正体のKMFのパイロット及び、コーネリアやダールトンが見ていたモニタからも消えていたからだ。

「わかりません。ただKMFが赤みを帯びたと思ったら突然……」

ピツという敵を発見した際の機械音と同時に、先ほどと同位体なのかは不明であるが赤い点が現れる。その地点は――

「ギルフォード!!」

「わかっております、姫様」

コーネリアの少し強い叫びに対し、彼女の騎士であるギルフォードはいつもどおり冷静な声で、それに返事を返す。コーネリアの叫びの元凶であるそれは、周囲にある一番近い建物の上にたたずむ一機の機影。先ほどまで対峙していたKMFとは、カラーリングだけが違うその機体をモニターとレーダーで捉える。

「お前達二人はあのピンクのナイトメアを」

「イエス・マイロード」

ギルフォードの配下の2機が、もう一方のKMFへ向かうのを確認し彼は大型ランスの閉じていた4つのブレードを展開する。突進力を高める為のそれは、彼が本気で戦う合図でもあった。

「ミレイさん…そちらをお願いします」

ナナリーは逆手で持っていた回転刃短刀を順手に持ち替えて構えを取る。刹那の間のうち2機がランドスピナーを急速回転させ、地面を滑るように前進しながら間合いを詰める。大型ランスのなぎ払いをナイフで受け止め、そこを支点とし、KMFをランスの上を回転しながら飛び越える。ギルフォードの駆るグロースターは、すぐさま体制を整えて間合いを取った。

「小癪な…」

大型なランスは、ナナリーの持つ短刀とは違いリーチが長い分、軌道予測が付きやすく攻撃の型もある程度に絞られる。ある程度の予測とKMFの動きから、対処するように反応するナナリーは間合いの取り方が絶妙であり、それがギルフォードに決定打を撃たせない要因になっている。

「シミュレーターと実戦では、やはり違うものですね」

今は亡き母マリアンヌの血の影響か、ナナリーの反応速度はギルフォードと対峙してから、その速度を少しずつあげている。マリアンヌはその卓越した操作技術により、閃光の異名を冠する程の人物であった。

通常のサザーランドではナナリー達の操作速度に機体が悲鳴をあげていたが、ラクシャータによる特注製造のこのガニメデ型KMF試作機は、ナナリー達の操作速度に耐えうる程であり今まではとくに稼動終了している時間を越えても、機体は悲鳴すらあげず安定した動きでナナリーの操作通りに反応する。

「いい子ね…、これならば」

フルスロットルで加速する試作機は、細かなフェイントを入れつつリーチに長けるランスを持つグロースター相手に、一步も引かずに互角の勝負を続けていた。

「どお？データのほうは集まってる？」

ミレイとナナリーのKMFを積んでいたトレーラーの運転席では、KMFから送られてくる情報が一つの端末に表示される。それを見ながら別の端末へすばやく正確に打ち込んでいく運転席の2名の男。一人はラクシャータと同じく褐色肌の男性で、もう一人はその男性と比べれば白くオセロのそれを連想させるほど違いがある。色白の男の髪は紅く、男性にしては長髪と呼べるくらいの長さがある。

「ナナリー嬢の乗る白百合の方は、想定していた数値の上限に近いですね」

紅い髪の男は送られてくる情報を端末に入力しながら、ラクシャータへ答えた。

「ミレイの方はあ？」

ナナリーの乗るKMFのデータを表示するモニタの隣には、同じようなデータを表示するモニタが設置されており、紅い髪の男はそちらのモニタへ目を向けてデータを確認する。

「終始一貫して一定の高い水準を保っています。どの機体を相手にしても順応してますね」

「ふう〜ん……、今ナナリーはどんなの？」

「コーネリアの親衛隊だと思いますよ。グロースターって最新KMFです」

「今送られてきたデータをこっちでも見てるけどさあ、最終的にはもつと性能上げないとナナリーはもつと化けるかもねえ」

（んふふ、ミレイはまだ本気じゃない……か）

ビルの上から飛び降りたミレイの乗るKMFは、迫る2機のグロスターに対してアサルトライフルを唸らせる。ブリタニア軍の最新兵器であるグロスターは、格闘性能が向上しており動きのクイックネスがサザーランドよりも高い為、グロスターのランスの間に合い外ぎりぎりから撃つてはいるものの、致命的な一撃を与えるには至らない。その内弾薬が尽きたアサルトライフルを放り投げて、相手のグロスターの2機を正面に据える。

——ふう

一息ついたミレイは、相手の動きを予測しながらも冷静に対策に付いて考えを巡らせていた。ナナリーのKMFと違い格闘性能よりも射撃性能を重視してあるこの機体の近接戦闘に対し、若干の不安を感じていた。射撃時の機体の安定性を上げるためにナナリーのKMFより全体的に重く、ランドスピナーでの速度にも若干差が生じている。現状ではややグロスターの方が速く、間合いを開け様としても近づかれてからではなかなか難しいとミレイは実感した。

——相当のやり手だわ……サザーランドのパイロットとは一味違うわね♪

画面の端では一対一でやりあっているナナリーの乗るKMFの姿が確認できる。

——さて、

意を決してランドスピナーをフルスロットルさせるため、足元のペダルを踏み込む直前にコックピット内に呼び出し音になる。画面の右下には『SOUND ONLY』の文字が表示され、ミレイを呼び出した本人の声がスピーカーから聞こえてくる。

「はい♪苦戦してるみたいねえ」

「まあねえ……親衛隊を少し侮っていたわ」

「この子の初実践投入にしては、なかなかいい結果でたからさあゝ
そろそろ帰ってきていいわよあゝ」

「そうは言ってもねえ……」

「あんたにまだ教えてないものが一つあんよあゝ、解除コードMO
CCAP入力」

ラクシャータの言われた通り、コックピット内の端末に解除コードを入力していく。入力コード確定のボタンを押すと、画面上に解除用の認証コードを入力するよう文字が表示される。

「認証コードはVASRAG」

「はいはいつとゝ」

ピーという音と共に武装解除と表示され、右足の強化パーツの脛の部分が外に大きく開く。そこからガシャンと現れたのは、よくある拳銃のグリップの部分。それを右手で引き抜くと一丁の拳銃が姿を現した。黒一色で統一されたそれは、実際に人間が扱う銃をそのまま大きくしたようなもので、銃身の上部は後ろへスライドするタイプで銃撃時の衝撃をスライドによって緩和、またそれを利用して次弾装填を自動化したそれを連想させる。

「その形状はあたしじゃなくて、あんたが連れてきた坊やの趣味よ」

「ああ……」

そのラクシャータの答えに納得した為、ミレイはあえて追求はしなかった。

「それで…ラクシャータさんこれは……って!？」

コックピット内でミレイが会話していても、対峙している相手には関係なく二機のグロースターが同時にミレイの方へと加速しだす。ミレイはそれに合わせて近づけさせないように移動を始める。後走しながら同時に超信地旋回をして、機体を反転させる。

「まあ、とりあえず撃つてみなよお……そうねえ、足を狙いなさい」

グロースターにやがて追いつかれたミレイは、緩急をつけた動きで相手のランスを挟撃を避けていく。銃を手にしていない左手はナツクルガードを展開しつつ、当たりそうなランスに対してそれで弾く。

——
今だ！
——

そう感じたミレイは、銃口を右から来るグロースターの足元へ向ける。右手で握るレバーの親指の所にある丸いトリガーのボタンを一気に押す。それに連動してKMFの右手の人差し指で、手にした銃のトリガーを引く。トリガーが引かれ初めてから螺旋状に作られた砲身内に電圧が加えられ、装填された銃弾が高速で螺旋回転を始める。完全に引き終わると同時に、高速螺旋回転した銃弾が電磁の力により射出される。

ガ
シ
ユ
ウ
ン

撃ちだされた銃弾がグロースターの足目掛けて、一気に空間を突き抜ける。撃ち出された銃弾に反応する間もなく貫かれたグロースターは、ランドスピナーの制御を失い急激に失速を始める。

発射と同時にその反動で銃の上部が後ろへとスライドするが、弾

全体を撃ち出しているのか特有の排莢という動作は存在しない。そのままグリップ内部にある弾倉から次弾が装填される。そのままミレイは狙いを左足に変えて、先程と同じようにトリガーを引く。

銃撃音と同時に右足を貫かれたグロースターは体制を崩し、胴体が地面に接触しそのまま勢いが止まるまで地面を削った。

「これ……すごい」

威力を目の当たりにしたもう一体のグロースターは、危険と察知したのか慌てて建物の影へ身を隠した。

「試作品だから弾は六発しかないから気を付けるのよ」

「六発もあればじゅくぶんでもこれ……アサルトライフルと全然威力が違う」

「そりゃそうよ、あんなのより、このヴァスラグは射出時の弾速は倍以上に速くなっているし、加えて弾が高速で螺旋回転してるから貫通力もアップよん」

「ヴァスラグ？」

「Volt Accelerator Spiral Revolver Ammunition Gun、略してVASRAG。そんなもってタイプは、セミオートマチックよん」

スピーカー越しでもわかるほどラクシャータには自身が籠っていた。

「そいじゃ、ご自慢のVASRAGでもう一体しとめてくるわ」

「そろそろエナジーファイラーもいい頃出し引き上げなさいよ」

それだけ伝えてミレイの返事も聞かずにラクシャータは通信を切った。

「あちらを心配するなんて、私を過小評価してます？それとも」

ランスの大振りな動きの隙について、左手のナックルガードや器用にKMFを操作し微妙な加重操作で蹴りを繰り出す。

「面白い動きをする…だが!!」

わずかなナナリーの隙を見出したのか、強制的にランスを左手のナックルガードで防がされる。

「打撃であれば多少は覚悟の上、気を付けるべきはそのナイフ!!」

完全にタイミングを計られたナナリーは、突き出されたランスをなんとか左へかわすもギルフォードはすかさずその方向へ薙ぎ払う。なんとか左手を突き出し受け止めているも、片手と両手ではパワーに差があるため、徐々にナナリーの機体が押されていく。

「さすが親衛隊を率いる程の……、仕方ありません」

コックピットにあるパネルを操作し、画面上には『右前腕部固定ロック解除』と表示される。それを確認したナナリーは右手に持つ短刀を逆手に持ち変えて狙いを定める。

——相手頭部左側へ…

右手のレバーで微調整を行いつつ、ナナリーの目はギルフォード

の乗るKMF頭部を見つめる。手の角度を変えつつ、徐々に押されている機体の位置も入れて計算を重ねる。

——行きますよ!!

意を決したナナリーは右手のレバーを思い切り前へと押す。それに合わせてKMFが右腕を前に伸ばす。レバーを握る手の人差し指と中指の所にあるトリガー型のボタンを手前に引く。右手前腕部の肘側が外に開き、ドンという音と同時にブラスター展開し、勢い良く前腕部だけが肘の部分より飛び出していく。肘と飛び出した前腕部の間には太いワイヤーが伸びていた。

「なんだと!？」

突然の飛んできた手に反応はするも、逆手に持たれていた短刀の刃が、頭部のファクトスフィアに斬り込みを入れていた。手元のレバーでブーストを制御し、腕を動かすことで飛び出した前腕部を自在に操る。飛び出した前腕部はナナリーの操作により、すでに腕側にワイヤーを巻き取り始めていたその腕は、急速に前腕部との間を縮めてガチャンという音と共に腕と再び装着し、連結部分を固定口ツクさせた。

「まさか手を伸ばすとは」

なんとか体勢を整えたギルフォードであったが、背後から撃ち出された銃弾にきづけず左足を貫かれたグロースターはそのまま地面へと膝をついた。

「くっ、後ろからとは卑怯な」

機体のコントロールを失ったギルフォードは、モニタに表示される二機のKMFの姿を睨み付ける。

「やるじゃない、まさかあそこでワイヤードフィストとは」

「ありがとうございます」

「それじゃ、エナジーファイラーがそろそろ危ないから、引き上げましょう」

「はい。お兄様とシートさんは無事でしょうか？」

「大丈夫よ」だって、あのシートが一緒よ」

「うふふ、そうですね」

二人はギルフォードのグロースターに背を向けると、ランドスピナーをうならせてこの場を去って行った。

「大丈夫か？ギルフォードよ」

「申し訳ありません姫様」

「よい。今回はゼロについて少し理解できただけで、良しとしよう」

「この汚名は必ず……」

「ギルフォードよ……、今は早く私の傍に戻ってきておくれ」

「……イエス・ユア・ハynes」

ギルフォードの敗北……、敵国のKMFに負けたのはコーネリアの騎士になってから初めての事であった。

ギルフォードの誤算（後書き）

あー、VARISチックな武器欲しいなあと思って、勝手にオリジナルの武器作っちゃいました（笑）

やっぱり専門知識無いから、ダサダサだけど・・・。

きつと、ミレイとナナリーのKMFの元がなんなのか、わかる人にはこの回できつとバレマスネ（笑）

心傷のニーナ（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

STAGE08の辺りです。

それでは張り切ってどーぞー♪

心傷のニーナ

青く澄んだ空を泳ぐ白い雲、太陽から差し込む日差しを浴びながら気持ちよさそうに泳ぐ雲を、移動中の電車内の窓から眺める。窓際に座るミレイは、突発性イベント企画症候群患者特有の症状を発揮して、急遽前日の金曜日に生徒会メンバーに声を掛けていた。

男子禁制の旅行というわけではないのだが、リヴアルは外せないバイト、ルルーシユはナナリーがいるからと、ナナリーはルルーシユと一緒にいるからと、スザクは軍の仕事があるからと、カレンは体調がすぐれないからと言って、必然的に集まったのはミレイとニーナとシャーリーの3人となった。

「ほんとにルルも来ればよかったのにねえ」

「別に…そういうわけじゃあ…」

見透かされているようなミレイの笑みに、シャーリーは声を窄めていく。

——来て欲しかったのは私も同じよ…あゝあせっかく大人っぽくしたのにい

決して明かされる事の内心の声を、今ここにいない愛しい人へと語りかける。今日のミレイは、水色のワンピースのドレスはスカートに数段のフリルがついており、そのワンピースの上に胸元をリボンのように縛り、胸を強調させる白のジャケットを着ていた。窓の外を眺めながら、決して来ることの無い返事を、ミレイは望んでいる。これからあと何度今日の様な穏やかな日を過ごせるのだろうか、答えの見えない未来を想像する。決して、そう多くは無い事を悟りながら。

ふいに電車がトンネルに差し掛かると同時に車内が暗くなる。「ひっ」という声にならないその叫びを漏らし、ニーナは体を強張らせた。服の裾を握り、その力が徐々に強められていく。それに気づいたミレイは、ニーナの前に屈んでそのおびえる両手を優しく包んだ。

「大丈夫。河口湖はブリタニアの観光客も多いから、ゲッターみたいに怖くないよ。一緒にいるから。ニーナは一人じゃない、シャーリーとあたしがついているんだから」
「……うん」

その優しさのこもる声と言葉、そしてミレイとシャーリーの笑顔に安堵してニーナは返事をした。

今から遡る事3年前――

ニーナ・アインシュタインは、祖父の影響から昔から科学に没頭しているため造詣が深く、没頭している時の集中力は凄まじい物であった。元々ブリタニア本国に居たのだが、幼馴染のミレイがエリアー11の学校に通うという事をきっかけに、親元を離れたいという思春期の心とミレイと一緒に居たいという思いから、ミレイが通うアッシュフォード学園に通うことを決めた。本国に居た時から少しだけミレイに依存していた。

中等部2年生となったニーナは、一人で居る時は相変わらずパソ

コンへ向かい自分独自の理論を打ち込みながら、特性や属性の変化等の研究を行っていた。簡単に材料が揃えられるものは実際に実験をし、検証を繰り返す。材料が揃えられないものに関しては、データ上で様々な情報を打ち込み、仮想ではあるがそれなりのデータを作成していく。

この頃は今では想像し難いほど、ニーナは活動的で材料集めに良く街へと繰り出していた。

——よし、準備できたつと……いつてきまーす

そう頭の中で呟いたニーナは、お気に入りのホワイトフェイクフアークポシエットを肩に掛けて、アッシュフォード学園の女子寮を後にした。頭の中で研究の続きをしながら、今日探す材料の事も頭の片隅において置く。脳内作業をしながらも車や対抗から来る人に注意をして歩いていると、あつという間に最寄駅に到着する。

ブリタニア人と名誉ブリタニア人が住む租界——その一角にあるアッシュフォードは、街等への交通手段等を考慮した場所に立地されていた。マネーチャージ式のカードを駅改札のセンサー部分に近づけると、ピツという音と共に改札が開く。この電車は租界をぐるりと一周しており、外回りと内回りの2つありそれが数分間隔で運行していた。

タイミングよく来た電車に上機嫌になったニーナは、空いている席に座り発進した電車の心地よい揺れを感じながら、また頭の中の研究の続きを始める。脳内の研究を描きながら心地よい揺れの影響もあり、暫くしてうつすらと開けた目に自分が降りる駅名が書かれた看板が目に入ると、ニーナは慌てて席を立ち乗り込もうとする人を押しのけて駅のホームへと降り立った。

——危なかった。この間みにたいに2週なんてしたくないし……

つい最近やらかした失敗を思い出しながら、動悸の激しい心臓が落ち着くまでゆっくりと呼吸する。最後に大きく息を吐きニーナは駅の改札口へと向かった。

戦後4年経った今でも一帝国に数字で呼ばれる敗戦国の人間が住むゲットーと呼ばれる地域と、ブリタニア人と一役所で手続きをして有る程度の自由と身分を保障された敗戦国の人間《名誉ブリタニア人》が住む租界の格差は広がるばかりで、ナンバーズが住むゲットーはブリタニアからの支援はなく、ナンバーズ自身が少しずつ復興を行うため、4年経った今でも少しも改善はされていない状況だった。租界から見下ろす形で存在するそのゲットーは、瓦礫の街という言い方が似合うほどに見るも無残な姿を晒していた。

——さて、と

鞆に入れたメモを取り出して、買うものと店を考えて効率のいいルートを考えるも特にそんな遠くも無いため、メモの通り順番に回ることにした。そうは言っても女の子の買い物は得てして単純ではなく、順番どおりに店に向かう間の店の服や小物を眺めてしまい、結局はそれだけでも意外と時間を食うものである。

それでもニーナはその時間は極端に少ない。服や小物の買い物は一人で行く事は少なく、今回のような実験材料目当てでできている時は、服等もはや眼中にない。基本的に服を買うときは、ミレイと一緒に来る事が多く、最終的にミレイの趣味に走らされ結局は弄ばれるのが、お決まりになってきている。

——えっと、あとは駅前のあそこで最後

すでに数件程店を巡り、意外にも早く材料が揃ってしまったニー

ナは、メモに書いたものと購入して鞆に入れた物を確認して行く。
個数を間違えないように数えつつ、頭の中で図式と寮へ帰宅してか
らの事を考えながらニーナは駅へと向かった。

「あれ？」

そう…駅へ向かったはずだった。

「ここ…は？」

冷静になったニーナは辺りを見回す。建物に日差しを遮られ薄暗
い路地に入り込んでいた。表の通りと違い、壁や道が汚く不気味さ
を感じさせる。少しだけ体を強張らせたニーナは、ゆっくり後ずさ
りをして表の通りを目指す。しかし――

「げ！？ブリキ野郎がいるぞ」

「ひっ！！」

体をさらに強張らせたニーナはぎこちなく後ろへ振り返る。そこ
には表通りからニーナの方へ歩いてくる人影が数人。急いでいるの
か…それとも焦っているのか全員の息が荒い。

「あ……ああ……」

恐怖で震える体を必死に動かそうとするニーナだが、頭を占める
のはもはや実験の事ではなく純粹な恐怖。人影が近づいてくるとは
つきりとその正体が見えてくる。

「い……イレヴン？」

恐怖のニーナがその人影の正体に気づき口にした言葉。それはまさに禁忌に等しい言葉であり、近づいてくる者達の怒りに触れてしまうそれでもあった。それでも戦勝国であるブリタニアの人間にとつては、それは覆らぬ事実でありただそれを口にしていただけに思っている。しかしブリタニアに負けエリア１１となり敗戦国になろうと、日本人と言う誇りを失わない人にとってはそれを汚されたと同位の事。

「ブリキのガキのくせにい」

その中の一人がニーナに駆け寄り緑色の彼女の髪を掴む。

「痛い！！いやああ、離して！！」

ミレイのように伸ばし軽くパーマを当てていた彼女の髪は、今の彼らにとっては貴族のそれに似ているらしく苛立ちを加速させてしまった。子供とはいえ、誇りを踏みにじられた彼らの理性のタガはずれ、ニーナの左頬を明らかな成人男性の拳に殴りつけられる。鈍い音と同時に掴まれていた髪がブチブチ音を立てた。

「うぐ……あああ」

今までに味わった事の無い鈍痛に苦痛の嗚咽を漏らし、同時に恐怖で体がいう事を聞かず倒れこんだ道路の上でもがく。

「俺たちは日本人なんだよおお！！」

骨と骨、肉と肉の鈍い音が幾度も路地裏に響く。だがにぎやかな表通りの華やかな音にかき消され、路地の出来事は誰も気づきはし

ない。

「うう…あぐあ…」

肩で荒く息をした男がニーナを地面に押し倒し、強引に両手を押さえ込む。

「へっへっへ。まだガキンちよだが、できることはできるだろ」

獣のような目に荒い息、周りの男立ちも下卑た笑みを浮かべて見下ろしている。男の顔がニーナの顔に近づく。それでなんとなくこれからの事を察したニーナは、思い切りの抵抗をするも体格差のある男の力に叶うはずも無く、ただただ足をじたばたさせている。押さえ込まれた手はぴくりとも動かすことができない。

「い…やあ…いや」

殴られた鈍痛と恐怖に耐えられなくなった脳が、徐々に意識を遮断し始める。

「あなた達…あたしの連れに何してるの？」

「ああ！？なんだてめえ…お、いい体してるじゃねえかブリキのガキはよ」

「咲世子さん…」

「かしこまりました」

——え？ミ…レイ……ちゃん？

そこでニーナの意識は完全に途絶えた。

次に目を覚ました時にはすでに病室で、顔や体には手当てした後がガーゼや包帯という形で残っていた。ゆっくり体を起こそうにも体の至る所が悲鳴を上げて、思うように自分一人では起き上がらせることもできなかった。

コンコンとドアをノックする音に、一瞬体を拒めるも入ってきた人物を見てニーナは心底安堵を浮かべた。目から自然と涙が溢れ、今までの恐怖がここに来て一気に爆発してしまった。ベットの隣に座り、いつもと同じ優しい笑みを浮かべたミレイの胸に顔をうずめながら、感情を爆発させた。

「ごめんねニーナ。街であなたを見かけたから、声をかけようと追いかけたんだけど途中で見失って」

ニーナの背中に回されたミレイの手が、上下にゆっくりと撫でる。

——あそこは地下通路がゲッターに繋がってるから……

「今度街に行くときは私も一緒に連れてきなさい」

「……………うん」

トンネルを抜けた電車の窓から見えるのは、緑生い茂る風景に堂々と佇む霊峰富士山。栗色の長い髪をポニーテールにしたシャーリーは、この風景に感嘆の声をあげる。

「うわあゝ」

トンネルから抜けて明るくなった車内に安堵したニーナも、風景を見ながら少しだけ笑みを戻した。

——ルルーシュもナナリーもくればよかったのに……

少しだけ寂しさを覚えたミレイだが、対面の席で笑顔を浮かべるシャーリーとニーナを見て、つられてミレイも笑顔になった。

三人はこれから過ごす楽しい一日に思いを馳せる……このままいけば楽しい旅行になる——はずだった。

心傷のニーナ（後書き）

STAGE08と言っても、本当に最初の方だけでした（笑）

ニーナのトラウマでどこにも明確に無いので、捏造しちゃいました♪

ご意見や感想お待ちしてます♪

囚われのミレイ（前書き）

アニメを元にしたIF話です。

STAGE08の辺りです。

前話と時間的に繋がっています。

囚われの ミレイ

「日本解放戦線の草壁である」

体格の良い軍服を着た男が、建物の一室に集められた人の前に立ち声を上げる。軍服を着て、銃口をこちらに向けた軍人が集められた人達を囲む。この光景は誰がどう考えても人質と、集められた者たちに強制的にその自覚を植えつける。先ほど草壁と名乗った男は、毛先が癖なのか跳ねており口元には髭を生やしていた。鞘に収めた刀を床につけ、床に座らせられた人達を上から見下す。

「我々は、日本の独立解放の為に立ち上がった」

草壁をはじめとした軍人がすべて日本人の為、過去のトラウマの影響でニーナはガタガタを体を震え上がらせる。自然とニーナを抱きしめるミレイは、周囲の状況を確認するも人質が多い中で行動を起こすのは分が悪いと判断し、歯がゆい思いを感じながらただニーナを抱きしめた。

「君たちは軍属ではないがブリタニア人だ。我々を支配するものだ！！大人しくしているならば良し。さもなければ……」

その先の言葉を合えて発しなかった草壁は、そのままこの部屋から出て行った。人質達は周りに軍人が銃口を向けて牽制しているため、安易にざわつくことも出来ずただただこれからの事を考えて肩を落とすしかなかった。

ミレイ達三人が泊まる予定だったのは、河口湖コンベンションセンターホテルという場所で、河口湖の中心に建設されていた。夜景もさることながら、高層階にあるレストラン等からの眺めも良くブリタニア人の旅行客は多い。宿泊階数によって値段が分けられているため、彼女達のような学生でも泊まれる価格帯の部屋も用意されている。レストランもリーズナブルなバイキング形式の店から、高級な店まである程度価格帯は幅広い。

「会長、ほんとにこんな部屋に泊まっていいいんですか？」

チェックインを済ませて案内された部屋は、三人が使うには広めの部屋であり窓から見える景色もかなり見晴らしがいい。室内に敷かれた絨毯の素材や設置されたテーブル等も、素人が見てもそれなりの品物と見て取れる。

「いいのよ。どうせお爺ちゃんが知り合いからもらった招待状だし」

「うん」

ミレイは今は中身が無くなった封筒をひらひらとさせて笑う。

「さっきの人、ここの支配人だって…」

受付で封筒の中身である招待券を提示すると、すぐさま支配人を名乗る男がやってきて、三人をこの部屋まで案内し簡単な利用方法を説明してこの部屋を後にした。

「ああ、まだうちが落ちぶれちゃう前に、お爺ちゃん援助が本国で世話をしていた事があつたらしくてね。ま、おじいちゃん様様、って事で今宵は楽しもうぞ」

にやりと笑みを浮かべたミレイは、部屋の端に荷物を置くとこのホテル中にあるレストランの冊子をテーブルに広げた。

「ねえ、お昼はどこのお店にする？」

「んゝ私はどこでも」

「ニーナは控えめねえ…シャーリーはどれがいい？」

「んゝ実際に雰囲気見てみたいです」

「よし、決まり」レストランフロアへレッツゴー」

ミレイ達の泊まるここ、河口湖コンベンションセンターホテルはブリタニア人の観光客も多いホテルだが、実は世界にとっては重要な場所でもあった。KMF等にも欠かすことの出来ない高温超電導体の戦略物質で、このエリア１が世界最大の産出国になっている物質サクラダイト。世界への分配レートを決めるサクラダイト生産国会議を行うのが、ここ河口湖コンベンションセンターホテルなのである。

その会議が今日行われている事を知らなかったミレイ達は、それを狙って襲撃してきた日本解放戦線により高層階にあるミドルフロアの食糧貯蔵庫へと連れてこられた。そこにはすでにつれてこられたブリタニア人が多数座らされており、突きつけられる銃口に押されながら指示された場所に腰を降ろした。

――5…6…7人か

ミレイは部屋に入ってきてから座らされるまでの間に、取り囲む軍人の数を視野に収めていた。大体の位置と人質を確認する。普通の観光客意外にも先ほど部屋に案内してきた支配人の男性、ホテルの制服を来た従業員…脳内でシミュレーションを行うも、これだけの人数を無傷で助けるには分が悪いと判断し奥歯を噛んだ。

——ニーナとシャーリーだけならなんとかなあ……、やっぱりこういう時にナナリーのギアス便利なのに

ミレイの共犯者の少女がこの場にいないことを少しだけ恨んだ。

どれほどの時間が経ったのだろう、どのくらいの時間なのか、身の安全はいつまで保証されているのか、恐怖と不安で人質の心はすでに憔悴しきっていた……ミレイを除いて。ミレイ達が来た時には青空が広がる昼間だったが、今はオレンジ色が空を染めていた。

——みんなそろそろ限界……かな

ニーナはトラウマからイレヴンに囲まれているだけでも体を震わせている。そんなニーナを宥めながらミレイは現状を打破するため作戦を練る。だがどうしても解決できない問題が出てきってしまう。それは救出すべき人数に対し、武器を持つ敵が多い事。また、不用意にギアスを使うことも好ましくないため、それを差し引くと分が悪い。

——万事休す……て感じねえ♪

こんな状況でも楽しんでしまうのは、狂者だからなのか心がおかしいからなのか……。最悪ニーナとシャーリーだけは助けると誓いながらも、この苦しい状況に口の端を上げそうになる顔の筋肉を必死でミレイは抑えた。

「うつ……ひつく……ひつ」

人質の周りに立つ軍人の足音一つに体を震わせ、嗚咽を漏らす。
ミレイの手を握り締めるニーナの両手は、気持ちを表すようにガクガクと震え続けて強張っている。ちょうど軍人がミレイ達の前で立ち止まったところで、過敏に反応してしまったニーナは口から禁忌の言葉を漏らしてしまう。

「ひっ！ーイ！ーイレん——」

それに気づいたミレイはニーナが言い終わる前に口を手で塞いだ。ミレイは、鋭い目つきで視線だけを軍人の方へ向ける。やはり言いかけた言葉が聞こえたのか、怒りの剣幕を露わにした表情で手を持つ銃の口をニーナへ向ける。

「今なんと言った！？」

「ひっ」

食糧貯蔵庫内に軍人の怒声が響き、ニーナがそれに悲鳴を上げる。

「イレヴンだと！？我々は日本人だ」

「誰がイレヴンていました？」

「こいつが今言ったであろう！！」

「さあ？隣にいたあたしには聞こえなかったけど」

軍人の表情と怒声で怯える少女の横で、予想だにしないミレイの態度に軍人の怒りのボルテージが上がっていく。この状況下でも他の人質と違い、まったく怯える様子も自分が殺される立場という事を感じていないかのような表情に言葉。

「なんだその態度は！！」

「……………」

「お前は隣間で来い。じっくりその体に教え込んでやる」

軍人はミレイの手を握り強引に引っ張り上げる。

「ミレイちゃん!!」

「会長!!」

心配そうな二人を片手で制止し、安心させるようにいつもの笑みを浮かべる。

「こつちにこい!!」

ミレイを引っ張り隣の部屋のドアへ向かう。その後を3人ほどが後に続く。体に教え込む…それは軍人にも人質にもどんな事かは容易に想像がつく。

——うふふ♪あたしに触れていいのはルルーシュだけよ……、あなたから殺してあ・げ・る♪

手を引っ張る軍人の後ろに付いて行くミレイは、誰にも見えないように口の端を上げ自分が狩る立場と思っている獲物に、静かにゆっくりと牙を向けた。

部屋に入ると、後ろからも数人の足音が入ってきた事を聞き、最後に部屋の鍵がロックされる音を耳にした。

「今からお前に、たつぷりと教え込んでやる。我々が日本人だという事を」

その言葉に背後の軍人達も笑みを浮かべてニヤニヤしているのだと、ミレイは容易に想像できた。ミレイは周囲を一瞥すると軽くだ

め息を漏らし、スカートの中に手を入れてもそそと動かす。何をしているのか軍人達は察したため、より一層下卑た笑みに変わった。

「よいつしよつと」

履いていた下着から片足を抜き取り、もう片方の足を抜き取る。それを見え易いように少し高めに持ち上げると、上に放り投げる。

「へっへっへ」

視線がそこに集中しているのを確認したミレイは、にやりと口の端を上げると、太ももにつけている皮製のベルトに刺さっているナイフを2本取り出し、正面の男の眉間へと投げ込む。悲鳴も何も上げる間も無くナイフを差し込まれ、そのまま膝から床に崩れ落ちた。その間にすでにもう一本ナイフを取り出したミレイは、無駄の無い動きで振り返る。

それと同時に啞然として隙だらけなミレイから見て左の軍人に、右手に持ったナイフは投げつける。そのまま生死を確認せず、正面に立つ軍人の喉元へ向けて、左手に逆手で持ったナイフで首元を一気に気切り裂く。そのナイフを右手に持ち変えて、ミレイの右側にいる軍人の喉へナイフを突き刺す。その速さと力で壁に押し付けられた軍人は、自分の体を支える事は叶わずそのまま壁に背中を付けたまま床へ崩れ落ちた。

「んふふ」

軍人からあふれ出る紅い飛沫にで服を汚さないよう、スカートの裾を掴み紅い水溜りをよける。その姿はまるでパーティーで踊っているかのような、華麗さと優雅さを備えていた。

誰にも見られる事の無いその舞を踊る少女は、氷のような微笑を
浮かべていた。

囚われのミレイ（後書き）

ニーナ↓ユーフェミアフラグを消しました。

せつかくの水入らずの休暇を邪魔された、ミレイのささやかな怒りです（笑）

ニーナはSTAGE08では結構怯えるので、

前話の捏造過去も生きてくるんじゃないかなと。

たぶん次回でSTAGE08は終了すると思います。

もともと三部構成と決めてましたので

ご意見や感想お待ちしております♪

それでは

またみてギアス♪

黒の騎士団（前書き）

アニメを元にしたＩＦ話です。

ＳＴＡＧＥ０８の辺りです。

前話と時間的に繋がっています。

前話と一つにまとめてよかったかもしない。

黒の騎士団

音も無く赤い粒子と共に姿を現したのは、水色のワンピースのドレスに胸元をリボンのように縛り、胸を強調する白いジャケットを着たミレイであった。ミレイが姿を現した場所は、自身がホテル内で最も正確にイメージできる場所……自分達の宿泊する部屋。

「跳躍成功♪」

誰に言うわけでも無いが、ビシッと決めポーズを決めたミレイは、すっかり暗くなった外の状況を部屋の窓から確認した。ホテルにかつている湖畔からの道路は三本であり、中央のと左右に伸びる端が交通路である。ホテルに左右から伸びる端は、橋脚部分で橋が片開きする可動橋になっており、現在は上げられている為中央の橋の部分が唯一湖畔とを繋いでいた。

——あれは……

中央の橋の先の湖畔はライトアップされており、遠目から見てもブリタニア軍というのが見てわかった。

——え？

不意に視界を遮ったそれに驚くも、すぐ様なんなのか理解した。

——あの影の形は人間……！！

不謹慎ながらその人影が男性のものに見えたミレイは、自分の連れであるニーナとシャーリーではない事に少しだけ安堵した。しか

しこのままでは、いつ彼女たちが標的にあつかわからぬため状況は悪い。急ごうにもエレベータでは危険すぎるため、階段で上に向かう事にしたミレイは部屋を飛び出した。

——さて…と

非常階段までやってきたミレイは、階段を昇らずにその双眸で上を見上げる。正確に階段の上の階を確認しイメージを行う。

ミレイのギアスは空間移動——ルルーシュの傍にいつでも駆けつけたという想いが、願いが具現化した能力。実際に存在している場所に移動する能力で、移動先の場所を正確にイメージする事で離れた場所へ一瞬で移動することができるが、移動距離と人数、質量によって術者であるミレイにかかる負荷が増減する。

階段は同じ構造が上へ下へと作られているため、イメージがしやすく紅い粒子だけを仄かに残し十数階を一瞬で移動した。先ほどまでミレイも人質しておいたミドルフロアへ入るため、ドアノブに手を掛ける。ゆっくりと開きその隙間から通路の様子を伺う。今の視界には日本解放戦線の軍人の姿は見えないため、勢いよくドアをあけ通路へと飛び込む。体を回転させながらもすぐ様前方位を確認すると、日本解放戦線の制服ではないがマシンガンを手にした黒ずくめの人影が視界に入った。

相手もいきなり飛び出してきた金髪の女に驚いているのか、一瞬動きが固まっていたのを見逃さないミレイは、すでに左手に忍ばせていたナイフを逆手に持ち、一気に足で床を蹴りナイフと突き出す。相手もすぐ様銃口を金髪の方へ向けて構える。

「……あれ？力…レン？」

至近距離に接近してみて、その人影が女性で髪が紅い事に気が付いた。いつだったかシンジユクゲッターで助けた紅い髪の少女と同じ髪型で、今日は目元を隠すバイザーをしている。

「ミレイ…会長？」

「なんだ〜カレンか、あーびっくりした」

カレンだと先ほどの言葉で確信したミレイは、手にしたナイフをどこへとしまい学校と同じような微笑を浮かべた。

「ミレイ会長こそどうしてここに？シャーリー達と一緒に捕まっていたんじゃあ…」

「まあ、いろいろあってねえ〜」

はあ、とため息を漏らしミレイは肩をがっくりと落とす。

「それで？カレンはここで何をしているの？」

「あ、えつと〜その」

「別に今更なに言っても驚かないって〜」

「今はゼロの作戦により、ホテル内に爆弾設置と人質救出を」

「ゼロが来てるのね」ま、とりあえずあたしはシャーリーやニーナ達の所へ戻るわ」

「わかりました。私もそこへ行くので一緒に行きましょう」

食糧貯蔵庫に向けてミレイとカレンは走り出した。

「会長!？」

「ミレイちゃん!？」

食糧貯蔵庫の扉を開けると、シャーリーとニーナが驚きの声を上げる。別室へ案内されたミレイが、別の入り口から入ってきたのだから無理は無い。二人の所へミレイが近づくと、ニーナは必死にミレイにしがみ付いた。

「ごめんねミレイちゃん!!ごめん」

「あゝよしよし」

優しく一定のテンポでニーナの後頭部をミレイは撫でた。心配と安堵の表情がまざったシャーリーに、大丈夫という意味もこめてにつこりと笑顔を向ける。

「会長、ほんと良かった。心配で心配で」

「ありがとうシャーリー」

ミレイは空いてる手でシャーリーの頭を抱き寄せると、シャーリーも少しだけ体を震わせていた。まだ少女で有りこいう世界に無縁だったから無理も無い。ニーナと同じようにシャーリーの頭も同じように撫でた。

「えー、みなさん」

日本解放戦線の軍人と違い、黒い制服に黒いキャップをかぶり、目元を隠すための黒のバイザーを付けている者達の内、一人の男が声を上げる。

「今から避難誘導しますので、どうぞ慌てずについてきてください」
そういった本人が先導するために歩き出す。日本解放戦線以上に

得体の知らない人物のいう事に不安を隠せない人質達だが、ミレイはその場から最初に動き出した。もちろんニーナとシャーリーの手を引きながら。

「ちよつ…会長？」

「大丈夫、この人たちは助けしてくれるって言ってるんだし、さっきのよりマシよ」

シャーリーとニーナの声をよそに、ミレイはぐいぐいと引つ張って先導する黒い服の男の後を着いて行く。それをみたほかの人質達も、半信半疑ながらもミレイ達の後へと続いた。

奥へと進むと男が大きなエレベータの前でボタンを押しながら待っていた。恐らく裏方用の運搬用エレベータなのだろう。黒い服を着た人物数名を残し、人質全員を乗せる程広いエレベータはボタン操作した団員により下降を始めた。

最終的にとまったときには、エレベータの回数を表示するパネルが地下表示の記号を付けていた。エレベータが開かれて団員に案内された先の行き止まりには、一つのドア設置されていた。地下のはずなのだが、黒服の男が扉を開けると湖畔の水面が目に入った。実際ホテルは湖畔水面より高くにあるため、そのホテルの位置からしたら、この湖畔の水面も地下にあたる。

すでに水面には数隻のゴムボートが浮かべられていた。そこへ案内されるままに一人ずつ乗っていく。すべて乗り終えた後、ホテルより少しずつ離れていく。しばらくすると激しい音と共に、ホテルが下へと水没を始めた。その状況を見た人質から様々な声があがった。そして突然の爆発。その爆発がホテルを瓦礫に変えていくも、ホテルの水没は止まる事は無い。その衝撃で粉塵が舞い上がり湖畔の水面は荒立った。

しばらくすると粉塵の中から人質の乗るゴムボートを先導するように、一隻のクルーザーが姿を現わした。船のデッキの上に付けられたスポットライトを3つ点灯させ、彼らは姿を露わにする。その中心に立つのは、枢木スザクがクロヴィス殺害容疑をかけられていた時に、初めて姿を現した仮面の人物ゼロ。

「人々よ…我らを恐れ、求めるがいい。我々は……黒の騎士団!!」

この日…世界にとって幸か不幸か、黒の騎士団が誕生した。

黒の騎士団（後書き）

すいません、失速しました。

正直こんなに分けるべきではなかったなと後悔しました。

STAGE 08はそこまで長い無いようじゃないですね（笑）

あれ？不調かもしれませんがな。

彼女の心情（前書き）

お待たせいたしました。
最新話投稿です。

まったり回です。

彼女の心情

「ふう」

額から流れる汗をタオルで拭き、首元にまとわりついた金色の髪を手で払う。トレーニングをしているものの、筋骨隆々ではなく綺麗に引き締まったウエストラインに、自己主張の強い胸、腰から伸びるすらりとした足は、モデルと思えるほどの美しさを保っている。

備え付けられている鏡の前に立つと、胸元や首元に赤いマークが所々に残されている。それを一つずつ確認すると、昨夜の事を思い出し火照った体をさらにもう少しだけ火照らせたミレイは、手近にある掌より少しだけ大きいペットボトルの水を一気に半分ほど飲み干した。

アッシュフォード学園の地下に作られたトレーニング施設は、知っているものは少なく理事長であるルーベンを含め、ミレイとナナリーと咲世子の4人だけである。室内には組み手用に作られた畳スペースに、トレーニングマシンがあるスペース、KMFのシミュレータのスペースとかなり広めに作られている。

ミレイはシミュレータの方へ顔を向けると、そこに座って操縦レバーをたくみに操作しているナナリーが目に入る。この間サイタマゲッターで採取したデータから、ナナリーが戦ったギルフォードの駆るグロースターをトレースし、ラクシャータ達がシミュレータに反映をしていた。そのギルフォードとの戦いを、今ナナリーはシミュレータ内で再現している。素早くそして細かく操作をするナナリーの技術は、あのギルフォードとの一戦以降比較的に向上していた。

——ほんと、才能って怖いなあ…

ラクシャータも驚いていたが、反応速度がずば抜けて高くナナリー専用に使った機体でさえも、時々限界値付近まで付加が掛かっていた。ミレイは、コンスタントに一定以上の高さの負荷で安定した性能を引き出すタイプなのに対し、ナナリーは相手によって機体へかける負荷や性能が変化タイプとラクシャータは二人の特性を見抜き、それに合わせた再調整を現在行っていた。

「ふう」

幼さの残る声色で、一際長く息を吐いた少女はシミュレータから立つと、少しだけ上気したのか頬を赤くさせミレイの傍へとやってきた。ミレイは持っていたペットボトルをナナリーに渡すと、残りの水を全て飲み干し短く息を吐いた。

「どう？」

「あくまでもデータですから、実際とは違うと思いますけど…」

「けど？」

「ほぼ勝てるようになりました」

「へえ」

——さすがは、マリアン又様のつてとこね

微笑を浮かべてはいたが、ミレイはナナリーの成長に内心舌を巻いていた。共犯者として彼女の成長は嬉しくあり恋敵ライバルとしては非常に手ごわい。そんな彼女の様子を伺いながら汗をぬぐうと、この部屋の入り口は開き来訪者の訪れを告げた。

「ミレイ様、ナナリー様。ご朝食の準備が整いましたので、クラブハウスへお越し頂けますか？」

メイド服を着た咲世子が入り口の所で告げると、二人は返事を返し三人でクラブハウスへと向かった。ミレイとナナリーは二人で一緒に素早くシャワーを浴びると、急いで準備をして朝食を食べるためにリビングへと向かった。

リビングで3人で朝食を取り、登校時間になったためルルーシュとミレイはナナリーと別れ、クラブハウスを出発した。校舎とクラブハウスはたいして離れておらず、5分もあればすぐに校舎の入り口へ到着する。

「あ、そうだ♪今日アーサーの歓迎会やろう」

「え？」

いつもながら唐突な事を思いつくミレイに、あからさまに怪訝な顔を浮かべるルルーシュだったが、隣でいろいろと話し始めたミレイを止める術を知らずそのまま適当に相槌だけ返しながら、ほかの事を考える事にした。この時に歓迎会のプランをいろいろミレイは口にしていたのだが、ルルーシュはただ適当に相槌を打っていただけなのでコスプレ着用についてはすっかり聞き逃していた。その事を後悔するのは約7時間後の事になる。

放課後生徒会室へ拉致られたルルーシュは、リヴァルとスザクにより生徒会室の椅子にロープで縛り付けられていた。

「おい、リヴァルよせー!!」

「あきらめなつて…会長命令」

「ぐっ…、おいスザク」

「ごめんねルルーシュ。会長命令だから」

「顔が笑ってるだろ…おい!!」

二人が口にしたその人物に視線を向けるも、黒猫になったミレイの蒼い瞳に見つめられたルルーシュは適わないと悟ったのか小さくため息を吐いた。それと同時に生徒会室の入り口のドアがスライドする。そこに立っていたのは紅い髪の少女…カレン・シュタットフェルトで、室内の様子を伺った彼女は、明らかに呆れたような表情を浮かべた。

「おっはようニャン」

黒猫になったミレイが、ネコの手の手袋をつけた右手で挨拶する。カレンがミレイを上から下まで眺めた。黒耳に顔には髭、両手にはネコの手の手袋、衣装はややハイレグ系で胸元が白い為大きい胸が余計強調されているように感じる。お尻部分からは尻尾を生やし完全な黒猫…、間違っても雌豹とは言わないように気をつけようと、心の中でカレンは誓った。

「えっと…これは？」

「アーサーの歓迎会ニャン」

「平和ですね」

——平和…か

カレンの呟いた言葉にミレイは考えを馳せる。少なくともこのアツシュフォード学園の中だけは、ルルーシュとナナリーの平和を約束していた箱庭。しかし、その平和はそれはいとも簡単に崩れるもの。

平和のはかなさを知っているルルーシュとナナリーの二人にとって、どれだけ平和を感じさせられたのかミレイにはわからない。核心はもてないがきつとルルーシュはすでに平穩の為に犠牲を払っている。彼の行動を見ているミレイ、そしてナナリーは彼の微妙な変化を捉えていた。それは彼の被る仮面の厚みによって…。

だからこそミレイもナナリーも共に仮面を手取る。愛する人を守る…ただそれだけの為に。

結局コスプレさせられたカレンを交えて、アーサーの歓迎会は行われた。アーサーというのはスザクがつれてきた野良猫で、黒っぽい青の毛色で右目の所には黒斑模様がある。生徒会メンバーには割となついてくれたのか、みんなの呼びかけに応えるように鳴き声を上げじゃれ回る…ただ一人を除いて。

「痛っ」

差し出した手をことごとく噛まれ、そっぽを向かれるスザクは「片思いばかり」と豪語する。

そんな歓迎会もミレイが満足した為終わりを向かえ、男子組みに後片付けを命じて残りのメンバーは着替えるために生徒会室を後にした。着替え終わったシャーリーはルルーシュたちの所へ戻り、カレンは自宅へと向かった。そのメンバーの背を見送ったミレイは、シャワールームへ向かい軽く汗を流す。服に隠れたルルーシュとの印を見つけると、妙な恥ずかしさが少しだけこみ上げた。シャワーの蛇口を捻り、近くにかけておいたタオルでぬれた体を拭く。バスタブからシャワーのお湯が飛び出ないためのカーテンを開くと、衣類用の籠に畳んだ服の上に置いた携帯のLEDが点滅していることにミレイは気づいた。髪の毛を拭きながら籠に近づき携帯を手にとると、着信には自分の祖父がいるであろう理事長室からの着信履歴が一件残っていた。

「あつ」

今日お昼休みの時間に理事長であり祖父のルーベンに呼ばれていたミレイは、放課後理事長室へ来るように言われていた事を今思い出し、急いで制服に着替えるとクラブハウスを後にした。

「お、あつたつた」

東京租界の一角、広い敷地の中に立てられた大きな屋敷。その表札にはシュタットフェルトと表記されていた。

本来アツシュフォード学園は全寮制で、生徒は全員寮生活という決まりがある。ルルーシュとナナリーは例外として、このカレンも寮生活をしていない生徒の一人であった。理事長であるルーベンとシュタットフェルトの間でどんなやりとりがあったのか、ミレイは知る事はない。しかし、ルーベンよりカレンに届けるよう言い渡されたそれをみて、カレンの素性を知ったミレイはその素性からも寮生活より自宅通いのほうが良いと感じていた。

外門のインターホンを鳴らすとおつとりとしながらも、丁寧な女性の声が聞こえてくる。

「ミレイ・アツシュフォードと申します。カレンさんはいらっしやいますか？」

その場で二言三言交わすと、ミレイを招き入れるように大きく重たい門が左右に開いた。外門から玄関までの距離は、アツシュフォ

ード学園のクラブハウスと校舎までの距離の半分くらいで庭を眺めながら歩いているだけで、玄関まではすぐにたどり着いた。玄関のドアを軽く三度ノックすると、インターホンと同じ女性の声が扉の向こう側から聞こえてくる。ゆっくりと開かれた玄関の扉からはメイド服を着た黒茶色の髪の女性が姿を現した。長いその髪を後ろで一つに束ねている。ミレイはこの女性を見た時に、ふと今会いに来ている少女の瞳と重なった。

「カレンお嬢様、カレンお嬢様」

二度三度とこのメイドの女性が名前を呼ぶと、二階の廊下から紅い髪の少女が姿を見せる。すでに制服ではなく薄い紫色のブラウスに白いミニのスカート、脚には黒のニーソックスに着替えていたカレンが階段を下りてきた。

「会長……」

少しいぶかしむ表情でミレイを見たカレンだったが、メイドの女性に声を掛けられるとすぐさま平坦な無表情に切り替え、自分の部屋に通すようにだけ告げた。

「あら？友達って言うからてつきり男だと思ってたわ」

先ほどカレンが出てきた廊下から、ミレイとは明るさの違う金髪の女性が嫌味を言いながら階段を少しだけ降りてくる。目つきが悪く見える鋭い目に濃い目の化粧、カレンとは違い派手な衣装に身を包んだ女性とカレンのやり取りを見たミレイは、不謹慎ながらも内心少しくわくわくしていた。

——これって…修羅場？ふーん」

二人のやり取りを見つめていると、ミレイの左からガシャンと大きく何かが割れる音が聞こえ、目を向けるとメイドの女性が玄関横に置ける台の上の花瓶を、落としてしまったようで破片が床に散漫し床が水でぬれていた。カレンに向けていた矛先をメイドの女性に向けると、メイドの女性はおどおどしながらもただただ謝罪の言葉を繰り返し後片付けを始める。

「っ…」

その姿に顔を顰めたカレンは、ミレイを自分の部屋と通すところかへと行ってしまった。ミレイは椅子に座り窓から外を眺めると、小さいながらもはつきりと政庁が確認できる。室内を見渡すと、白を基調としているのか壁や机、それにピアノまでも白い。ふいにドアの開く音が聞こえた。高級そうなティーカップとティーポットのセットを、ワゴンに載せカレンが入ってくる。テーブルに近づくとミレイと自分の所へティーカップを並べ、ティーポットに入れた紅茶を注いでいく。注がれたティーカップからは白い湯気が立ち上ると同時に、茶葉の穂のかな香りがミレイの鼻先をくすぐった。

ティーポットをワゴンの上に載せたカレンが、ミレイの対面の椅子に座る。

「カレン…、なかなか複雑そうねえ」

「……渡したいものって何ですか？」

ミレイの質問に応えないカレンに、これ以上踏み入るなど言われていると感じたミレイは、ルーベンから預かった封筒を靴から取り出し、机の上にそっと差し出す。

「お爺ちゃんに頼まれてねえ…、中学からの成績証明書」

ミレイの言葉に少しだけ身を強張らせたカレンは、ゆっくりと口を開く。

「バレたって事ですね……、私がブリタニア人とイレブンのハーフだって事」

「ええ。学校で渡さないほうがいいと思ったの。ま、これを見るまでハーフだとは思わなかったけれど」

「さっきのは継母です。本当の母親は、花瓶を倒したドジなメイドの方」

封筒の中の書類に目を通し、名前の欄に自分の名前を記していく。

「父親は…シユタツトフェルト家の、ご当主様？」

「馬鹿なんです母は…」

カレンは視線を下に向け表情を曇らせた。

「結局使用人扱いで…たいした仕事もできないから、どんなに馬鹿にされてもヘラヘラ笑ってる事しかできなくて。わざわざこの家に住まなくなつていいのに。要するに縋っているんですよ、昔の男に……」

一度紡いだ言葉は留まる事は無く、独り言のようにただただ語っていく。顔は無表情を装っていても、声色から嫌悪が見え隠れしていた。

「お母さんの事嫌いなね……」

「鬱陶しいだけです」

「正妻も妾もその娘も一緒に暮らしてるなんて…、ヘヴィな話ね」

「そうでもないですよ。衣食住に不自由は無いし、我慢できないって程じゃありませんから」

最初にいれてあつた紅茶はすでにミレイが空にしていたため、カレンはそこへ2杯目を注ぐ。

「そう…」

少しだけ首を傾けて微笑みをカレンに向けたミレイは、視線を窓の外へと向けた。

「でもね…、一つ一つは我慢できるものでも、積み重なればいつかは擦り切れてしまう…」

ふつと表情を曇らせたミレイは、先ほどのカレンのように言葉を紡ぐ。

「カレンは、好きな人っている？」

「へっ？」

先ほどまでの会話の内容とは脈絡の無いミレイの言葉に、ミレイは驚きの声を上げた。それに対してミレイは特に反応をせずただただ言葉を口から流す。

「私はね、きつとその人に頼っているんだと思う…そう、カレンの言葉を借りるなら縋っている。人間は決して一人では生きてはいけない、だから誰かを頼ったり縋ってしまうものなんだと思うわ」

そう言ってゆつくりとカレンの方に向いたミレイのその瞳は、恐ろしく暗く冷たさを宿していた。それを見たカレンが背中に寒気を感じるほど。

「だから、私から奪い去っていく者には……容赦はしない」

そういったミレイは口の端を上げ、少しだけ開いた唇と唇の間からは白い歯が顔を覗かせていた。

彼女の心情（後書き）

どうもヤンデレちっくになりますね。

リフレインの回ですが、ミレイはリフレインに直接関わらないので、中途半端に思つかもしれませんが、あえてここで切りました。

次回からは、恐らくSTAGE10と11のナリタ山辺りの話になります。

ナリタ連山へ（前書き）

なんとかここまでできました。

STAGE 10と辺りです。

シャーリー事変ブローグ的な感じですね（笑）

ナリタ連山へ

——時に取り残されし者どもが 慈愛を忘れた者どもが

——今こそまほろばの夢と共に 朽ちて消え逝け

「ルルーシュどこ行くの？」

クラブハウスの入り口のドアを静かに閉めた黒髪の少年は、予期せぬその声に身を強張らせながらゆつくりとその声の先へ視線を移す。入り口の柱の影からは、少年が良く知る金髪の少女の姿を確認すると、少年は少しだけ緊張を緩めた。

「ミレイか……、ちよつと野暮用でね」

そういつて歩き出したルルーシュの行く手を阻むように、ミレイは正面に立ちはだかる。ルルーシュはかまわずミレイのすぐ前で立ち止まると、ルルーシュに向けて微笑みを向けるミレイの顔が無表情に見つめる。

触れて欲しくない時、ほつといて欲しい時にするいつもの癖。それをわかつているミレイだったが、今日はなかなか強情に彼の前から退かない。そんなミレイをルルーシュは無視する事はせず、ミレイの前で立ち止まったまま。

「ほんと…困ったルルちゃんねえ」

ミレイはゆつくりとその額をルルーシュの胸元へ押しあてる。ただ押しあてるだけでミレイもルルーシュも、互いを腕の中に捉えようとはしない。

「ちゃんと帰ってきなさい。あなたが……ん、なんでもない」

押し当てていた額を離し、少しだけ体をルルーシュの正面からずれたミレイはいつもの微笑を向ける。

「いつてらっしゃいルルーシュ」

その言葉に返事を返さず、ルルーシュはミレイを抱き寄せ微笑を浮かべるミレイの唇に自分の唇を重ねた。少しだけ開かれた隙間からお互いの想いを絡め合う。少しだけミレイの頬が上気しだした頃、ルルーシュはミレイから唇を顔を離れた。

「行って来るミレイ」

——だから、今は何も聞かず待っていてくれ

心の中で彼女への願いを囁きながら、ミレイに後姿を送る。そのルルーシュの背中をしばし見つめたミレイは、ルルーシュとは反対にクラブハウスの中へと入っていった。

「おはよう、ナナリー」

ルルーシュと入れ違いでクラブハウスへ入ったミレイは、リビングルームへ入ると椅子に座っている少女に向けて声をかけた。ルルーシュがいないため、車椅子ではなく普通に椅子に座っている。

「おはようございます、ミレイさん。一緒に朝食でもどうですか？」

「あら、じゃあ頂こうかなあって、私の分あるの？」

「いえ、お兄様が出かけられたので……」

「ああ、そゆことね♪なら遠慮なく頂くわ」

ミレイがナナリーの隣の椅子に腰を降ろすと同時に、咲世子が朝食の載ったワゴンを押して部屋に入ってきた。会話が聞こえていたのか、手際よくミレイの前にナナリーと同じ朝食が並べられていく。最後にソーサーの上に置かれたティーカップに、咲世子がティーポットに入れたお茶を注ぐと、茶葉の香りがミレイの鼻先をくすぐった。

「やつぱり、朝は咲世子さんの煎れてくれたお茶が一番ねえ♪」

真っ先にティーカップを手にとったミレイは一口飲むと、短く息を吐いて口の中を通し香りを味わう。咲世子が用意した朝食のメインは野菜とハムのサンドイッチ。一口サイズで女性でも食べやすい様に考えられていて、ミレイはあつというまにそれを完食した。

ミレイの正面に座るナナリーは、既に食べ終わっており食後のお茶を楽しんでいる最中である。

「ナナリー、今日は暇？」

「はい、いつもですけど時間は余っているくらいです」

「なら決まりね♪」

楽しそうな声色を上げたミレイは、来ている制服のポケットから携帯を取り出し何処かへと電話をかけた。――

「あ……もしもしミレイです。……ええ、だから今連絡を……、ナ

リタ連山？はい、ではナナリーいつもの所にいますからね」

電話を終えたミレイにナナリーは問いかけた。

「ミレイさん、今のはラクシャータさんです？」

「そうよ。なんかナリタ山の麓の地区に、退避命令が出てるみたいなの」

「退避？命令ですか……、ということとは」

ナナリーがすでに事情を察していると感じたミレイは、満足そうに笑みを浮かべてナナリーの言葉の続きを紡いだ。

「戦闘が起こるって事よ。咲世子さん、悪いけどアレの用意をしておらっていい？」

「かしこまりました」

ナナリーとミレイが食べ終わった朝食の食器を片付けていた咲世子は、ミレイの言葉を聞き足早に食器の載ったワゴンを押してリビングルームを後にした。アレというのは、ラクシャータが考案した試作型のパイロットスーツ。ナナリーはインディゴカラーでミレイはピンクカラーのそれは、パイロットの生存率を高めるための物である。

先日、アッシュフォード家に客人として滞在しているラクシャータからプレゼントと言われて受け取ったミレイは、その管理を咲世子にお願いしていた。ナナリーのトレーニング時の服や、変装用ブリタニア軍服等の管理は元々咲世子に任せているというのが理由である。

「もしかして、この間のサイタマのナイトメアもいるのでしょうか」「なあに？決着つけようって事？」

「はい。この間は私一人では勝てなかったでしょうし、やられっぱなしは嫌ですから」

そう言つて可愛く笑つたナナリーの中で、ふつふつと燃え上がる炎をミレイは感じた。笑顔のあどけなさでは隠されてしまう彼女の本性、負けず嫌いで嫉妬深い。何よりルルーシュの事に関しては時々狂う。それを知っているのは、ミレイと咲世子とシーツくらいである。

「でも油断はしないでね。あくまでもシミュレータと実物は違うはずだから」

「わかっています。それにラクシャータさんをお願いして、私の思う通りに調整をお願いしましたから」

これから戦闘をしにいくというのを感じさせない程穏やかな二人は、十分後に準備を終えてやってきた咲世子からバックを受け取り少しだけ気持ちを入れ替えた。

ここからラクシャータ達との合流地点へは、咲世子の運転する車で移動をする。咲世子は一足先に車をとりに行き、ミレイとナナリーは校門前へと向かった。

「咲世子さんありがとう。戻ったらいつものアレ…やっておいてね」
「かしこまりました。御武運を」

咲世子の運転する車でラクシャータ達との合流地点へ到着したミレイとナナリーは、咲世子に別れを告げてまだ到着していないラクシャータ達の乗るトレーラーを待つことにした。

咲世子の車はすでにＵターンして、アッシュフォード学園へ向かっており、すでに咲世子の運転する車の後姿は遠い。

「咲世子さんの運転で……やっぱりいつも激しいよね」

「そうですね。なんか最高速度がちょっとすごいですし」

あつという間に小さくなる咲世子の車を目で追っていた二人は、こちらに向かって近づいてくる大型のトレーラーの姿を確認する。ある程度近づいたところで、車の助手席の窓から顔を出したラクシヤータが二人に向けて手を上げた。

それを合図にミレイはナナリーの手を掴むと、トレーラーのＫＭＦ簡易格納庫となっているコンテナの内部をイメージする。何度も載っているため内部構造もＫＭＦの位置もほぼ記憶できているため、二人の姿が道端から消えるのにさして時間はかからなかった。

「はあーい、おまたせえ」

運転席とを繋ぐドアから、コンテナへ入ってきたラクシヤータはキセルをふかせながらミレイとナナリーの方へ近寄ってきた。ふうっと口から白い煙を放射し不敵な笑みを浮かべてナナリーの肩をぽんと叩く。

「言われた通りの調整してみたんだけどお、その分最高速度が若干落ちちゃうのが難点でねえ」

「いえ、ありがとございます。相手に勝つには近距離でのレスポンスが必須ですから」

「まあ、今あたしはキョウトのおじいちゃんたちからまた新型の依頼が来てて、あんた達のナイトメアを調整してんのは、あの坊やさ」

そう言ってラクシヤータが視線を投げた先には、赤い髪にわりと

白い肌の青年が褐色の男性と端末を見ながらいろいろと話し合っている。

「ミレイが連れてきた時はぶっちゃけめんどくさって思ったけど、日本人にしては頭は切れるし発想も斬新。日本人にしておくのが勿体無いわねえ」

「でしょ？…それでナナリーはどんな調整を頼んだの？」

「それは瞬間加速といいますか、初動の加速を上げて近接戦闘時に相手のKMFより半歩でも有利に立つためです」

「なるほどねえ」 たしかにそうすれば、あのグロースターの隙を作り易いつて事ね」

「だからトルクを上げた分最高速度がちょっとねえ。あ、それと二人のナイトメアにそれぞれ廻転刃短刀を一本追加しておいたわ。さすがにV A S R A Gは量産できなかったけど」

間合いを考えると短刀よりは刀の方が有利なのだが、ナナリーは小回りの効く短刀を気に入っていた。ナナリーの師である咲世子が、クナイを得意の得物としてる。クナイを使う咲世子に憧れている部分が少ないからナナリーにはあった。

一方のミレイは銃撃が得意のため、特に近接用の武器に大してあれこれ考えない。なぜならどの武器もすぐに特性を感覚で覚えて扱えてしまうからである。しかし銃火器の場合は、射撃性能や反動や拳動等銃によって様々なため、念入りに調整やシミュレートを行っていた。

すでに現在装備しているV A S R A Gは、サイタマゲッター後に微調整の依頼をしているためすでにミレイ仕様である。

「まあ、着くまでもう少しかかるから今の内に微調整とか準備をよろしく」 斜面での戦闘データをばっちりとってもらうから、そのつもりでねえ」

そう言ってキセルをふかしたラクシャータは、端末を確認している技術者に声をかけ画面とのにらめっこを始めた。

ナリタ連山へ（後書き）

あえてルルミレルルという事を念頭に置いた上で、読者様にアンケートです。

アンケートと言っても参考程度に意見が欲しいので、気軽に応えてくださいな♪

シャーリーの処遇について

1・原作どおり記憶喪失（ゼロに関わる事だけにするか、原作どおりか迷い中）。

その後は王道ルート（笑）

2・記憶喪失はさせず、ルルーシュがシャーリーを守る事を誓い付き合う。

ミレイとは別れる事を選択する。

シャーリーは報われない、悲劇だからこそ映える事が前提です。

1と2はどちらとも、最終的にルルミレルルです。

STAGE 10～16あたりまでを、勝手にシャーリー事変とよんでいます。

うーむ、連載は難しいなあ。

この後の事を考えたりしていると、指が止まっちゃいます。

あくまでも現段階で最高峰のKMFは、ランスロットと紅蓮式式で

す。

ナリタ 攻防戦 R e v e n g e o f N u n n a l l y (前書き)

S T A G E 1 1 辺りになります。

前回に続いてナリタ山へハイキングです(笑)

ナリタ 攻防戦 Revenge of Nunnally

ミレイ達が到着した時には、ナリタ山の一部が崩れ去っており麓の町が土砂に飲み込まれていた。自然の力か人為的な力かわからないが、町の建物は埋もれすでに町とは呼べない程にひどい状態である。この土砂では足が土に吞まれてしまったため、ランドスピナーでの移動が困難なため土砂がない場所まで迂回する事にした。

「それじゃー気を付けてねえ」

ラクシャータに送り出されたミレイとナナリーは、トレーラーから勢い良く飛び出しナリタ山への進行を開始した。土砂を迂回しながらブリタニア軍のいる場所へ昇れる斜面を探していると、二台のトレーラーがタイヤを空ぶかしさせて斜面に突っ込んでいるのがモニターに映し出される。

「ミレイさんあれは？」

ナナリーも同じトレーラーを確認していたのか、ミレイに声をかけた。

「さあ？なんだろう……ん？」

リーダーがピピっという音と共に、周辺にいる熱源反応を映し出す。敵機を示す赤いマークが合計で十一個表示されており、そのうち五機と六機に分かれて敵対しているのかマーク同士が接触と離脱を繰り返していた。五機の息のあった動きから繰り出されるコンビネーション攻撃で、相手の方が数では上回っているはずなのだがすっかり翻弄されている。これにはミレイも感心するしかなかった。同様にナナリーも「すごい」と感心の声を漏らす。

「ま、この五機がブリタニア軍じゃないなら加勢しちゃう」

そう言ったミレイは、この場所は土砂の被害範囲外というのを確認しランドスピナーをフルスロットルさせた。急激に加速を開始するミレイの黒百合を追いかけるように、ナナリーもフルスロットルさせる。土砂がない為颯爽と斜面を駆け上っていく二機は、モニターに目標を捕捉し行動を開始した。

戦闘をしているのは、サイタマゲッターで対峙したブリタニア軍のグロースターが一機とグロースターとは色違いで外周ブレードが無い大型ランスを持ったサザーランドが五機。それに対してのが、ブリタニア軍の旧型KMFグラスゴーと形が似ているKMFが五機。昆虫のような顔に頭部から触覚のようなアンテナが2本伸びている。四機は茶緑色を基調とし頭部、手首、肩、ランドスピナー部分が黒っぽい茶色をしており、一機だけが白っぽい茶緑色を基調とし恐らく指揮官機と思わせる色をしていた。

「あれは……サイタマゲッターの」

ミレイとナナリーの乗るKMFと一度対峙した事のある人物、この作戦の指揮を取っているコーネリア・リ・ブリタニアの騎士であるギルフォードは、新たに現れた敵機に舌打ちをする。ただでさえこの五機に手こずっている上での敵の増援は、この状況をさらに悪化させる要因になるからだ。

「くっ……藤堂を相手にしながらあのKMFも相手にせねばならぬとは……」

ギルフォードが漏らした藤堂という人物は、日本とブリタニアの

戦争でKMFの無い日本軍が唯一ブリタニア軍に勝利した戦いを指揮した男。その勝利は敵島の奇跡と呼ばれ、ブリタニア軍にもその名を響かせた元日本軍中佐。それが藤堂鏡志郎である。

その藤堂と共にいる四機に乗るのは、旧日本軍時代からの藤堂の部下で深い信頼で結ばれている四聖剣の四人。左右非対称の長さの髪に丸眼鏡をかけ、右目に傷跡がある青年の朝比奈省吾。この五人の中で一番年上で白髪、眉間の上にコブがある仙波峻河。逆立ってた青髪の青年ト部巧雪。唯一の紅一点で男勝りな女性の千葉凧沙の四人である。

ギルフォードの乗るグロースターと対峙している藤堂と、四聖剣の四人もミレイとナナリーの方へ警戒をむけた。グロースターの持つランスの外周ブレードと藤堂の乗るKMFの持つ廻天刃刀がぶつかり、火花を散らしている。アサルトライフルを装備しているミレイ機は、銃口をサザランドへ向けるとトリガーを引いた。発射された弾がサザランドを直撃し、四肢を貫かれ行動不能にさせられたパイロットはレバーを引き、コックピットブロックを射出させる。その行動を見た藤堂達は、今はミレイ達が敵では無いと察したのか再び意識をブリタニア軍へと向けた。

「ミレイさん援護を」

「りょーかい」

ランスと刀の鏢迫り合いを互いに弾いて互いのKMFの距離を置いた隙に、ナナリーはKMFの両方の手に逆手で持った廻天刃短刀を構え、ギルフォードの乗るグロースターへ飛び掛る。休まる事無いギルフォードであったが、ランスの刃でそれを弾くと標的をナナリーに定めランスの構えを取った。コックピット内では藤堂達の動きも確認し警戒を怠らない。

「もーらい。」

コックピット内で明るく声を漏らしたミレイは、四聖剣の動きに合わせて相手のサザーランドをアサルトライフルで攻撃する。すぐさま回避行動を取ったサザーランドであったが、四聖剣の動きにまるで警戒できていないのか彼らの乗るKMFの廻天刃刀で胴と足を寸断された。

「ラクシャータさん、この機体の事知ってる？」

ミレイは、無線でトレーラー内にいるラクシャータに呼びかける。モニターに表示された画像データも合わせて転送していた。

「ああ、これはキョウトのおじいちゃん達がグラスゴーをコピーして作った無頼^{ぶらい}ってやつだけど」

ラクシャータは転送された画像データを食い入るように見つめる。

「たぶんカスタム機じゃなあい？あたしは関わってないけど」

「無頼のカスタム機…ね」

「たぶんおじいちゃん達がつけるとしたら、無頼改って感じかな」

「わかったわ。ありがとう」

そう言って通信をきったミレイは、藤堂機に近づき無線に介入する。

「こちらは反ブリタニア活動をしている者です。ここは我々にお任せ頂けますか？」

外部に自身の正体がばれない様、常に変声させた声を発信させる仕組みになっており話し方さえ気を付ければまず性別はばれない。

「む。君たちは」

「我々の事を知るより、優先すべき事があると思いますが」

藤堂の言葉を遮ったミレイの言葉に、藤堂は少し考えた後四聖剣に指示を下した。

「ここ君たちにまかせた……、生きて会う事があれば礼を言わせてもらう」

そう告げた藤堂は、四聖剣を連れて斜面を駆け上がって行った。追撃を仕様としたサザーランドは背後からミレイ機に撃ちぬかれ、戦闘不能にさせられる。

残りのサザーランドは追撃を断念し、ミレイ機に意識を向けるもすでに遅く、右手に持ったアサルトライフルと左手に持った廻天刃短刀により呆気なく行動不能になった。

「まったく、この間のグロースターの人みたいに張り合いがないわねえ」

ギルフォード以外のKMFを沈めたミレイは、レーダーに新たに映し出された熱源を確認する。三機ほどがミレイ達の方へ向かって割りとき速い速度で移動している。

「ナナリー、斜面を下ってやって来てる増援部隊を潰してくるわねん」

「あ、はい。こちらが終わりましたら向かいますので」

勝気なナナリーの言葉を聞き、ミレイは増援部隊の方へKMFを移動を開始させた。

「くっ……コーネリア殿下あ」

ギルフォードの悲痛の叫びは、コックピット内に響き渡る。ランスを構えたギルフォードのグロースタート違い、両手を下に降ろした自然体で構えるナナリーの乗る白百合。コーネリアの状況を気にしつつも、気を抜けない相手にギルフォードの焦りは募る。

藤堂達の所属の反ブリタニア勢力日本解放戦線。その本拠地を叩き落とすために攻め込んできたブリタニア軍は、予期せぬ者の来襲に戦況を狂わされていた。その来襲者こそゼロの率いる黒の騎士団であり、土砂も彼らの仕業である。

ギルフォードが焦っているのは、増援部隊から藤堂達を誘いこみ挟撃を予定していた場所に、黒の騎士団が向かっていると言う連絡を受けたからだ。だが、焦りは動きに隙を生む。ギルフォードの技量でなんとか致命的なダメージを回避しているが、ナナリーの短刀により機体の傷が増していく。

「これならまだ、サイタマの時の方がワクワクしましたのに」

両方の短刀でランスとやり合う。

「いい加減邪魔ですから外周ブレードを断たせて頂きます」

何度か刃を交えた際に、外周ブレードの表面を確認していたナナリーは傷が深いブレードに目標を定めた。

「これで!!」

強化した加速力を駆使し、接近戦で緩急をつけて相手の反応を翻弄する。機体の軽さや柔軟さをも利用し、ギルフォードの薙ぎられたランスを飛び越え自身の機体に触れさせもしない。目標のブレードとギルフォードのグロースターが直線上に重なるようにタイミングを計る。

「そこ!!」

一旦間合いを空けたナナリーは、目標のブレードがグロースターに重なるのを確認し前方向へKMFを加速させた。ギルフォードはその動きに合わせてランスを構え攻撃のタイミングを図る。フェイントも無くただ真っ直ぐにやってくるナナリーのKMFに合わせてランスを引く。

「調整の結果をお見せしましょう」

気持ちを高揚させたナナリーは、一瞬口の端をあげるとランスを引き目標を定めたギルフォードから見て左へずれる様に、ランドスピナーを蹴りだしフェイントをかけた。

「甘い」

瞬時に照準を左にずらしたギルフォードは、ナナリー機目掛けてランスを一気に突き出す。そのタイミングを狙っていたナナリーは、ランスが突き出される動きを開始したのと同時に右足を蹴りギルフォードから見て右へ機体の位置を移動させた。

「なに!？」

すぐ様ランスの横を疾走して向かってくるナナリー機に対応しようにも、ランスの大きさが仇となり切り返す事もなげ払う事も分が悪い。なんとか攻撃を防ぐように外周ブレードを自身の正面になる様に構える。まさにそれを狙っていたナナリーは、右手逆手に持っていた短刀を順手に持ち変え上に振り上げる。左手は短刀を逆手に持ったまま下に下げる。

「断ちます!!」

右手を振り下ろし左手を振り上げた。ブレードをとランスを繋ぐ部分にある傷跡に目標を定め、両手に持つ短刀を交叉させる様に斬撃を放つ。キュイーンという廻天刃の音を響かせ、ブレードがランスから弾け飛ばされた。

「しまった!!」

ブレード部分がなくなりグロースターの期待がむき出しになる。すかさず短刀の間に詰めたナナリーは、右足のランドスピナーを逆回転させKMFをその場で超信地旋回し、機体を水平方向に一回転させた。短刀を順手に持った右手でグロースターの右腕を切断する。短刀を逆手に持った左手は向きを下方方向に下げ、右足を斜めに切断した。

「まだまだ」

「ぐっ……これでは」

まだまだ回転を止めないナナリーは、体勢を崩し傾いたグロースターのコックピット前部に位置する胸部に、切り傷をつけ左手で胴

体を頭部を切り離す。胸部を切られた衝撃で、コックピットブロック緊急射出プログラムが作動したため、ギルフォードの意思に反してグロースターからコックピットが射出された。

寸断されたケーブルからバチバチと火花が散り、グロースターの機体から黒い煙を吐き出し爆発音を奏でた。

「ふう」

ナナリーは極限まで高まっていた集中を緩和させるように、一息だけ肺から息を吐き出すとレーダー上で近づいてくるミレイ機の信号を確認する。

「お疲れ様♪」

ミレイの声が聞こえると同時に、木々の間からミレイの乗る機体が姿を現した。真っ先に狙ってくれと言わんばかりのピンクカラーの機体は、一つも傷を負った様子も無くトレーラーから発信した時の姿でナナリーの前で停止した。

「今回は勝てたのね」

「うーんどうでしょう。今回は相手の方の集中力が散漫でしたので」

「まあ勝ちも勝ちって事で、ここは喜んじゃおう♪」

「はい、そうですね♪」

ミレイの言葉でナナリーもようやく嬉しそうな声色を漏らす。

「そう言えば、上の方まで登ってみたけどシンジユクで見た白いKMFが、ものすごいスピードで移動しているのを見たわ」

「ぜひ手合わせてみたいですけど、先ほどの戦いで機体を少し無理させちゃったみたいで」

エナジーファイラーはまだ余裕があるが、コックピット内にあるモニターの一つに機体の状態を表示するものがあり、脚の部分がオレンジ色で表示されランドスピナー部分と脚の関節部分が異常を示していた。

「なら、ナナリーは先に戻っていて。私はちょっと様子を見てくるから」

「わかりました。気を付けてくださいね」

モニター隅に映るナナリーに笑顔を向けると、ブリタニア軍の白いKMFが向かった方向へミレイはKMFを発進させた。斜面を駆け上がるミレイ機の背中を眺めていたナナリーだったが、姿を見えなくなるのを確認し一人トレーラーの方に進路を向けた。

斜面を登り白いKMFが向かった方向へ進行しているミレイは、遠方から急激に接近する緑色の光球体をモニタに捉えた。

「ええ！？」

危険を察知したミレイは、すぐ様射線上から避けそれを回避する。モニタで瞬間的に捉えた画像を確認すると、光球体の正体は緑色に発光した銃弾であった。

「当たったらまずいわねえ…ん？」

銃弾が飛んできた方向を確認すると、白いKMFが激しく四方八

方へ銃弾を発砲している。ミレイの方向へ飛んできたのはたまたまで、確実に狙われたものではないと察したミレイは白いKMFの足元にある人型の熱源をモニタで捉えた。その部分を一部拡大させると、ミレイの見知った人物がその場に立っている。

——シーツールル… ああ、この場合はゼロかな

銃撃の爆風に巻き込まれているのを確認すると、KMFの上体を低くし銃弾に当たらないように白いKMFの間合いを詰めた。

「シンジユクでの借りを返すわ」

激しく動き回る白いKMFへ肩から体当たりしたミレイは、ささず左手の短刀を腰のホルダーに収めシーツとゼロを手中に入れる。さらにVASRAGのコードを解除し右手に持っていたアサルトライフルを捨てて、VASRAGを右手に持つ。

「さあて」

背後に気を配りながらランドスピナーを加速させ、その場を後にするミレイ。体当たりをされた白いKMFだったが、ボディバランスが良かったため少しだけ体勢を崩しただけであるため、すぐに立ち上がった。相変わらず意味不明に動き回っているが、銃弾を起こしたのか飛んではこない。

「まったく、おどかせないでよっね!!」

VASRAGの照準を白いKMFに合わせ撃ち込む。激しく動いているため、なかなか狙いを定める事は困難であったが、放った内の一発が銃を持つ右手に直撃した為白いKMFは銃を地面に落とす。

それを確認したミレイはそのまま斜面を駆け下った。

「お前は何者だ。どここの所属だ」

仮面の人物ゼロとシーツをようやく見つけた洞穴の前に降ろすと、ゼロは礼ではなく警戒をミレイに対して向けた。

——ふふ、いつか…話すときが来るかしら

モニターに映し出されるゼロの姿に笑みを浮かべたミレイは、そのまま何も言わずに二人に対して背を向けKMFを発進させる。

「おい、待て」

背後から聞こえるその声に応える事無く、ミレイはナリタ山中へと消えて行った。

ナリタ 攻防戦 Revenge of Nunnally（後書き）

今回は意外と？長くなった気がします。

作成にいろいろ見ながらしてたら5時間くらいかかったよ（笑）

休日これしかしてないなあ・・・暇人て言わないで！！

さて今後のシャリーの処遇については、まだまだアンケート募集中です。

前回のあとがきと活動報告でかいてますので、感想なりコメントなりメッセージなりでお応えいただけたら嬉しいです♪

それでは

またみてギアス（笑）

後悔の先の覚悟（前書き）

おひさすぶりです。

STAGE 13あたりです。

後悔の先の覚悟

NAC――

キョウトとも呼ばれているエリア11に存在する秘密結社。旧財閥系家門が集まりそしきされた集合体。実態は反ブリタニア勢力への兵器の支援や援助などを行っており、昨日戦闘があつたナリタ山を本拠地に構えていた日本解放戦線には、特に手厚い支援を行っていた。

キョウトは表立つての名称ではNACと呼ばれ、NACは内政省管轄の下、エリア11の自治を司るイレヴンの代表団体として存在している。しかし一部の私利私欲を貪ろうとしているブリタニア官僚と関係が有り、利益供与という賄賂によってキョウトとしての活動を強引に黙認させるほど、裏での力は健在。

このキョウトに認められさえすれば、反抗活動においてさまざまな恩恵を受けることができる。そんなキョウトから黒の騎士団に封書が届くのは、ナリタ山での活動を終えてすぐの事であつた。

「今日も晴れじゃない…か」

アッシュフォード学園敷地内にある女子寮の自室、ミレイはどんよりと重たい天気を窓から伺い一言漏らした。空は曇模様の為、ミレイはすっかり天気のように心が重い。その理由は天気だけのせいではないのだが……。

「ミレイ来たか」

「どうしたの？おじいちゃん」

週明けに祖父に呼び出されたミレイは、いつもより早く学校へ登校し理事長室へとやってきた。祖父ルーベンの前にある重厚な机の前についたミレイに、一枚の紙を差し出す。

「ん？……忌引と…どけ？」

その書類を手に取り記載されている文字に目を向けると、そこにはシャーリーの名前が記されていることにミレイは気付く。

「彼女の父親が亡くなったそうさ。この間のナリタ山の戦闘に巻き込まれたらしい」

「え！？」

ルーベンの言葉に驚いたミレイは、思わず眼を見開いた。ナリタ山の戦闘ではミレイも途中からではあるが参加しており、少しだけ複雑な感情に抱かれたミレイは一息つくと手に持った忌引届けの書類をルーベンへと返す。

「明日、葬儀を行うそうさ。お前にはアッシュフォード学園代表として、参列してきて欲しい」

「…わかったわ」

そして今日は学校ではなく、シャーリーの父親の葬儀の為東京租界のとある教会へ向かう事になっていた。

「ルルーシュ」

想いを寄せる彼の名前を呼び、再び空を見たミレイは明らかに様

子がおかしい彼の事を考える。昨日は学校へ登校はせず自室にもいない。メールしても返事は無く、少しでも寄り添って彼に縋りたかった彼女は、机の上に置いた無反応の携帯電話へと目を落とした。

携帯を気にしつつも身支度を整え終わったミレイは、友人代表として参加する生徒会メンバーと決めた待ち合わせ場所を確認する。

「さて、そろそろ出発しないと」

誰に言うでもなく、ミレイは最低限必要な携帯と財布を持って自室を後にした。

「あ、ミレイちゃん」

「ごめん、おまたせ」

教会へついたミレイは、すでに集まっていたメンバーの所へ駆け寄った。時間にしては葬儀の時間まで割と余裕があったが、参列者はすでにあらかた集まっているようでミレイ達も参列者の固まりのほうへ移動する。何にも連絡をよこさなかったルルーシュの様子を、ミレイはさりげなく目で伺った。前髪で表情が隠れるほど下を向いており、いつもとは違い覇気がまったくといっていいほど失われている。ルルーシュは一切ミレイ…ほかのメンバーにも目を合わせる事無くただただひたすらに下を向いていた。

——ルルーシュ…やっぱりナリタの事を…

ミレイはルルーシュを抱きしめたい衝動をこらえ、教会の方へ視線を戻した。娘であるシャーリーの案内で参列者が霊園の中へと案

内をされていく。霊園の入り口では嗚咽をこらえ涙を流し続ける女性
性が立っており、目元や顔立ちがシャーリーと重なった。

「あ、会長」

聞きなれた声に呼ばれたミレイは、黒い喪服に身を包んだシャー
リーが母とは対照的に、気丈な表情でミレイ達のほうへとやってき
た。

「シャーリー……、ご逝去の報に接し、アッシュフォード学園の代
表と生徒代表として、謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈
りいたします」

そつとシャーリーの手を握ったミレイに対し、力なく握り返した
シャーリーは、ゆっくりと後ろを向く。

「ではこちらです」

気丈な表情であつても、その声は少しだけ震えていた。それでも
しつかりとした足取りでミレイ達の案内を務める。やがて神父が現
れると厳かに葬儀が始まった。ミレイ達は少しだけ離れた所に達そ
の様子をじつと見守る。

——ごめんなさいシャーリー。あなたの憎しみも怒りも……いつか私
に向けて……

下唇をきつくかみ締めたミレイは、誰にも見えないように両手を
力いっぱい握り締めた。ここにいる生徒会メンバーが六者六様の考
えを浮かべながら、やがて葬儀は終了を迎えた。

参列者の悲しみから来る重い足取りも、ゆっくりと移動をはじめ

少しずつだがお墓を囲むその人数を減らして行く。愛する夫を失った悲しみと夫の死因である土砂による生き埋め。それがあり棺を埋葬する際に土をかぶせられていく棺に、死んでもなお土に埋めるのを泣きながら拒んでいたシャーリーの母親であったが、今は参列者に感謝を込めてお辞儀をしていた。それでも流れる涙は止まらない。

——きつと、あたしもルルーシュを失ったら……

ミレイは可能性がゼロではないその未来を想像し、左二の腕を握る右手の力が強くなる。やがて痛みを伴った二の腕により、乱した心を少しだけ平常に戻したミレイは一息ゆつくりと吐き出した。

半分以上の参列者が帰った所で喪服用のドレスに身を包んだシャーリーが、ミレイ達のほうへゆつくりと歩いてやってくる。その表情は今にも泣き出しそうな、それでもぐつとこらえたその顔で、全員顔を見渡した。

「その…、シャーリー……」ごめんなさい」

ぐつと悲しみを飲み込みミレイ達に口を開きかけた時、カレンの声がシャーリーの言葉を飲み込ませた。そのカレンの言葉に疑問を投げたシャーリーだったが、カレンは口を嚙む。作戦とはいえ、土砂はカレンが操縦する紅蓮式式により人為的に起こした現象、それにより身近なクラスメイトの身内を巻き込んでしまったことによる罪悪感が、カレンにそうさせたのだろう。カレンが返答に困っていると、次に口を開いたのはリヴァルであった。少なからず正義の味方という響きから、興味本位で指示するような事をしその行動を軽んじていたと恥じながらシャーリーに申し訳なさそうに謝る。

「そんなこと無いよ。そんなの全然関係ないって……。私だって成

田の事には――」

気丈を装うシャーリーのその言葉を、ミレイは両肩に手を置き遮った。

「シャーリー……ちゃんと泣いた？ 今、変に耐えると後でもっと辛くなるよ」

本来、言つべき資格の無い事を承知のミレイであつたが、シャーリーの顔を見て思わず言わずにはいられず声をかける。

「もう……いいの」

シャーリーは、ミレイと視線を合わせずにうつむき加減でそう答え、一瞬ルルーシュの方へ視線を這わせた。

「もう、十分泣いたから」

ミレイは、シャーリーの先ほどの視線の先にルルーシュが居たことで、何があつたのか大体察する。女の勘を最大限に發揮したミレイは、悲しみを救いを求めたシャーリーにルルーシュが手を差し伸べたのだらうと。ほんの少し同情の心に殺意の色を含めたミレイだったが、「卑怯だ」という怒りを滲ませたスザクの言葉にその色は削がされた。

下を向きながら黒の騎士団を、ゼロを批判する。亡くなった者とお別れするこの場に似つかわしくない彼の怒声は、誰に言うでもなくただただ吐き出し彼は拳を震わせた。

「間違つて得た結果なんて意味は無いのに」

答えの出ないその彼の言葉に、反論しようとしたミレイであったが場所を考え、今口から飛び出しそうだった言葉を慌てて喉の奥へと押し込む。スザクのほうへ移した視線をシャーリーに戻したミレイは、いつもの穏やかな口調を浮かべた。

「それじゃ、私たちはそろそろおいとまするね。シャーリーの事……待ってるからね。いつもの生徒会室で」

ミレイが振り向くとそれにつられて他のメンバーもゆつくりと振り向く。ただ一人ルルーシュを除いて。微動だにしないルルーシュに声をかけるリヴァルだったが、なんとなく事情を察したミレイはリヴァルを羽交い絞めにして歩き出す。

「ばか」

ルルーシュとのすれ違いざまに呟いたミレイの言葉に、僅かに体を反応させたルルーシュを見てミレイは一つため息をつく、二人を残してその場を後にした。

「どうしたんだナナリー」

クラブハウス内のリビングルームの窓際に立つナナリーに向けて、部屋に入ってきたばかりのC・Cが問いかける。ナナリーは朝からずっと、ただひたすら窓からこの曇り空を眺めていた。

「いえ……」

「後悔か？」

Ｃ・Ｃ・はナナリーをまっすぐに見つめる。窓ガラスにうつすら見えるＣ・Ｃ・に目を向けながら、ナナリーはゆっくり首を振った。両手を強く握りゆっくりと振り返ったナナリーの目には、微塵も同様の色を交えてはいない事を確認したＣ・Ｃ・は、ふっと優しい笑みを浮かべた。

「後悔は…やっぱりちよつとはあります、家族を失う悲しみ…少しはわかりますから」

その後に「ですが」という言葉をつけ足し、Ｃ・Ｃ・の方へ振り返る。

「人は常に何かの犠牲の上に立っている…そう思いませんか？」

「ん……」

ナナリーの真意を測り兼ねたように、Ｃ・Ｃ・はナナリーの言葉を待った。

「動物達や植物達、この大地も……。そういった身近な犠牲に目を背け、目に見えてる事だけに意見を述べ綺麗事を並べる。それはただの理想論です」

ゆっくりとナナリーは語りながら、Ｃ・Ｃ・の方へと近寄る。視線はＣ・Ｃ・と絡めながらゆっくりと。

「ですが、何かの代償に犠牲は付き物……。そんな風に割り切れない、それが人なんだと思います」

先ほどの窓際に立っていた時と違い、ゆっくりと確実にその口か

ら溢れる言葉は力強さを増していく。

「これから多くの犠牲の上を、私はお兄様の為に進みます。その時に生まれる悲しみも後悔も向けられる憎しみも……、私はすべて受け止めます」

C・C・の前で立ち止まったナナリーは、いつもの様に優しく微笑んだ。

「積み重なる悲しみや後悔よりも、お兄様を失ってしまう事の方が……私には何よりも大きいのです。だから……」

その言葉の後に繋がられたナナリーの答えに覚悟に満足したのか、C・C・は笑みをこぼす。

「ミレイさんは大丈夫です」

ナナリーの言葉にドキつとしたC・C・は思わず目を見開いた。ナナリーの覚悟に満足していたC・C・はもう一人の少女の事を考えていた。きつとナナリーと同じように迷いを浮かべているのだろう。しかし、その考えはナナリーの言葉で吹き飛ばされる。

「きつと、ミレイさんも私と同じ考えですよ。一番大切なものを守るために、自分に押し寄せる悲しみも浴びせられる憎しみも……、すべて受け止める覚悟を」

「そうか……あとは」

——ルルーシュ……か

ここにはいない共犯者の事を思い浮かべ、C・C・はため息をこ

ぼ
し
た。

後悔の 先の 覚悟（後書き）

心理描写が苦手だ。

上手くかけないし哲学的な事はわからん。

ここまでは第一部みたいな感じですね。

それではまたみてギアス♪

修羅の道へ（前書き）

お久しぶりです。

久々の更新ですが、心理描写が苦手すぎて遅筆でした。

それではどうぞ。

修羅の道へ

ガンと壁を二度三度と叩きつける。その音はこのバスルームの中を木霊し、止め処なく流れ出るシャワーの音が、それを包み込む。黒髪の少年ルルーシュは、バスタブの中で後悔と自責の念に渦巻かれ答えの出ない問いを疑問が頭の中を支配していた。

『私を失望させるな』

唯一の共犯者であつた緑髪の少女C・Cから放たれた鋭く冷たいその言葉は、ルルーシュの口から飛び出そうとしていた言葉を丸め込ませる。ずっと傍にいと誓った相手がいながらも、容易に受け入れてしまった傷心の少女の唇、今になつて思えばその少女の笑顔に無意識に癒されていたと感じるが、それもすでに後の祭りとした。

そしてルルーシュは、このバスルームへ逃げ込む前にやり取りをした二人の少女を思い出す。

「黙れ!!」

テーブルの上に置かれたノートパソコン、その横に置かれた携帯が何度も振動を繰り返している。やがて諦めたのかその振動が止まった後に、C・Cはルルーシュに対して口を開いた。ソファに座り上の空だったルルーシュに対して、C・Cから放たれた言葉は容赦なくその心を抉っていく。

「黙れ! 覚悟は——」

ルルーシュの言葉を遮ったのは、部屋のドアがスライドして開く音だった。気持ちをすぐに切り替えられないルルーシュではあったが、それはすぐに怒りから驚きにかわる。入り口には車椅子に乗ったナナリーとそれを押すミレイの姿があった。一歩二歩と部屋の中へ足を進めると、やがてドアはその口を塞ぐ。

少しの間の後、険しい表情を露にしたルルーシュはミレイに視線を向けた。

「ミレイ……」

その後に続く、――なぜ勝手に入ってきた？――、という無音の問いかけを理解したミレイだったが、いつもの様に自分のペースは崩さない。

「今日はルルーシュに大事な発表がありません」

いつもの生徒会室でのノリと同じ調子で、ミレイは声をあげる。今までの緊迫した空気の中では場違いなミレイの雰囲気であったが、ルルーシュはそれになぜか圧されてしまった。空気が読めないのか、それともあえて読まないのかミレイは相変わらずのまま、ナナリーに微笑む。

「お兄様」

いつも通りの優しみのあるナナリーの声にハッとなったルルーシュは、ナナリーが少しだけ緊張の色を浮かべてる事に気づく。

「私はお兄様の抱く苦しみをわかってあげる事はできません」

ルルーシュはその言葉にびくりと体を反応させる。苦しみ、その言葉が何に対して言われているのかルルーシュは脳内で、幾通りかの可能性を思い浮かべながらナナリーの言葉を待った。

「でも力になる事はできると思うんです」

そう言ったナナリーはゆっくりと足を動かし床の上に降ろす。

「ナ、ナナリー！？」

このエリア１１に来て以降、今までずっと足に障害を抱えていた愛妹のその行動にルルーシュは同様に隠せずに大きく目を見開いた。知る限り妹ナナリーが、足を自由に動かす所など記憶に無い。あの日、母親が殺されたあの日以降……。

——しかし……

そうであつたとしてもルルーシュは、少なからずその可能性を考えてないわけではなかった。ただあまりにも確率的に低く除外していた部分がある。いつの頃からか少しずつ肉付き始め血色も良くなっている。そして何かの際にナナリーに触れる際、ナナリーがくすぐったそうな反応をしているのを何度も感じてはいた。

だが、歩けるようになるにはまだ時間かと思っていたルルーシュは、このタイミングでの事は想像もしていなかった為、動揺は大きい。

「もしお兄様が立ち止まってしまったのなら……」

ゆっくりと椅子から立ち上がったナナリーは、まっすぐにルルーシュの顔を捉えた。

「な……」

立ち上がるときと同じようにゆっくりと、閉ざしているその目蓋を上を開いていく。ルルーシュが最後に見たときと同じ輝きの瞳が、ルルーシュをまっすぐに捉え離さない。ルルーシュもその瞳に捉えられ顔を背くことさえできず、ただただナナリーを見つめる。

あまりの事に驚きを隠せないルルーシュは、その後のナナリーの言葉とミレイの言葉が頭に入ってこないほど、自身の脳内処理に追われていた。ルルーシュがやっと意識を現実に戻したのは、二人がこの部屋を出て行った後でだった。

『お兄様が立ち止まってしまったのなら、私が…私たちがブリタニアを壊します』

『ルル、ゼロって弱い者の味方何だよね？なら……なんで私のお父さん、殺したんだろう…』

『ルルーシュ、もう休んでもいいのよ。あなたの為に私達が……代わりに背負うわ』

『ぬるいのはお前だ。今までもお前は多くの人間を殺してきた。その手で、あるいはお前の言葉で』

『お願い、ルル…助けて』

『なぜ今さら迷う？情で揺らいだか？せがまれるままキスして・・・』

——黙れ……

『お前はいつも女に守られてばかりだな。私に……ミレイに……、そしてナナリーにさえも』

——黙れ!!

『ルルーシュ……お前にはもう、動揺したり立ち止まる権利などない。生きるために必要なのだろうか？ミレイもナナリーも……私も』

——……

『私を失望させるな』

——くっ！

C・Cのその言葉を思い出し、表情を歪ませて一際大きくバスルームの壁を叩いた。奥歯を噛み締めて、一人そのすべての事を心の奥へと闇へと静かに飲み込む。

——俺は……

『行くか？修羅の道を』

NAC……エリア11に存在する秘密結社であるキョウトに呼び出された際に、ゼロ……ルルーシュの前に姿を現したのは老獪な雰囲気漂わせた老人、桐原泰三であった。8年前、まだ日本という

名前であつた時代にブリタニアから人身御供として送られた際、ルルーシュとナナリーは桐原と面識を持つ事になった。もっとも当時ナナリーは目が見えていないため、桐原の顔を知る事はなかったが……。

桐原と8年ぶりに再会したルルーシュに対し、桐原が言った言葉……。

『行くか？ 修羅の道を』

ルルーシュはその言葉を何度も何度も頭の中で反復させる。

——修羅……

ルルーシュは閉じていた目を見開き、壁の一点をしばらく凝視したあとで蛇口を閉めた。頭上に降り注がれているシャワーが止まりルルーシュは立ち上がる。

——ナナリー……ミレイ……。俺はもう、立ち止まらない。流してきた血は無駄にはしない！！

『お前はいつも女に守られてばかりだな。私に……ミレイに……、そしてナナリーにさえも』

「ふっ」

C・Cの言葉に対してなのか、自分に対してなのか、ルルーシュは嘲る様に笑みを浮かべる。

——お前たちだけは、俺から離れないんだろう？

誰への問いでも無しに、ルルーシュはバスタオルを手に取りバスルームを後にした。

修羅の道へ（後書き）

上手くできずなんか力量不足を痛感しました。

ここから第2章みたいな気分でやってます。

前回までが第一章『Birth of black knight^s』

今回が第二章『Black rebellion』

見たいな感じですかねえ（笑）

それでは、またみてギアス♪

再会の 齋す モノは（前書き）

更新遅くなりごめんなさい。

遅くとも執筆はしていますので、どうか長い目で応援いただけたら嬉しいですよ。

再会の 齎す モノは

「もうそろそろ帰宅することだと思うが……」

住宅街には場違いな黒塗りの高級車が一台、道の路肩に駐車している。ガラスが前面が黒いスモークが貼られており、中を確認するのは近づいて覗き込まない限り不可能に近い。その後部座席には、首元のボタンで閉めるタイプの黒い外套を纏う女性が座っていた。外套の中は胸元に紫色のスカーフで飾り、ボタンの両脇にフリルの付いたノースリーブのブラウス、肘上から手首にかけては白いアイムウオーマーをしている。タイトなスカートに鍛えられた足は網上のストッキングでセクシーさが引き立つ。

美しい銀色の髪は右に七分、左に三分けしており七分は右へ流すようにセット。左の三分は後ろへ流し後ろ髪とまとめてやや頭頂部左側でポニーテールのように輪状の髪飾りで括っており、そのテールの部分の中腹あたりを筒状の紫色の髪飾りで纏め、散らばらないように工夫をしている。

褐色の肌に見栄える紫の口紅で飾られた唇から、ため息なのかはたまた自分の緊張を鼓動を落ち着かせるためなのか、何回目かの息が漏れた。金色の瞳で何度も書類とそしてアッシュフォード学園の制服を着た、男子生徒の写真に目を通す。

——ルルーシュ・ランペルージ……、こいつがゼロに通じている可能性はある。もしゼロにたどり着いたら……

そこまで頭の中で呟いた女性、ブリタニア軍騎士候のヴィレッタ・ヌウは口端を上げてにやりと笑みを浮かべる。

——私は貴族に……騎士候なんてものじゃなく、本当の貴族に

内に秘めた野望の為、目的の人物が帰ってくるのを今か今かという思いで、彼女は一件の家を見つめた。黒の騎士団に散々苦渋を飲まされてきたヴィレッタは、ようやくその尻尾を掴めると意気込み今は行方不明になった元上司を思い出す。

ジェレミア・ゴッドバルト

純血派を纏め上げ、KMFの操縦技術には誰もが一目置く存在であつた。しかし、クロヴィス殿下殺害容疑をかけられた枢木スザクを輸送中にゼロと対峙、その際に彼らを見逃した事で彼の地位が一変する。これがオレンジ事件と呼ばれ、純血派の地位が地に落ちた事件であつた。オレンジという単語を聞き、ジェレミアがゼロ達を見逃した事で、ジェレミアには不名誉なオレンジという陰口が方法で叩かれている。

——私は、ジェレミアのようにはならない。必ず貴族になってみせる

強い思いを胸に秘めたヴィレッタの乗る車の横を、タクシーが通り過ぎ一件の家の前で停車した。両サイドのウインカーを点滅させ暫くの後、後部佐席のドアが開かれる。黒い喪服用のドレスを着た栗色の長い髪の女性が、降りてタクシーの運転手に一礼すると後部座席のドアを閉めたタクシーは、発進した。タクシーの後姿をボーンと見つめている彼女を確認し、タクシーが見えなくなるのを待ってヴィレッタは車を降りた。

「シャーリー・フェネットさん……ですね？」

背後から声を掛けられ、体を強張らせるように反応した彼女は驚きと共にゆっくりと振り返る。

「はい、……あなたは」

振り向いた先にいたのは銀髪で褐色肌の女性。シャーリーはその女性を見たのは今回で二度目……一度目は――

「ブリタニア軍所属の、ヴィレッタ・ヌウです」

「シャーリー、先に帰ってていいわよ。あとはやっておくから」

式も終わり少しだけ落ち着いたのか、母親はシャーリーに声をかけた。シャーリーは、式の前後の様子を知っているため少し躊躇するが、力無く微笑みを浮かべた母親の「大丈夫」という言葉に送られてシャーリーはタクシーに乗り込んだ。少しずつ遠くなる母親の事を心配したが、自身の心の中ではすでに限界に近かったため「大丈夫」という母の言葉を信じ、少しだけ長いため息を車内に零した。

父親の死……、シャーリーの心を追い詰める要因の一つではあるが、今シャーリーを最も追い詰めているのはそれではなく、同級生である枢木スザクの言葉。

『間違ったやり方で得た結果なんて、意味は無いのに』

スザクの放った言葉の矛先は、世間を騒がせている黒の騎士団と……それを率いているゼロに向いている。しかし、シャーリーは父親

の死を確認したその日…ルルーシュに助けを、心の拠り所を求めた日の行為を、卑怯な行為と批判されているに等しいものであった。

スザクの言葉とルルーシュへの行為、自分の思いとが工作し焦点の定まらない視線は、ひたすらタクシーの窓の外へと向け流れる景色をただただ眺める。出ることの無い答えを求める彼女が次に声を発するのは、タクシーの運転手からの呼びかけであった。

「お客様、到着致しましたよ」

「え？あ、あ…はい」

はっと我に返ったシャーリーはあたりを見回すと、見慣れた自宅周辺の風景が視界に入る。彼女は慌ててお金を渡し、お礼を述べてタクシーを降りた。シャーリーが一礼すると、タクシーは後部座席のドアを閉めて車を発進させる。その後姿をしばらくボーッと見送った後、自宅へ入ろうと向きを変える瞬間に、背後から声を掛けられ、驚きで身を竦めた。

「シャーリー・フェネットさん……ですね？」

褐色肌に銀髪の女性に名前を呼ばれ、怪しみながらも一言返事を返す。

「ブリタニア軍所属の、ヴィレッタ・ヌウです」

軍人という事で少しか警戒を解いたシャーリーは、ナリタでこの女性と会っていたことを思い出した。それは生き埋めになった父と対面した時に、案内をしてくれた軍人。

「ナリタではお世話になりました」

咄嗟に礼を述べたシャーリーに対しヴィレッタは、二言三言言葉をかけると自分が乗っていた黒塗りの車へ乗るように促した。

「実はあなたに知っておいて頂きたい事があります。不謹慎とは思いましたが、黒の騎士団について」

ヴィレッタから発せられる黒の騎士団という単語に、少しでも過剰に反応してしまったシャーリーは、関わりたくないという思いと父の死の原因という想いが絡み合い、ゆっくりとヴィレッタの案内する車の方へと歩みを進めた。

シャーリーの歩みを進めるその足音が、二人の歯車を狂わせているとは知らずに……

再会の 齋す モノは（後書き）

最近ちょっとスランプなんです。

ほんとはもうちょっと繋げたかったのですが、

次回からは日本解放戦線消滅ステージです。

ここから原作を土台としながら、あつと驚く展開に・・・なればいいなあ（笑）

追う者 を 跟ける者（前書き）

気づけばもう23話目ですね。
はやいものですね。♪

追う者 を 跟ける者

「コンテナがたくさん……ここは、港？」

ブリタニア軍人を名乗るヴィレッタという女性から聞いた言葉に、半信半疑だった少女は栗色の長い髪を揺らし場違いな制服のまま、静かにコンテナ群れの中を進んで行く。港湾施設に迷い込んだ少女、シャーリーの存在などお構いなしに時間は針を迷わず進める。

「ルル、嘘だよな？あんな怪しい人の言うことなんて……」

シャーリーは父親の葬儀のあった日に、ヴィレッタから聞かされた言葉を思い返した。自分の生徒手帳に挟んであったルルーシュの写真、どこかで無くしたとばかり思っていた写真をヴィレッタから渡され、ルルーシュについて一つの仮説を語り出す。

『黒の騎士団に関与している可能性がある……テロリストだ』

それを聞いたシャーリーは、ヴィレッタの声を掻き消すように否定の声を上げた。渡された写真のルルーシュは、いつもの様に優しい笑みを浮かべシャーリーの目を捉えて離さない。

——嘘よ、ルルーシュがテロリストだなんて……

——お父さんを殺したのはゼロで……、黒の騎士団で

二つの思いが交錯しやがて絡み交じり合う。何が真実で何が信じられるのか、信じてきた思いの大きさに比例するように疑問が疑心に変わり、やがて疑惑が心を支配する。ルルーシュに対し不信の念を抱いてしまったシャーリーは、ヴィレッタに言われるままに行動

を起こしてしまった。そして今この港に訪れるに至った。

ルルーシュを尾行しこの港まで来たものの、ルルーシュを見失ってしまったシャーリーは、不安になりながらも逃げ出したい思いに逆らうようにゆっくりと足を進める。胸元で右手を強く握り締めて、自身の不安を恐怖心をなんとか押さえ込む。

「ルル……お願い、信じさせて」

すでにルルーシュに対して不信しか抱いていない彼女の口から出た言葉は、ルルーシュを信じている気持ちなど微塵も含まれてはいなかった。そんなシャーリーの事を尾行している人物が一人、事の発端を起こしたヴィレッタであった。

「見失ったようだな……、早く連絡してくれば手を打てたものを」

シャーリーが尾行するであろうと予想していたヴィレッタは、あの後からシャーリーを監視していた。尾行する事にしても連絡がないという時点で、こちらの事も信用してはいないのだとヴィレッタは察する。一人で確かめて何も無ければそのまま……、見失ったシャーリーに対し軽く舌打ちしそれでもその姿を追うしかないヴィレッタは、周囲を警戒しつつシャーリーの後に続いた。

「やはりあの学生を先に捕らえるべきだったか……」

ルルーシュを見失いあたりをキョロキョロと見回すシャーリーの姿に、嘆息をもらしたヴィレッタは胸に秘めた決意を思い出し、じれったさに叫びたい衝動をなんとか押さえ込む。

「黒の騎士団との接点がある、という確証が必要だ。きっとあの小

娘との会話で必ずわかるはず。やつが私とジェレミアに行った記憶の操作、その手段を持っているなら尚の事」

ヴィレッタはさらに目を鋭く光らせ、シャーリーの姿を視界に捕らえて離さない。

「私は、ジェレミアのように地位も名誉も失って死んだりはいしない。私は手に入れる…地位も名誉も。だからこそ、私一人で掴んでみせる……ゼロに繋がる手がかりを」

——シャーリーが港に着く数時間前……

修羅の道を再び歩き始めたルルーシュの背を、クラブハウス二階の廊下の窓から見送っていたミレイは、そのルルーシュの後をつけている見知った少女の姿を発見した。栗色の長い髪を揺らしながら、ルルーシュの背面の死角の木にその身を隠しながら、一定の間隔でルルーシュの後を追いかけている。普段であれば気にならない彼女の行動も、今回ばかりは異質なものをミレイは感じた。ただ後を追いかけているだけではなく、明らかな尾行…ルルーシュに存在を知られないように追いかけて行くその姿には、まさにといった様子である。

——シャーリー……

自身の中ですうつと冷たくなる感情を抑える事無く、ミレイの双眸は冷徹に彼女の背中を追いかけた。

——ルルーシュに……ゼロに気づいた？

ミレイが瞬時に思い描いた可能性は二つ。ルルーシュがゼロと気づいた、もしくはゼロ・黒の騎士団に関連していると感じた、この二つである。今の段階ではまだ尚早な気もしているミレイは、シャーリーの姿を追うのをやめナナリーのいるリビングルームへと向かった。扉を開けると室内には今回の黒の騎士団の作戦に同行するための準備をしているナナリーが、着替えと同時に周辺の地形を頭に詰めている姿が見える。

「ミレイさん？どうかしましたか？」

地形が映されている資料から、ミレイのほうへナナリーは視線を移した。ナナリーが感じ取ったのは、ミレイの纏う雰囲気が少しだけ鋭利な事。いつもの様な笑顔の下に、何かしら抱えていると思ったナナリーはミレイの言葉を待つ。その沈黙でナナリーが何を察したのか理解したミレイは、ため息混じりに口を開いた。

「シャーリーがね……、ルルーシュを尾行しているみたい」

その言葉に少しだけ驚いたナナリーは、疑問の言葉を表情に変え首を傾げる。それに答えるように首を振ったミレイは、うつすらと目を開いた。

「どういう意図かはわからないわ。だから、あたしはシャーリーの後を追いかける」

ミレイの言葉に、ナナリーは笑顔で答えた。ミレイはそんなナナ

リーに一度だけ頷くと、左目に赤い不死鳥の模様を浮かび上がらせて、赤い粒子と共にクラブハウスからその身を消した。その余韻を見送ったナナリーは、時計に目を配らせると部屋の奥にいるであろうC・Cの方へ顔を向ける。

「C・Cさん、時間なので私は行きますね」

「あー、気をつけてな」

「はい」

C・Cのそっけない返事を聞いたナナリーは、小旅行用の小さいキャリアケースを転がしながら部屋を後にした。

アッシュフォード学園の校門まで移動したミレイは、ルルーシュが向かうであろう港までのルートを周囲に気をつけながら急ぎ足で追いかけた。どんな理由であろうと、ルルーシュが皇族であり生きている……という事がバレてしまう事だけは避けなければならない最優先事項であり、それが生徒会メンバーであろうと誰であろうと障害になるのであれば消すしかないと思うミレイは、最悪の事態を想定する。

——あたしに……できる？ルルーシュを愛するあたしが、ルルーシュを想うシャーリーを……

シャーリーと過ごした時間を思い出しながら、シャーリーは自身へとただひたすらに問いかける。最悪の事態、それはシャーリーを消さなければならぬ事態になる事。純粹で真面目で一途で元

気で、その笑顔で周りをも明るくさせる少女。そんなシャーリーにルルーシュだけでなく、ミレイも幾度も救われている。何度も冷静に、ルルーシュを守るためならばと考えていてもそれが生徒会メンバーとなれば、少しだけ躊躇が生まれる事にミレイは驚いた。

——ん？あれは……

思考を巡らせていたミレイは、ぎこちない動きで物陰に隠れて移動する少女の後姿を見つける。最悪の事態についてはとりあえず考えることをやめ、今はシャーリーを尾行することに専念することに決めたミレイは、そのシャーリーから少し離れた所にいる銀髪の人物に意識が動く。銀髪の長い髪を揺らし外装をひらめかせながら、無駄の無い動きかつ自然な動きで人波に溶け込む。その見事な動きに、逆に違和感を感じシャーリーと銀髪の女性を観察する。その動きが明らかにシャーリーをつけているという答えに辿り着くのに、さほど時間は掛からなかった。

——軍人…、なるほど……それでシャーリーが

なんとなく今回のシャーリーの行動について、予想がついたミレイはシャーリーから対象を銀髪の女性へと変えて彼女達の後ろを歩く。ミレイ達が黒の騎士団が作戦を展開する予定の港湾施設へ辿り着いたのは、すっかり日が暮れてからであった。

ミレイは素早い動作で携帯のボタンを操作する。

『シャーリーとそれをつける銀髪の軍人、二名が港に到着』

簡潔に文字を入力し送信ボタンを押す。暫くするとメールではなく着信の文字が形態のディスプレイに表示された。通話ボタンを押

すと聞こえてきたのは少年の声――

「どういうことだ！？なぜシャーリーが」

少しだけ怒りが混じった少年の声に、ミレイは冷静に説明を始めた。ミレイの説明に納得したのは、先ほどとは違い、冷静で抑揚を抑えた声でミレイに指示を出す。

「戦闘になればきつと避難するだろう……ミレイ、その銀髪の軍人を捕らえて情報を聞き出せ」

「わかったわ。で、ルルーシュ……ゼロはその後どうするの？」

「これから海中水泳だ」

昼間に作戦を聞かせていたミレイは、電話越しに少しだけ笑ったルルーシュと同じように笑い通話を終了した。

――これで日本解放戦線も最期……か。

少しだけ憂いを帯びた表情のミレイは、夜空を見上げるとゆっくり目を閉じた。

追う者 を 跟ける者（後書き）

次こそは戦闘になるかと思っています（笑）

もうすぐ累計1万ユニークなので、頑張りたいと思います♪

無常と非情（前書き）

おお、もう24話なんですか。

なにげに最多話数を超えそうですね。

恐らく25話が最多だった気がします。

無常 と 非情

遠くで機関銃の無機質な音がミレイの耳に届く。この音でブリタニア軍が日本解放戦線に、攻撃を仕掛けたのだらうとミレイは立ち止まりふとゼロ——ルルーシュの事を思い浮かべる。

本来であればミレイ自身もKMFに乗り込み、好機を待つて奇襲をナナリーと共にかける予定であったのだが、予想外の出来事に直面し今はその当事者であるシャーリー・フェネットと、それを尾行する銀髪の軍人女性をその視界に捕らえていた。ミレイが追う二人も音に気づいたのか、周囲を見回している。特にシャーリーはこういう事に直面した事は無い為、震えているのか強張っているのか動きにぎこちない。

——ここは危ないから、はやく引き返して！！

言葉に出せない願いを心の中で呟きながら、シャーリーの動向を観察するミレイ。その願いに反するようにシャーリーは、音が鳴り響く方へとゆつくりと足を進めて行く。その後ろを警戒な動きで尾行を続ける女性を見ながらミレイは苦笑いを浮かべた。

——これ以上行くならもう後戻りはできないわよ

再び二人の尾行を開始したミレイが足を踏み出した瞬間、倒れそうになるくらいの衝撃と轟音が響き渡り、大きな水柱が天へと立ち昇った。水しぶきがミレイの居る位置にまで及びミレイの肌を、髪を服を湿らせる。

僅かに振動するポケットに入れておいた携帯を取り出し、届いたばかりのメールを開く。送り主はナナリー、今の合図が黒の騎士団参戦の狼煙という内容であった。そして先程よりも銃撃音や爆発音、

それに暗くなつた夜の港に咲く花火のように、音のする方はやけに明るく灯る。その事に気を取られてミレイが我に戻り周囲を確認するも、シャーリーと女性の姿は見えなくなっていた。

「っんもう」

目標の人物に対してなのか、それとも自分に対してなのかため息混じりに悪たれ、この場から急いで駆け出した。鳴り響く銃撃音とKMFのランドスピナーのホイール音が徐々に大きくなり、戦場に近づいている事を脳へと認識させる。KMFの大きさから、通れない細さのコンテナ間を縫うように移動し二人の姿を探すが、彼女達も隠れているのか気配すら感じられる、焦りと共に自分に対する怒りと苛立ちが大きくなるのを感じていた。

「どこに言ったのよ」

周囲への警戒をしつつ、コンテナの死角と死角を移動するミレイの耳に入ってきたのは、何かを貫いたような破壊音とランドスピナーの回転音。コンテナの間から覗き見た先の場所では、三機のKMFの姿がミレイの瞳に映った。手前に紫の機体と、その奥に対している黒と紅の機体。

紫の機体——グロースターは体勢を崩し地面へと片膝をついた形で相対している。

黒の機体である昆虫のような頭部を持つ無頼改は、右手に持ったKMFのようなアサルトライフルの銃口をグロースターに向けて見下ろしている。

その後ろに立つ紅い機体である黒の騎士団の要である紅蓮式。角ばっている無頼改とは違い、丸みを帯び女性の裸体の様に滑らかな曲線美が、爆炎にてらされて自身の色の輝きを増していた。

——これはのんびりしてられないわね

そう思ったミレイは三機を気にしつつも、搜索を続けるために自身の右方向へと視線を向けた。

「あ……」

呟くと同時に思わず身を潜めたミレイの視線の先に、一人の少女が三機のKMFが戦っている方向を見ている立ちつくしていた。

——シャーリー……、やっとみつけた

急いで走り寄ろうとしたミレイであったが、すぐに目的のシャーリーの姿を見失うことになった。

「きゃっ」

あらぬ方向からの突風。一つの黒い機影がミレイ達の頭上を越えて三機の戦っているところへと舞い降りたそれは、ミレイは過去に何度か見た機体でもあった。

——あの白いのは！ いやそれより今はシャーリーを

白いKMFの登場により先ほどの位置にシャーリーはいなかったが、かわりにみつけたのは銀髪女性であった。その視線の先には間違いなくミレイの探すシャーリーの姿が……。

——シャーリー

ほっとしたのもつかの間、事態は急激に変化する。大きな衝撃音、

その後に響く地面を強引に滑らされ機体をコンクリートに削られる音がミレイの耳に届いた。無頼改が白いKMFに見事にやられコックピットブロックが、コンテナ郡を乱暴に跳ねやがてその動きを止める。それを見ていた白いKMFには、背後から別のKMFが飛び掛りコックピットブロックへ近づけさせないよう足止めをかけた。それはミレイが良く知っているナナリーが乗る機体。近接に特化した素の機体性能をいかし、白いKMFに距離を開けさせず間髪要れずに互いの攻撃の応酬を繰り返しながら、徐々にコックピットブロックから遠ざかっていく。グロースターと紅蓮式式の二機も互角の戦いを繰り返しながら、その音と共に小さくなった。

「――しが、お父さんの！」

戦闘の銃撃音に紛れて、かすかに聞こえた叫びにも似たその声を耳にしたミ礼は慌てて走り出す。そこには震えながらも必死に銃口をコックピットブロックに向けて、シャーリーが立っていた。駆け寄ろうとしたものの、銀髪女性の姿が見えないため迂闊に近づく事もできず、歯痒さを感じながらも今はシャーリーを観察する。

「そいつがゼロか」

その声の主は、シャーリーの後ろからゆっくりとコックピットから姿を見せている人影へと近づく。シャーリーは恐怖から来る物なのか、はたまた別の理由なのか体が震えておりただただ一点のみを見つめている。ミレイは二人の声が聞こえる位置は保ったまま、背後に周るように静かに歩みを進めた。

「学生自身がゼロだったとは……、しかもブリタニア人」

銀髪女性は低めに笑い声を上げ、自らの野望を口走る。ブリタニ

アの貴族になれる等と、女性は満足げな声色で淡々と一人話す。

「ふふふ」

ミレイが聞いたその笑い声は、銀髪女性とは違う聞きなれた少女のもの。手にした銃を地面へと降下させ静かに笑い声を上げている。

「ははは、あはははは、ルルが……ゼロ。仇、お父さんの」

肩を震わせ顔を空を仰ぎ、今まで聞いた事がないような大きな声で笑っている。狂気じみたその笑いに圧倒されていたのは、傍にいた銀髪女性だけでなくミレイも同じであった。

「あはははは」

変わらず笑い声を上げているシャーリーは、歩みを進めて銀髪女性の方へと近づく。その動きに銀髪女性は警戒を強めるも、それによそにしてシャーリーは女性とゼロ——ルルーシュの横を通り過ぎた。

「壊れたか？　そう言えばこいつはあの娘の男だったな」

そんな事を呟く女性の背後から、静かにシャーリーの落とした銃を拾いミレイは近づく。気を失っているとはいえルルーシュに触れたその女に対し、ミレイは冷徹なる青い炎を心の内に燃やししながらその銃口を女の後頭部へ押し当てた。その瞬間わずかに身じろいだ銀髪女性の体が、強張っていくのをミレイははっきりと確認した。

「動くな、名前と階級は？」

「私はヴィレッタ・ヌウ。騎士候だ」

「騎士候？戦闘に参加せずこんなところで何をしている」

「ま、待て。コーネリア総督に報告がある」

銀髪女性——ヴィレッタはミレイを軍人だと思っているのか、コーネリアに取り次ぐよう嘆願を始めた。だがそのどれも見レイ相手では無意味なことであり、ミレイは話し終えたヴィレッタに対し大きくため息を吐いた。

「理由はわかったわ」

「では」

願いが聞き入れられたと思ひ声色を高めたヴィレッタは、その場で反転しミレイの方へと向き直った。そこでヴィレッタの表情が一変する。なぜなら軍人と思って話していたのが、シャーリーと同じ制服を着た金髪の少女であったからだ。

「な……」

驚きで声を詰まらせたヴィレッタの表情が固まっている。それを見ながらミレイは、口の端をあげ魔女の様ににやりと笑みを浮かべた。

「あなたはルルーシュに触った。それだけで十分」

ゆっくりとミレイの右人差し指が、銃のトリガーを引いていく。

「ま」

口を開いたヴィレッタに言葉を最後まで言わせぬように、ミレイは一気にトリガーを引いた。歯切れの良い銃声音が響き眉間を貫か

れたヴィレッタは、そのまま紅い液体を飛び散らし港湾のコンクリートの地面へと倒れこんだ。ヴィレッタの瞳がゆっくりと閉じていき、無言の言葉をミレイへ向けて口を魚の様に動かしている。流れ出た液体が、コンクリートに染み渡り、黒い模様を描いていく。

「ふふ、さようなら。ヴィレッタ・ヌウ」

完全に動かなくなったヴィレッタを確認し、ルルーシュの方へと駆け寄った。数分後意識を取り戻したルルーシュであったが若干朦朧としていた為、この場に来ていたC・C.に無線連絡を頼み撤退の指示を下した。

そしてこの日を境に、アッシュフォード学園からシャーリー・フエネットが姿を消した。

無常 と 非情（後書き）

なかなか上手く表現できないなあと感じ、原作の設定とオリジナルの話が上手くかみ合わせられていないもどかしさがあります。

今後この作品は遅筆だと思いますが、ご容赦いただけると嬉しいです。

失ったもの（前書き）

うはー、ひっさびさの更新です。

ここから原作の流れをほぼ無視するかもしれませんが。

失ったもの

日本解放戦線が崩壊した港湾施設での戦闘から数日、いつもの様に穏やかな雰囲気に含まれているアッシュフォード学園ではあったが、あの戦闘の日を境に少しだけ状況が変わっていた。世界にとってはほんの些細なこと、しかし当人たちにとっては大きな喪失感が胸に大きな穴を開ける。

シャーリー・フェネットの行方が知れず実家にも帰っていない彼女を搜索するも、完全に足取りは掴めずにいた。それでもいつものように明るく振舞おうとするミレイではあったが、生徒会メンバーの表情は重くやがてミレイすらもその雰囲気に飲み込まれ表情を次第に暗めてしまう。

「そうですか。やはりまだなにも」

電話の向こうの女性は今にも泣き出しそうな声色で、ミレイの言葉に対しお礼の言葉を述べた。シャーリーが居なくなってからというものの、ミレイは何か情報が無いか毎日シャーリーの母親へ連絡をしている。アッシュフォードの力を使い、シャーリーの行方を捜して居る為その報告も兼ねていた。夫を亡くしさらに娘までと憔悴きつていた母親の力に、そしてなんて言おうと生徒会のメンバーとして好意をもっている友達の一人ということもある。

なにより修羅の道を進むと決めたルルーシュが、表面上は気丈に振舞っているのが目に見えてわかっていているからであった。

「いえ、こちらでも何も情報を掴めず申し訳ありません。はい……いえ、それではまた」

理事長室の机の上にある電話機に受話器を置き、一つため息をつ

いた。

「すまん」

ミレイは背を向けて窓の外を眺めて座っている祖父——ルーベン、謝罪の言葉をミレイに送った。それが何を意味しているのかわかっているミレイは少しだけ笑みを浮かべて、椅子の背もたれでこちらの様子は見えないはずである祖父に対してゆっくりと首を振った。

「んーん、無理を言ってお願ひしたのはあたし。お祖父ちゃんは気にしないで……ね」

祖父の背中へと言葉を投げ、ミレイは理事長室の重厚な木製の入り口へと歩みを進めた。歩く彼女には笑みは無く、あの日彼女の背中を追いかけなかったことを悔やむ。ため息と同時にドアを開けたミレイは、日が差し込む明るい通路に少し目を細めながら窓の外を眺めた。

青空を泳ぐ白い雲、遠目には政庁の姿と太陽光パネルの輝きがミレイの目に映しこむ。答えの出ない自問を繰り返しながら、ゆつくりと次の授業の為に教室へと向かった。時々すれ違う生徒の笑顔、友人と気兼ねなく他愛の無い話で笑い一日を過ごすのをうらやましく思いながら、学園一の人気を誇るミレイは偽りの笑顔を浮かべ声をかけてくる生徒達に向けて、その表情を振りまく。

——シャーリー、一体どこに……

祖父であるルーベンや黒の騎士団の情報網を使い、今現在もシャーリーの行方を追っているが未だになんの足取りも掴めていない。時間はただ無常に過ぎ、喪失感を抱えていても尚ルルーシユは歩みを進める事を止めない。この数日の間にも、自分のあずかり知らぬ

所でギアスを扱う存在——ギアスユーザーと対峙したと言う事をナナリーとC・Cから聞いていた。名前は忘れてしまったが、恐らく中華系の名前だった気がする。すでに二人によってこの世にはいないその存在について、今更自分が何をしようと意味がない事はミレイは理解していた。だからこそ、これからのルルーシュの為にという思いで今動いている。

ルルーシュは恋人である。その事は揺るぎないはずであるが、ルルーシュの中でシャーリーと言う少女の存在はそれなりに大きい事はなんとなく感じていた。それは不意に見せるルルーシュの表情が、別の人物を思い描いているのだと心で感じていた。

ミレイに宿る焦りを嘲笑うかのように、運命はたった一人の少女をミレイに差し出さないまま……季節はすでに秋も半ばを過ぎようとしていた。

失ったもの（後書き）

えー、章のとかをちょこつと変更します。

うふふー、もっと病んだお話になっちゃつかもね（笑）

2 - 1 (前書き)

突然ですが第2章って事で一転します。

タイトルも2章の1話目で2 - 1という・・・安易とか言わないで笑)

サブタイトルはナンバリングな感じにします

無機質な室内。必要最低限な物以外ない、ただ寝るだけに使われる部屋。ベットも固く慣れるまでは非常に寝苦しい。今でこそ苦も無く安眠ができるようになったが、最初の内はろくに寝付けず翌日の体調は最悪な事もしばしばあった。

「ふう……」

目覚ましにセットした気象の時間より、十五分ほど早く目が開いた私は備え付けの洗面台の所まで行くと、蛇口を捻り両掌に集め掬った水で顔を洗う。朝の冷たさと相まって、寝起きの熱気を帯びた顔を冷ますと同時に引き締められる。タオルで顔を拭き鏡を覗く。青いロングヘアの状態を、双眸のライムグリーンの瞳で確認する。寝癖がない事を確認すると、手の甲で髪を撫でて再びベットの方向へ戻る。

「おい、リーフェットオ」

無機質な灰色のドア越しに、名前を呼ばれ一言だけ返す。その返答を確認して一呼吸後にそのドアが横にスライドし、ドアの向こうに居た人物が部屋の中へと進入する。再びドアのスライド音が室内に響き外と室内を隔絶する。七分前と入ってきた人物には目もくれず、簡素な寝巻きを脱ぎベットの上へと放り投げる。

「綺麗な体だったのに」

背後から残念そうな声色が聞こえてきたが、とりあえず無視する

事にしている。今では下着姿のこの状態を見られても何も感じないが、ここに来て一週間くらいの時はその都度騒いでいた事を思い返すと少しだけ恥ずかしい。ぴったりと肌に吸いつく灰色のタイツスーツ、その上に肩や肘など弱点となりうる部位に黒のアーマーを着する。壁に付けられているホックに下げていたヘルメットを手に取り、ようやく入ってきた人物に声をかける。

「お待たせキヤル」

しばらくスルーされていたその女性は、気にしていない用で私のかけた言葉に微笑を返してきた。

キヤロール・バーパント——みんなからキヤルと相性で呼ばれている彼女は、私とは対照的な赤い色のショートヘアに目じりが少し釣り上がった鋭い目。その装いは女王様のようなSっ気を感じさせるが、意外と細かいところまで気の聞く尽くすタイプの女性を感じさせる面があり、そのギャップによって好意を抱いている男性は多いらしい。

「いいよ、それより早く食堂で朝食を取ろう。訓練が始まる前に」
「ええ。そう言えば今度私たちのような新人を、前線に派遣するらしいよ」

「ふーん」

「なんでかな？」

肩をすくめて、わからないわ、と顔で伝えてきたキヤルは扉の方へと歩き出す。私は目覚ましのスイッチを止めキヤルの後を追いかけた。

誰も居なくなった室内を隔離するように、ゆっくりとドアがスライドして行く。

扉の横のプレートにはリーフェットの名前と所属が表記されている

た。

ブリタニア軍第四種訓練生

リーフェット・ネーシャ

これが私の名前。第四種訓練生——それはKMFの操縦に特化した軍人見習いを指す。もちろん基礎訓練、銃火器の取り扱いに^{マシ}軍人格闘術も行われるが、重点されるのはKMFの操縦訓練である。士官学校や軍への入隊テストを受けた際、他の能力よりKMFとの愛称に秀でた者が第四種訓練生として扱われる。

入隊して三カ月程が過ぎ、強く眩しかった日差しは和らぎ徐々に肌寒さを感じさせる。

隣を歩くキャロルとは入隊当初から一緒に過ごすことが多く、今では大事な仲間でありライバルであり友達でもある。表情がころころと変わる彼女とは対照的な私。戦場に近いところに居る私にとって、その彼女の存在は少しばかり潤いを与える。

前線に投入されたのは入隊してから三カ月後の事であった。

2 - 1 (後書き)

ゆ「ということで、リーフェットさんです」
リ「どうも」

ゆ「いきなりで主人公っぽいけれど——」
リ「いい迷惑です」

ゆ「ちょ……」

深夜なので、ノリと勢いです(笑)

2 - 2 (前書き)

さあ、唐突に始まった第2章の2回目。
読者を置き去り気味だけど、ついてきてね♪全力で！

一体私は誰なのだろう。どうして私は軍に居るのだろう。

戦争——それは私の家族を……大切な人を奪った憎いもの。でも今はその戦争の中に身を置く軍人として生活している。

覚えていたのは名前と大切な人を失った喪失感、それ以外は何も覚えていない。艶のあるこの長く青い髪も、ライムグリーンの瞳も鏡に写るのが私なのかさえ戸惑ってしまう。頭の中の片隅に有る黒ずんだ靄。その靄へ近づこうとすると真つ黒い人の形をしたそれが、私の行く手を阻む。心の中にある恐怖が呼び起こされるのか、その黒い人影に捕まると同時に意識が現実へと引き戻される。

なんとなくその黒い人影が、私からすべてを奪った相手だというのを感じてはいた。あれを越えさえばきつと忘れている私の何かを思い出すことができるだろう。だけど今のままでは力が足りない。そう……絶対的な力だ。

大切な人を守るだけの力を……あははははは、アハハハハハハハハハハ——

「おい、リーフェット！リーフェットってば」

「なに？」

いつの間にか隣に並んで歩いていたキャロルは、少しばかり音量を上げた声を私の耳元で放っている。そんな大声出さなくても聞こえているよ、と思っていたのだが今の今まで上の空だった手前彼女には強気にでれない。

「まったく、さつきから何度も呼んでるのに——」

やはり何度も呼んでらしい。まったくそれが耳に入らなかったのは、きつといつもの様に頭の中にトリップしていたからだろう。

油断しているといつでも頭のその靄へ近づいてしまう。きつと本能ではその靄の中を除き見たいのだから。軍医の中の精神科担当からも同じように言われている。恐れながらも本心は渴望しているのだと。ただ無理矢理見ようとはせず、今は時期を待とうというのがいつもの回答である。

「ごめんキヤル」

抑揚のない声で謝る私。決して馬鹿にしているわけではなく、これが今の私——リーフェット・ネーシャの普通。今ではすっかりその事を理解し慣れている彼女は、私がきちんと謝罪をしている事をわかってくれている数少ない友達。といっても記憶のない私には、彼女が一番身近な同姓の友達である。

「今度うちら二人、E・U・のエルアラメイン地域の激戦区に派遣される事になったんだぞ」

彼女の表情には興奮、それ以外の感情が表れている。それとは対照的にほとんど変化のない表情の私、まったくもってつまらない人間だろうと思う時がある。記憶の失う前の私もこんな感じなのだろうか。

「軍人なんだもの、ずっと訓練生でいるなんてできないわ。いつかは派遣されるわよ」

淡々とした口調で答えた私の両肩を掴んだキヤロルは、二度ほど強く体を揺らしてきた。ガクガクと首が動かされ、危うく鞭打ちな

りそうだ。

「リーフェットー、もうちょっと喜んだっていいんじゃない？あそこは前線の中でもかなりの激戦区らしいし、期待されてるのかもよ」
「他のみんなは中東で残党兵駆除や、エリアーに派遣されたりだしたまたまよきつと。それに……」

「それに？」

「訓練生あがりをそんな激戦区に送りなんてしないわ。せいぜい後方待機とか、物資運搬が関の山ね」

「ほんとリーフェットって……」

先程の表情から落胆の色へと変えて肩をガクツと落としたキャラ。その姿を見るとちょこつとだけ悪いことをしたような気になる。実際、彼女を落胆させてしまったのだから私が悪いのだろうけれど……。

「ごめんキャラ、元気だして。訓練終わったらいつもの店の三段パフェごちそうするわ」

「まちで！」

先程の落胆が一変し、まさに歓喜という言葉が相応しいほど目を輝かせたキャラルの顔が、私の両目一杯を支配する。

近い——、と思ったものの私の両手を掴み満面の笑みの彼女を無碍にも出来ず、彼女の為すがままである。

結局訓練の集合場所であるKMFの格納庫へ着いたのは、訓練開始ギリギリになったの言うまでもない。

2 - 2 (後書き)

2章から読み始めてもだいじょーぶ(笑)
たぶんね・・・

2 - 3 (前書き)

どうも、ゆーたんです。
2章3話目になります。

「リーフェットは三番の機体だ」

「はっ！」

迅速に敬礼をし割り当てられたKMFへと搭乗する。KMFの背面にあるコックピットのハッチから垂れるアンカーに掴まり、自分の上部に位置するコックピットへと上昇させる。訓練用に整備されたこのKMFは、第五世代のKMFで現時点での主力であるサザランドである。本来はインディゴカラーではあるのだが、訓練用として区別するために全身が真っ黒に塗装されている。

一世代前の主力KMFグラスゴーより性能が向上した事に加え、高速移動時及び建造物間の移動に使用するホイールであるランドスピンナーによる超信地旋回が可能となり、戦闘における生存確率は格段に上がっている。また、第五世代搭乗とともにサザランドとグラスゴー用の近接武装であるスタントンフア等が実装され、対KMF戦を意識した武装へと変化してきていた。

「搭乗完了。各部パラメータチェック開始」

コックピットのタイプはシンプルな椅子に座るタイプであり、内部のマンマシンインターフェース《MMI》は各種前面と左右に展開されるディスプレイにレーダーやメーター類の球体状の装置。左右で対となる操縦桿、そして足元のフットペダル等でありブリタニアのKMFはほぼ共通の物を使用している。

今では慣れたもので搭乗後初期動作確認までは一分もかからない。入隊当初の、右も左も各部の機能も知らなかった時とは雲泥の差である。

「チェック完了、いつでもOKです」

手短に外部スピーカーを通して教官へ合図をする。周囲の映像をディスプレイへ反映させる為、頭部についたファクトスファイアが周囲の情報を採取してディスプレイへと映し出す。これがKMFを操縦する際に重要となる。これが壊されれば目を潰されたも同然で、周囲の情報を得る方法はない。そうなつてはコックピット内にある脱出レバーを引き、コックピットブロックをKMFから射出させ逃げるしかないのである。そうならない為に今の訓練が重要なわけだ。

「よし、いいタイムだ。では外へ出る」

腕につけた時計を確認した教官は、満足げに声を張り上げる。素早く右手を動かした教官を確認し、ペダルと操縦桿を確認した私はKMFを歩かせて格納庫の入り口の方へ移動を開始させた。

軍事訓練用の土地はかなり広い、ブリタニア本土全体の内少なくとも五分の一もしくは四分の一はあるのではないかと思うほど広い。様々戦況に依じれるようになっていくのか、平地や砂地、市街に山岳地域等土地が広い分様々である。北部にある山岳地域は天候の移り変わりが激しい時もあり、雨や雪に強風等割とハードな場所である。

第四種訓練生は、他の訓練生と違いKMFの訓練時間が非常に多い。もちろん軍隊格闘術や銃火器の訓練はもちろん様々な知識も叩き込まれるが、KMFの操縦や戦闘訓練に比べれば圧倒的に少なく、一般人より銃火器の扱いは慣れている、護身術に長けている程度の物だ。

「リーフェット、調子はどう？」

コックピット内のスピーカーより聞こえて来たのはキャロルの声。入隊してから三カ月近くが経ったとはいえ、私の事を気にかけてくれる彼女は戦場が似合わないと思うほど優しい女性だ。十五才から入学する事のできる士官学校、一般的に卒業までは平均四年は掛かるといわれている。もちろんその才能や成績如何ではもっと短い期間で卒業し、前線や軍の内部へ配属される事もある。キャロルは高校を卒業後に入学し、きちんと四年かけて卒業したある意味一般的な士官候補生といえなくもないが、ただ単にキャロルは学生生活を満喫するという目的の為に四年居たに過ぎない。本来ではもっと早くに前線へ行くことも、内部でのキャリアを積むことも出来たであろう。

前にどうしてもっと早く卒業しなかったのか聞いた所、自分のペーサーは崩したくないと言っていた。どこまでもマイペースなので、こんな私でも少しは呆れるという事を覚えた。

知り合いの中には、帝国最強の騎士と言われているナイトオブラウンズに名を連ねる者もいるとか、ラウンズ付きの直属部隊に配属されているとか言っていたような気がする。

「いつも通りよ。そっちは」

「同じく順調であります」

キャロルは少しおどけた口調で答える。今でこそKMFをほとんど手足のように操縦できるようになったのは、彼女のおかげといっても過言ではない。記憶もなく場違いなほど無知な私を、彼女は毎日訓練後に付き合い指導をしてくれた。そのおかげで今はKMFの操縦に一抹の不安はない……、あるとすれば――。

「お前達、訓練ポイントには到達したか？」

教官のいつも通りの厳しい声。ただ今日のはいつもとは違う雰囲気を感じていた。

「この三カ月……、お前達は私の訓練によく耐えてきた」

そう、なぜなら教官が私たちをねぎらったからに他ならない。

「今日が最後の訓練であり、今後各々は前線へと配置されるであろう」

ピツ、という機械音と共に前面上部のディスプレイに映し出されるのは、訓練ポイント周辺のMAPとそれぞれの初期位置。すべて数字が表示されていて、私の機体は三番の機体な為MAP北東部にある三のマークの所までと移動する。

いつも共に訓練しているチームは全部で六名。他にも第四種訓練生は居るのだが、ほとんど顔を合わせる事はない。訓練時間や内容、食事の時間も一緒に取るという事はあまりない。しかし今回はMAP上には北東と南西にそれぞれ九個ずつ分かれている。総勢十八名が同じ訓練ポイントに存在することになる。

「第四種訓練生全体の十分の一が、ここのポイントに集まっている。これは一対多の、集団戦闘の実技試験である」

いつも六人しか顔を合わせていないため、この十八人が全体の十分の一と聞かされたのも始めてである。つまり全体で一八〇人、六人で一組と考えると計三十組。なぜ今まで面識も顔合わせもしない訓練生が集まっているのか、その答えは教官が答えてくれた。最悪の答えを……。

「今から自分と味方以外を覗く全てが敵だ！最後まで生き抜け、それがこの訓練の課題だ」

その言葉を最後に、ブチッと通信が終了する。不気味なほどの静寂がコックピット内を占める。キャロルへ通信を開こうにも、妨害する電波を発生させているのかノイズがひどい。

だめか、などと思っているとやがてその静寂が震えんばかりの驚愕へと変わる。

ピッ、という聞きなれた音。MAPのモニタを確認すると青いマークが自分を示す三と、南西に固まっている集団に居る五が青くなっている。事前に取り込むときに伝えられる番号は、訓練が始まった時から訓練中は口外しない事を義務付けられていた。

そう……この段階で誰が味方なのか不明、という事になる。そしてそれよりも驚くべきは、自分の周囲に居る八機すべてが敵という事になる。

今まさに、第四種訓練生最後の訓練が始まろうとしていた。

2 - 4 (前書き)

久々すぎる登場です。

みなさんこんにちは。

地震の影響は大丈夫でしょうか？

まだまだ油断は禁物です。

最初の爆発が起きたのは、モニタ上のマークが味方と敵をはっきり示してから二分後の事。自分も含めて動けずにいたが、その中の一機がゆっくりと姿勢を変えて右手に持つアサルトライフルの銃口を隣のKMFへと向ける。いつもであればペイント弾が装填されている、それが全員の共通認識であった。まさにそこが盲点という事に気づけた者がいただろうか……。

戦闘・・・死。すぐに動けた人間が何人いるのだろう。まるでさび付いた鉄のように、体が硬直し震え固まる。すぐ近くで爆発したはずなのに、その音すら耳には入らない。破壊されたKMFから立ち上る黒煙、舞散る残骸。

その中には、KMFに乗っていたであろう訓練生の残骸もあったのだろうか。などと考える思考と同時に無理矢理にでも体を動かさうとする本能が、錆びた骨の悲鳴をあげる体を無理矢理に動かし気体を操縦する。ランドスピナーの性能上真横への水平移動は不可能である。

咄嗟に左のスピナーだけを前転させ機体の向きをかえ、今まさに向けられている銃口の斜線上から外れる。

明確な爆発音、自分の機体の後方で爆発し生まれた新たな残骸。周囲の機体数が表示されるモニタに目をやると、最初に破壊された二番、先程後方で爆発した十四番。そして新たに破壊された十三番の機体マークが消失している。

「はぁ……はぁ……」

先程よりは落ち着いてはいるが、それでも動揺は拭い去るには至っていない。

次々に聞こえる銃声や打撃音、ランドスピナーの咆哮を聞きなが

ら汗ばみ冷たくなった両手で操縦桿をぎゅっと握る。無機質な質感と、妙に手に馴染むづくりのそれをひたすら強く握る。フラッシュバックするのは、大切な人を失った悲しみ、なぜか顔を思い出せない失ったその人と思う。

大切な家族を奪った黒い影。全身黒に統一されたそれが振り向き、目と目が合わさる。

あなたは――！？

「いやあああああ」

外部スピーカーになっていた事も知らず、ひたすら叫んだその声。モニター越しに映る周りの機体の動きが一瞬だけ静止する。

「……お、……い」

世界の全ては暗転し、目の前にはフラッシュバックした黒い人物が映し出され、その口からは無意識に小さく声を繋ぐ。過去の記憶をほとんど失った中で思い出すその人物が、現実にあつたからなのかそれとも想像の産物か、銃口をこちらにむけて右手の人差し指をトリガーにかける。ぎりぎりと鳴るトリガーが引かれる音、その音を感じたと同時に即座にKMFを前方へと突進させた。銃口をはずすように蛇咬しながら、自分の口から放つ咆哮と共に訓練機のサザーランドにも標準装備されているスタントンファを右手外側前方へ展開し、それを一気に黒い人影の頭へと一気に振り下ろす。

「この！このオオ！！」

頭部を叩いてもまだ動くそれに対し、今度は心臓部分目掛けて右手のスタントンファの先端を突き刺す。同じ様に展開させた左手の

スタントンファと交互に何度も何度も突き刺す。やがて貫かれたその人物は少し間を置いて爆音と衝撃と共に爆散した。それによって受けた機体の損傷はわりと大きいが、今気にするべきはそこではない。

「まだ…… まだこんなにいる。うふふ、あはははは」

ピピっという音と同時に、周囲に落ちているKMF用のアサルトライフルがモニタに映し出される。戦闘開始時には持っていたはずの自分のアサルトライフルは、いつの間になくなっていたためゆっくりとした動きでそれを拾いに向かう。

その行動事態は隙だらけであり、格好の標的となりえるはずなのだがモニタでまわりを見ても攻撃してくる気配は感じられない。むしろ硬直していると言った方が正しいように感じる。

落ちているアサルトライフルを自分の機体の武装に設定し装着する。慣れた操作で弾倉を一瞬抜き弾数を確認する。まだ十分に弾が入っている事を確認するとすぐに装填させる。

直後に背後から聞こえてきたスキル音に反応するように、その場で旋回させ接近するKMFを前方に捉える。すでに向けられている銃口が火を噴き、連続で銃弾がこちらへと飛び込んでくる。すぐ様操縦桿を操作させ、KMFに回避行動をとる。後方に左右に蛇咬を繰り返しながら移動するものの、機体から伝わる振動により、その銃弾の内数発は機体に傷をつけられた事を感じ取った。

相手の攻撃は的確で、回避した方向へすぐ修正し無駄に弾を撃つことはしない。

しまった——— と思ったときには、アサルトライフルを持つ右腕関節部分が銃弾で貫かれていた。連弾を浴びせられた右腕は煙を上げると同時に爆散する。コックピット内の機体の状態を映すモニタにも、赤い点滅で示している。

どんな状況下でも冷静に判断、対処することが最善であるという

教官の教え通り、右手を失ったリーフェットは自分でも驚くほど冷静な脳の支配下に置かれていた。むしろ、右手を失い理性を取り戻したほうが正しいのかもしれないが。

一瞬の隠れ蓑として、右手が爆発したと同時に起きた噴煙に重なるように機体を隠す。

今、この瞬間だけは右腕を失ったリーフェットと相手の優位性はゼロに戻っている。この好機を逃すまいと、リーフェットは思考を巡らせサザーランドを前へと加速させた。右腕と胸部の間にあるスラッシュハーケンを、煙の先へと射出させる。発射音と共に機体とを繋ぐワイヤーを伸ばしながら真っ直ぐに飛んで行く。

ガキンと横に弾かれた感触、突き刺さるではなく弾かれたと確信したリーフェットは相手の位置を予測。ランドスピナーを使い前進させながら、機体の姿勢をさげる。片膝をつくような低姿勢で滑走するサザーランドのやや上方を、煙の向こうから飛び出してきた銃弾が掠め舞う。

「今度こそお！」

叫びと共に煙の向こうに飛び出したリーフェットが見たのは、銃口をやや上向きに構えている相手のサザーランド。すぐ様左胸部のスラッシュハーケンの角度を調整し、アサルトライフルを持つ相手のサザーランドの右腕目掛けて射出させる。相手のサザーランドが照準を調整する刹那の時間、先に射出されたハーケンがアサルトライフルを弾き飛ばした。

完全に無防備になったサザーランドを沈める事は容易く、左手のスタントンファで二度三度と叩きこみ最後は胸部を一突きにされ完全に機能を停止した。

2 - e n d (前書き)

てなわけで、この2章ラストになります。

2 - e n d

赤く短い髪を揺らし、靴底を鳴らしながら無機質な廊下を一人歩いて行く。一定のリズムを刻むその音が、廊下の奥へと反響する。

『第二調整室』と書かれたプレートのあるドアの前に立つと、刹那の間隔後に左の壁へとその姿を吸い込ませて、来訪者を室内へと誘う。室内は様々な波形やデータを映し出すモニタや機材類が並べられていた。ドアのスライド音に反応に、モニタの前に座っていた二名の白衣の人物が来訪者の方へ向き直る。簡易な敬礼を交わし再びモニタへと視線を戻した。

「様子はどうかしら？」

赤髪の来訪者は、部屋の中央に置かれたベッドの上で眠っている少女が映し出されているモニタを覗き込む。

ブリタニア軍第四種訓練生同士で行われた最終訓練が終了し、その中で生き残った数名が同じようにベッドの上で治療を受けている。

「今の所は安静……という所ですが、目覚めた時どうなるかは」

「そう。でも私の目に狂いは無かっただろ？あの戦闘での動き、自分より上回る操縦技術の相手にも臆する事無く、そして勝ったあの姿を」

「はい。キャロル大尉の読みは的中しましたね」

キャロルは得意げに鼻を鳴らすと、デスクの上においてあるファイルを手にとった。第176試験体と書かれたハードカバーのファイルを開くと、試験体となった少女の写真と名前が記載されている。今までの経歴等が網羅されたその資料を、興味なさげにページを捲っていく。

家族構成やどこから集めてきたのか交友関係等が網羅されている。パラパラと捲り最後のページまで目を通したキャロルは、最初のページへ戻ると彼女が笑顔で写る写真をじっと見つめた。栗色の長い髪を指でなぞり、双眸に透き通るライムグリーンの瞳をじっと見つめる。

綺麗と言うよりもかわいいという言葉が似合う笑顔、そこから最も遠い場所が彼女の今の居場所。そう思うとこみ上げてくる感情に口元を歪めて、手に持ったファイルを閉じてそっとデスクの上に置いた。

今のキャロルには彼女の過去がどうなろうと、自分の目的の為にはどうでもいい事である。

——リーフェット……ようやく、ようやく君を取り戻せそうだよ

眠っているリーフェットが映るモニタをじっと見つめ、キャロルは静かに目を閉じた。

大尉という肩書きを持つキャロル・バーパント。彼は第四種訓練生としてリーフェットに近づいていたが、正確には違う。各第四種訓練生につけられる担当の一人であり、表立って知られていないブリタニアの研究機関に属する軍人というのが彼女の本当の姿。

素質のあるもの、いなくなっても問題無い人間を連れてきては人体を使った実験を行っている。肉体に限らず精神や脳までもいじる非道な彼等の存在はブリタニアでも一部の人間しか知る者はいない。表立って目立つのはKMFの開発する部門。それとは反対にキャロル達は、KMFではなく兵隊を開発する部門である。

——試験体の中で瞳が彼女にそっくりな君を見つけた時、私は信じていない神に感謝を述べた程興奮した

「大尉」

白衣を着た一人が、波長が表示されているモニタを見ながら淡々とした口調でキャロルを呼ぶ。キャロルがゆっくり近づくと映し出されている波長が徐々に変化を始めているのが見て取れた。

「この波長は？」

「第176試験体の意識が戻ります」

「そうか」

キャロルはベットが映し出されているモニタに視線を移す。かすかにだがベッドで寝ているリーフェットの体が微妙に動き始めている。その彼女をモニタ越しに見つめながらキャロルは静かに口を開いた。

「さようなら、シャーリー・フェネット……。おはよう、リーフェット・ネーシャ」

モニタに背を向けたキャロルは、目覚めたリーフェットがいる隣の部屋へと歩みを進めた。

若き日に戦場で失った親友を再び手に入れるために……。

2 - e n d (後書き)

2章を書き始めた段階で、もうみんな気づいてましたよね（笑）
リーフェットはシャーリーのアナグラムなんですよー。
なんか名前が思いつきませんでした。

次ぎは3章ですが、学園祭以降から1期ラストになる予定です。
本当はいきなりR2の所から書きたいくらいなんですよね。
ユーフェミアの扱いやスザクの扱いどうするか悩みます。

3 - 0 (前書き)

導入部分な感じなので、短いです。

「よくやった、シュタットフェルト。帰艦してよい」

スピーカーから漏れる抑揚の無い声が、コックピット内に響く。モニタとレーダーを確認し周囲に敵機がない事を確認するとゆっくりと口を開く。

「イエス・マイ・ロード」

忌み嫌う者に従うための言葉を口にするたびに、齒痒さと悔しさを胸の奥で押し込めながらカレンはゆっくりと母艦へと進路を向けた。

自分の髪と同じ紅いボディをしたKMF『紅蓮』を駆る彼女は、ふと遠い日の事を思い出す。

「あれから四年……か」

紅月カレンとして、黒の騎士団として過ごした日々。学校の生徒会メンバーとして、カレン・シュタットフェルトとして過ごした日々。今ではもう遠い過去の事。今でも思い出し枕を濡らす事もあるが、今はできる事をするしかないと覚悟を決めている。人質として囚われているみんなを救う為には、ブリタニア軍所属のカレン・シュタットフェルトとして功績を上げなくてはならない事を、十分すぎるほど理解していた。

一黒の反逆《Black rebellion》と呼ばれた黒の騎士団の反乱は、黒の騎士団を率いていたゼロが死亡と言う事で幕を閉じた。

あれから四年、矯正エリアに格下げになった元日本であるエリア十一にカレンは配属されていた。

3・0（後書き）

いきなりな展開ですけど、楽しみにしてくださいな

3 - 1 (前書き)

もつ完全にオリジナル無視で好き勝手やっちゃいまーす♪

着艦したカレンの操縦するKMF『紅蓮』は、他に搭載されているKMFより明らかに強い色を放っているまさに異色のそれ。さらにそれに乗るカレンのパイロットスーツも紅蓮と同じ色であり、持ち前のプロポーションも合わせて他の兵士達からいろいろな目で見られている。

「ふう……」

様々な思いをこめてため息を漏らす。この行為もすでに毎回の事であり慣れたものである。

「あゝシュタットフェルト」

この艦を指揮している上官の男が格納庫から船内への通路の入り口に立っていた。自分の体を舐めるような視線に、少しだけ浮つく笑みを浮かべる口元。それだけで吐き気と怒りがこみ上げてくるが、奥歯を噛み締めそれをぐつと堪える。

「この後どうかね？打ち合わせでも」

このエリア十一に配属されてからと言うもの、上官からは何かしら誘いの言葉を投げかけられる度に、ブリタニア人の醜態さに怒りを覚える。そんな彼等の下につく事しかできない自分の不甲斐なさも同時に感じさせられていた。

こんな場所からは一刻も早く去りたい、その気持ちだけで彼の言葉を素通りし足早に彼から距離を開ける。背後から聞こえた鼻を鳴

らす強がりな声を聞き流し、すぐ様間内のシャワー室へと向かった。

スイッチ一つで設定した温度のお湯が天井の噴出し口から、体へと注ぎ流れる。顔を上に向け、全身で浴びるシャワーはほんの少しだけ戦いの疲れを落としてくる。そして自分の希望も絶望も……。

今はブリタニアの軍族とはいえ、元黒の騎士団のメンバーだと言う事はブリタニアの一部の人間にしかばれてはいない。そしてこの艦の中に、一兵卒として送り込まれている一部の人間が監視している事をカレンは知っていた。機密情報局……月に1度みんなと通話できる機会の時に顔を合わせる彼等から、上官に体を触られ感情のまま殴りつけた事を機密情報局の人間が知っていた。それはまだ配属されて間もなくの事で、自分もみんなも結局は捉えられている状況に代わりがない事を再認識した。

——このシャワー室も監視されている……

始めの内は恥辱を感じたものの、今では見たいなら見れば言いと開き直れている。みんなを守る為なら体を見られる事などたいした事ではなかった。

私がみんなを守る、救ってみせる、それが今の私のすべてでその為にブリタニアの犬に成り下がった。成り下がってでもみんなを見捨てる事なんてできやしない。

——ゼロ……いえルルーシュ

あの最後の日、彼——ルルーシュの妹で盲目に足が不自由だと思っていたナナリーから聞いたゼロの正体。未だに信じられない。いや今までの疑問点をつなげるとルルーシュがゼロという可能性はかなり高い上、妹のナナリーに言われたとあつては信じるのが正しいのかもしれない。

——それでもあたしは……

信じたい気持ち半分、直接ルルーシュに会って問いただしたい。
だがルルーシュやナナリーの居場所は不明であり、確かめるすべが
無いのが現状なのだ。

「だめだめ」

シャワーを止めて顔を左右に振り陰鬱な感情を振り払う。別のスイッチを押し今度は室内の壁から温風な風が吹きだし、全身の水滴を弾き飛ばす。ドライヤーいらずで髪も乾かすと、室内に設置されている密閉扉を開き、衣類と下着を取り出す。しゅるしゅると生地の擦り合わさる音を聞きながら、素早く着替えシャワー室のドアを開けた。

3・2(前書き)

しゃきーんと、33話目投稿です。

エリア十一に住む元日本人、矯正エリアとなり今までよりさらにひどい扱い仕打ちを受けている。そんな日本人から全てを吸い上げて築かれ、さらに反映を極めたトウキョウ租界。外壁の内側沿いに張り巡らされたモノレールが、車を持たないブリタニア人の移動手段である。

KMFを操縦できるカレンも車の免許も車も無いので、モノレールを利用している。

便利とはいえ、外壁沿いにある電車が未だに苦手である。なぜなら電車を境目に国を追いやられたイレヴンが住むゲッター地区と、ゲッターから全てを吸い上げて作り上げられた租界を窓の左右から見えてしまう。それでも、あえて私はゲッターが見える側に立つ。いつまでも忘れない為。何の為に立ち上がり何の為に……。

手すりを握る力が強まり、いつの間にか掌にじつとりと汗をかいていた。その汗をハンカチでふき取ると何箇所もあるトンネルの一つへとモノレールが進入する。今まで映し出されていた外の景色はなくなり、車外より明るい車内が自らの光で窓ガラスを簡易的な鏡へと変える。

——左右の入り口に一人ずつ。この車輛以外にもいるかもしれない。それでも最低二人……か

一瞬だけ私と目が合ったのを見逃す事はしない。街に出るときに必ずいる尾行者の存在は最初こそ鬱陶しい存在であったが、もう気にも止めていない。ただし、たまにはそれに逆らって見たくなるのも女心つてものである。

すでにルートは決めてある。前日からどの道を使って尾行者を撒くか思考を巡らせていた。モール街の大通りと裏道をジグザグに走りぬけ、最終地点は……。

「まだ……まだゆつくりと」

モール街の最寄り駅に到着し電車を降りたカレンは、はやる心臓を押さえつけゆつくりと階段を降り改札へ向かう。接触型の電子マネーカードで改札を通り抜け、モール街の方向を示す案内板の矢印の方向へ足を進める。作戦開始のタイミングは一瞬。構内を出て外へ曲がるその一瞬、尾行者から完全に死角となるその瞬間だ。

——今だ——！！

死角となった瞬間、力強く地面を蹴りだす。と、同時にカレンは自分の周囲で敏感に反応したブリタニア人を確認した。先まわりし待機していた人間、それも想定の内と心の中で叫び迷わず人々の間をすり抜ける。すでにカレンの意識は次の曲がり角、尾行者も鍛えられている軍人なのか差が広がっているようには感じられない。走って追ってくる足音が背後から聞こえてくる。

後ろを振り返る事をすれば、意図的に尾行者を撒こうとしていると後で言われかねない為、カレンは一切後ろを振り返らない。振り返りさえしなければ、ただ急いでいたと強引にごまかす事もまかり通るからである。

ある程度大通りを走りぬけたところで、細い裏道へと入る。一本道ではなくあえて入り組んでいる裏道へ。右に左に意味もなく曲がり、尾行者にとっては姿が見えず足跡のみで追いかけてはいけない状況を意図的に作る。

——もうすぐ見えてくるはずなんだけど……

目指すのはトウキョウ租界にある大きな図書館。ブリタニア人が利用するための施設であり、そのブリタニア人ですらあまり利用していない公共の施設。この裏道はその大きな図書館の裏側に面しているため、カレンはそこを目指している。以前図書館に面する表の通りから裏道をのぞき見た際に、一階としては割と高めに滑り出し窓が開いているのを何度か見ていた。どの部屋の窓なのか、前に図書館へ来た時に見て回った時には不明であったが、一時的にでも身を潜めるには適している場所だと思っている。

やがて他の建物より横幅の長い面に差し掛かったカレンは、視線を上上げて確認する。

「やっぱり」

思惑通りに窓は外側へと開いていた。カレンは決心を決め一瞬だけ背後を探る。尾行者の姿は無い。今だ、という思考と同時に、右足で地面を踏み込み体を浮かせる。次に左足で壁を蹴り、さらに上昇させたその体から精一杯窓枠へ右手を伸ばす。力強く窓枠を掴みそのままの勢いを利用し右足と壁に接着し左手を窓枠へ。細身である為難なく体を通すことができたが、やはり胸の部分が苦しかったのは言うまでもない。そのまま内部へと侵入したものの、頭から重力に引かれて体が落下を始める。両手で受身を取るものの、木登りに失敗した猿の様な情けない格好で着地した。窓からは壁一枚向こうの道を僅かな音を鳴らす足音が複数。

「やったあ」

大声で叫びたい衝動を抑え、小さな声で喜びを口にした。しかしその直後すぐに脳裏を不安がよぎる。捕らえられているみんなが、今の行動で罰を与えられるのではないか。そう思うとなんと軽率な

行動をしてしまったのかと小さな震えと、冷たくなる心臓の鼓動がカレンに押し寄せた。

「やれやれ、変な所から入ってくるお客さんだな」

カレンはビクツと体を強張らせ、声のしたほうへとゆっくり顔を向ける。カレンの右側にある本がぎっしり詰まった本棚から人影が姿を見せた。黒のスラックスを履き、白のワイシャツに紺のネクタイ、下に流した黒髪ショート男性。アンダーリムタイプの黒縁メガネのブリッジを、右手の中指で押し上げ双方のレンズ越しにカレンを見下ろしている。

その人物は、四年前のあの日から行方不明であり、カレンの中で浮かび上がる様々な問を投げかけたい相手であるまさにその人物。あまりの事に声が出ないカレンをよそに、最初に言葉を発したのは彼の方であった。もちろん聞き覚えの有る声で……。

「カレン?……カレンじゃないか」

その言葉に暫く反応できずにいたカレンであったが、無意識の内に彼の名前を呼んでいた。

ルルーシュ……と。

3 - 2 (後書き)

次回も、サービスサービス(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7540n/>

コードギアス 叛逆の狂奏愛歌

2011年4月14日22時18分発行